にちぶんMOOK
日本文芸社



# 剣豪
# KENGO

## 流派と日本刀

### 幕末江戸三大道場と志士たち

A faction and a Japanese sword

国宝の刀は何が違う?
**戦国武将の名刀**

**「北辰一刀流」**
坂本龍馬／清河八郎／山岡鉄舟

**「神道無念流」**
桂小五郎／高杉晋作／芹沢鴨

**「鏡新明智流」**
武市瑞山／中岡慎太郎／岡田以蔵

**新選組と「天然理心流」**
近藤勇／沖田総司／土方歳三

**幕末の暗殺者たち**
岡田以蔵はなぜ「人斬り」たり得たのか?

**二天一流のリアル**
宮本武蔵最強説は本当か?

たった一人の剣聖
**上泉信綱**

**戦国時代の剣術**
塚原卜伝／柳生十兵衛／伊藤一刀斎

流派・道場・
剣術から見る
**幕末&戦国時代**



にちぶんMOOK
日本文芸社



# 剣豪
## 流派と日本刀
### 幕末江戸三大道場と志士たち

# KENGO
A faction and a Japanese sword

国宝の刀は何が違う？
**戦国武将の名刀**

「北辰一刀流」
坂本龍馬／清河八郎／山岡鉄舟

「神道無念流」
桂小五郎／高杉晋作／芹沢鴨

「鏡新明智流」
武市瑞山／中岡慎太郎／岡田以蔵

新選組と「天然理心流」
近藤勇／沖田総司／土方歳三

幕末の暗殺者たち
岡田以蔵はなぜ「人斬り」たり得たのか？

二天一流のリアル
宮本武蔵最強説は本当か？

たった一人の剣聖
上泉信綱

戦国時代の剣術
塚原卜伝／柳生十兵衛／伊藤一刀斎

流派・道場・剣術から見る
**幕末＆戦国時代**



剣豪 流派と日本刀 幕末江戸三大道場と志士たち

平成27年4月20日発行
編集人●西島和彦
発行人●中村誠
〒101-8407 東京都千代田区神田神保町1-7
☎【編集】03-3294-7164【営業】03-3294-8944【広告】03-3294-8937
発行所●株式会社日本文芸社





図書印刷株式会社
雑誌67556-83
定価 本体743円 +税
ISBN978-4-537-12241-1
C9421 ¥743E

KENGO

A faction and a Japanese sword

幕末江戸三大道場と志士たち

# 剣豪 流派と日本刀

流派・道場・剣術から見る

## 幕末&戦国時代

革命家
暗殺者
政治家から
剣聖まで



# 目次

KENGO
A faction and a Japanese sword
流派・道場・剣術から見る
幕末&戦国時代

## 第一章 7 幕末江戸三大道場と志士たち


8 現代に息づく剣術の魂
北辰一刀流 玄武館
妙見菩薩に護られし合理の剣

20 神道無念流 有信館
剛にして、縦横無尽の必殺剣

14 玄武館◉千葉道場
「技の千葉」と呼ばれた北辰一刀流

16 北辰一刀流の剣豪たち
坂本龍馬／藤堂平助／山岡鉄舟／山南敬助／清河八郎

24 練兵館◉斎藤道場
「力の斎藤」と呼ばれた神道無念流

26 神道無念流の剣豪たち
永倉新八／芹沢鴨／品川弥二郎／桂小五郎／高杉晋作／伊藤博文

30 士学館◉桃井道場
「位の桃井」と呼ばれた鏡新明智流

32 鏡新明智流の剣豪たち
中岡慎太郎／武市瑞山

34 心形刀流
隻腕の剣士 伊庭八郎

36 幕末の三剣豪
男谷信友／島田虎之助／大石進

38 天然理心流
新撰組が振るう剛剣

40 天然理心流の剣豪たち
近藤勇／土方歳三／沖田総司

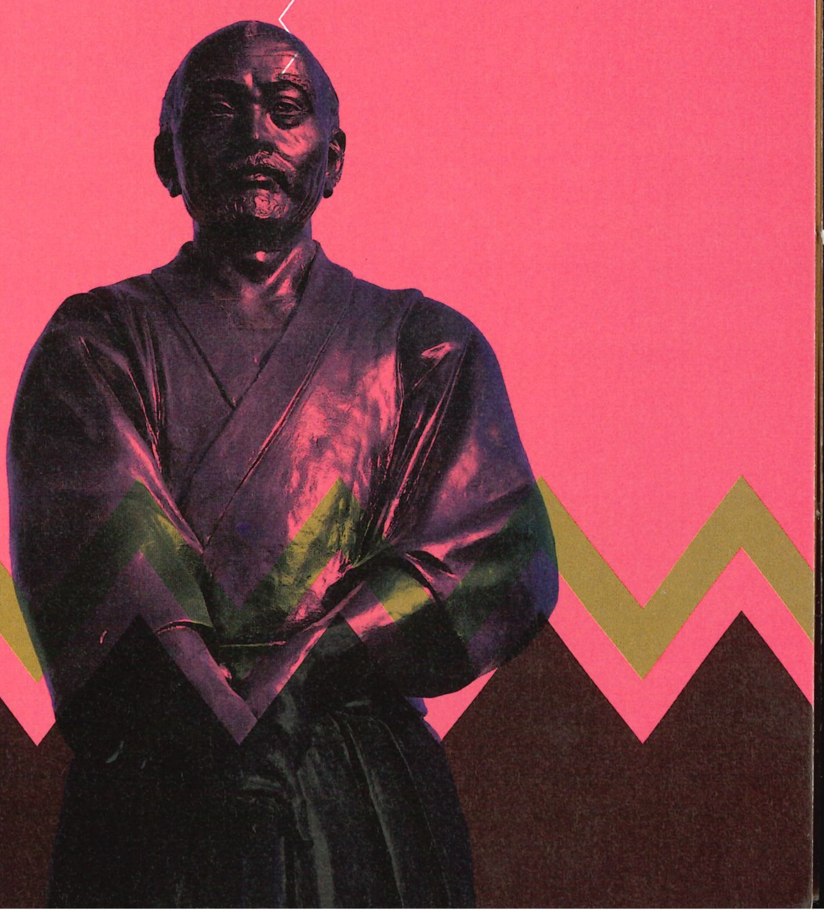
42 新撰組で一番強かったのは誰だ？

44 無外流
真理以外、何も存在しない
斎藤一／山内容堂

46 薩摩藩と示現流
二の太刀要らずの剛剣

48 幕末の暗殺者たち
岡田以蔵／田中新兵衛／桐野利秋／佐々木只三郎／河上彦斎

52 坂本龍馬と剣術の終焉
剣術から近代武器への転換

## 第二章 53 日本刀 ～国宝・名物・業物～


54 武士の魂が宿る日本刀
奥深き日本刀の世界に触れる

56 天下の名刀・大包平
国宝にも指定された最強の日本刀

58 武士の魂が宿る日本刀
土方歳三所用◉和泉守兼定
坂本龍馬所用◉陸奥守吉行

60 龍馬を斬った刀
桂早之助所用◉越後守包貞
今井信郎所用◉山城守源一法

62 戦国武将の名刀
源頼光所用◉童子切安綱
石田三成所用◉石田正宗
上杉謙信所用◉備州長船住景光
黒田如水所用◉長谷部国重

66 「妖刀」と呼ばれた村正
徳川一族にあだなす呪われし刀

68 虎徹と大業物
誰もが憧れる「最上大業物」の刀

70 日本刀 その進化の歴史

72 剛刀・同田貫
「武器としての刀」を極めた

KENGO
A faction and a Japanese sword

# 第一章 幕末江戸三大道場と志士たち

最盛期には七百余。
江戸時代には多くの剣術流派がひしめいていた。
技の千葉、力の斎藤、位の桃井。
のちに「江戸三大道場」として評価を高めた三つの道場は
時代を動かす剣豪たちを輩出した。
彼らはそこで何を学び、何を勝ち得たのだろう？
その生き様を追う。

幕末江戸三大道場と志士たち
剣豪 流派と日本刀
流派・道場・剣術から見る
幕末&戦国時代





## 目次

第三章 73 江戸時代&戦国時代の剣術

74 開祖・宗厳の剣技を高めた宗矩の辣腕 柳生新陰流とは？

76 剣客オールスターによる夢の最強決定戦！ 寛永御前試合

78 兵法の道を求めて放浪した伝説の剣客 武蔵と二天一流

82 乱世を生きた戦国人たちが編み出した「介者剣術」 関ヶ原以前の剣術

84 戦国の剣豪と呼ばれた天賦、ここにあり 乱世を生きた武芸者たち 伊藤一刀斎 神子上典膳 丸目長恵

86 鹿島が生んだ伝説の神剣 塚原卜伝

88 天下無双の剣聖 上泉信綱

90 兵法流派系図

91 同時代の剣豪たち

92 物語の中の必殺剣

96 剣術&流派 分布マップ

KENGO
A faction and a Japanese sword
目次
流派・道場・剣術から見る
幕末&戦国時代

# 北辰一刀流

# 玄武館

## 妙見菩薩に護られし合理の剣

実践精神に基づいた卓抜の技術と因習を打ち破る革新的な教授法。その道統は剣の近代を切り拓いた。

北辰一刀流玄武館六世宗家◉小西真円氏

### 神秘を超えて実践へ——剣の徒を魅了した教え

江戸後期に乱立した剣術流派を代表する名門として天下に勇名を馳せた北辰一刀流。「剣術」そのものについて回るややもすれば霞がかった神秘的・閉鎖的な側面を捨象し、具体的で進取の気風に満ちた革新的ともいえるその教えは、竹刀剣術全盛の時代に大きく花開き、やがて今日にまで至る現代剣道の礎を築くことになった。

開祖・千葉周作成政は、希代の剣客として今も畏怖をもって語られる存在のひとりだ。後世、司馬遼太郎の名作『北斗の人』をはじめ、多くの時代小説や大河ドラマの題材となり、或いは千葉道場を舞台とする漫画『赤胴鈴之助』などを通して、その名はさらに巷間親しまれるところとなった。

奥州陸前気仙村（現在の岩手県陸前高田市）に生まれた周作が江戸日本橋品川町に北辰一刀流の看板を掲げ、玄武館道場を構えたのは文政5（1822）年、28歳の時のことである。

「北辰一刀」の流派名は、千葉家の家伝である北辰夢想流と一刀流剣術の源流・伊藤一刀斎とに由来する。幼くして父祖伝来の剣術に親しみ、やがて江戸に出た周作は小野派一刀流の分派である中西一刀流に学び、浅利又七郎義信より免許皆伝を受ける。浅利家とは養子縁組まで し将来を嘱望されるも、自らが志す理想の剣術を求め、義絶。修行の旅に出た周作は、各地で他流の使い手たちと剣を交え、特に高崎での馬庭念流との確執により、一躍名声を得ることになる。

江戸に帰還し北辰一刀流の旗を揚げた周作は、文政8（1825）年、玄武館道場を神田於玉ケ池に新築し、居を移した。八間四方、38 00坪ともいわれる豪壮な新道場には、「他の道場で10年掛かるものを5年で仕上げる」と評された平明で具体的な教授法の評判を聞いた







### 北辰信仰と月星紋

開祖の千葉家では代々、北辰（北極星・北斗七星＝妙見菩薩）を信仰対象とし、生活の原理としてきた。北辰は「真理を見通すもの」とされ、奈良時代から武士の間で広く信仰されてきた。星と月を象った家紋は「月星紋」と呼ばれ、北辰一刀流の代名詞ともなっている

# 現在に躍動する古流の息吹き――

入門希望者が殺到、門弟はその数三千六百余人を数えたという。

その稽古で特徴的なのは、組太刀（形稽古）と竹刀剣術の一致にあった。構えなども比較的自由に取らせるなど、古い因習を排し、ひたすら技術の習得と防具を用いた竹刀稽古での実践に重きを置くプラグマティックな教授スタイルにより、北辰一刀流は新しい実戦型剣術として爆発的に流行する。その興隆ぶりは、神道無念流の練兵館、鏡新明智流の士学館と並んで、江戸三大道場として玄武館の名を轟かせるに至った。

各藩から剣術指導委託を受けた北辰一刀流には、三十を超える藩から意気盛んな藩士たちが集い、鎬を削った。また、周作は武士階級に限らず町人・商人層にまで広くその門戸を開いた。その慧眼は、やがて来る新時代を見据えた先見の明に溢れたものだったと評価されている。

## 動乱の世に異才たちを送り出した名門の道統

周作引退後、道場を継承したのは周作の次男・栄次郎。若き山岡鉄舟を打ち砕き、北辰一刀流に入門させるきっかけを作るなど、その剣技では父をも凌駕するといわれたが、早世する。その後、周作の三男・道三郎が玄武館を継ぎ、門下から庄司弁



杉並玄武館。神棚への拝礼と黙想に始まり、老若男女の門弟が一同に稽古に取り組む





**北辰一刀流の組太刀**

上級者が打太刀（技を受ける側）を務め、礼法から“間”の攻防や足捌き、太刀筋の如何まで一本一本確かめ合うように進められていく。形の反復から、活法としての剣術、相手に思いを馳せ柔軟かつ的確に対応する心構えと技術とを学ぶ。竹刀剣道のように試合形式での“勝ち負け”や“優劣”が明確に示されることはないが、「勝った、負けた」の剣術、殺法としての剣術に拘泥しているうちは、決して「活人剣」の高みには達し得ないという





時に笑顔と温かい励ましの声とが交差するその稽古風景を見ていると、まるで世代を超えたサークル活動のようでもある。あの坂本龍馬がその門に学んだというのも頷ける、自由で開かれた空気が漂う





吉・森要蔵・塚田孔平・稲垣定之助の「玄武館四天王」や、天才剣士・海保帆平（はんぺい）など、幕末～明治期を代表する剣豪を次々輩出した。他方、開祖の実弟・千葉定吉が京橋に開いた桶町道場には、坂本龍馬が学んでいる。

維新をまたぎ倒幕派・佐幕派の双方に優秀な人材を輩出した北辰一刀流。急激な世情の変化にも動じず、長く神田の地にあり続けた玄武館だが、大正12（1923）年、関東大震災に罹災し、広大な道場は貴重な遺品や極意書とともに灰燼に帰す。

東京に玄武館が再建され北辰一刀流の看板が掲げられるのは、二十余年の月日を経て再び東京が焼土と化す戦後を待たねばならない。

## 混沌の時代を生き抜きその息吹きを今に伝える

閑静な住宅街の一角、冷たく乾いた空気を裂くように、木刀の交わる音と門弟たちの激しくも凛とした気勢が冬の朝に響き渡る――。

江戸三大道場の一翼を担った名門は、大正から昭和の激動を経て、今は東京・杉並の地で、その由緒ある剣の道統を守り続けている。

道場に一歩足を踏み入れると、由緒と歴史ある剣術流派の厳かな容

# 直截にして緻密な剣風と、開明的な気風と



ひとりひとりに声を掛け、丁寧に手取り足取りしながら、柔和かつ真剣なまなざしで指導する現宗家の小西真円氏。現在の玄武館は、外地より復員した五世宗家・小西重治郎氏が終戦後に杉並の善福寺公園で開いた野天道場に始まった





小樽時代の玄武館を物語る戦前の剣道優勝旗。関東大震災で道場を消失した三世宗家・小林四郎祐之は、北海道に渡り小樽の地に玄武館を再建した。五世宗家の小西重治郎氏は北海道での小林の内弟子であり、のちに宗家を継いだが、第二次世界大戦の戦局の悪化に伴い小樽玄武館も閉鎖を余儀なくされた



開祖・千葉周作をはじめ歴代宗家の肖像が現代の門弟たちを見守る

貌の一方で、若々しく、自由で爽やかな空気感が場内に漂っている。神棚を遥拝し、稽古前には門弟全員で雑巾掛けして床を清める。師と仲間への礼節はもちろん欠かさない。そんな光景に懐かしさのようなものを覚えると同時に、江戸の世もそうであっただろう、玄武館の良い意味で明るく開かれた雰囲気が肌を通して伝わってくる。

「『自由』という表現が当てはまるかどうかはわかりませんが、師範や上級者に習いながら、それぞれが納得のいくペースで、目的意識を持って稽古してくれればいい」

そう語るのは、現在、館長として多くの門弟を束ねる第六世宗家の小西真円氏。戦後、実父である第五世宗家・重治郎氏が再建した杉並玄武館を受け継ぎ、20～30代の若い世代から女性・シニア層まで指導に当たっている。

何かと制約の多い現代。限られた時間でも、道場での稽古を通して得たものは、社会生活にも応用できるはずだと小西宗家はいう。

「理念や理屈を知識として『知る』ことは誰でもできる。今の時代、テキストも映像も豊富にありますしね。でも、仲間と一緒に道場に立ち、実際に見て感じて、飽きるほど稽古に打ち込んでみて、初めて『わかる』ことがあるはずです」

# 五行之形

ごぎょうのかた

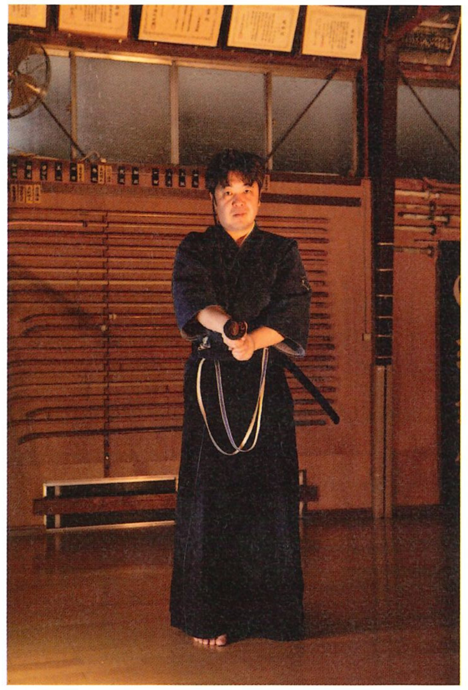
## 天・地・人・陰・陽の五本からなる北辰一刀流の流麗なる組太刀

相手の呼吸を読みながら、微妙な間合いをとる緊迫した攻防。よどみなき足捌きと精緻な太刀筋に基づく刀法は、現代剣道の理合にも通じる緻密さと美しさとを備えており、幕末の志士が志向した実戦型剣術の相貌を忍ばせる。

### 構えと間合い

その構えも上段・晴眼(中段)・下段・八相・脇構えの五行からなる。また、木刀・竹刀・刀を稽古にも用いる北辰一刀流では、それぞれ微妙に異なる独特の間の取り方がある。下の写真は「晴眼の構え」。左の写真は「真剣の間」







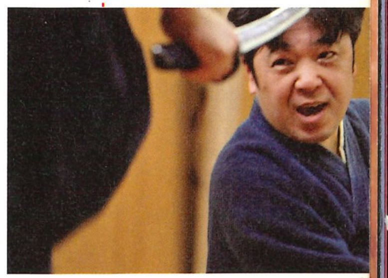
三本目。打太刀の正面を攻める剣を、仕太刀が巻き落とす瞬間



さらに打太刀が繰り出す面をすり上げ、正面を打って勝つ



北辰一刀流の五行の形は、奥伝大目録の組太刀であり、数多くある剣技の根幹をなす。小太刀による形(五本)では、軽快かつダイナミックな動きが展開される



一太刀一太刀に込められる激しい気勢。真剣勝負の張りつめた世界に見る者を誘う

それは単に剣の上達に留まらない。日常の迷いやストレスを断つ場としても道場は機能している。

何より、稽古中のコミュニケーションや、組太刀の反復を通して、「様々な『関係性』の妙を学べる」という。レベルの違う者と敢えて共に稽古することで、相手に『合わせる』こと、自在に『対応』することの難しさ、奥深さを知る。

いうなれば、即時対応性。

どんな相手であれ、どんな状況であれ、どんな奇抜な技であれ、臆せず冷静に対応できる心身の境地に達することこそ、玄武館の稽古が求めるものだ。真剣勝負の緊張感を失わず、常に攻めの心構えで相手に対峙し、稽古の反復で培われた精緻な技術をもって的確に応じていくこと——。







# 北辰一刀流 抜刀術 初伝

## 相手の機先を瞬時に制し 静から動へと豪快に抜く

**抜刀術もまた、組太刀と並び北辰一刀流の奥義を構成するものだ。相手の寸隙を縫って、流れるような速さで繰り出される刃。その豪快な太刀筋には思わず背筋が凍る。**



1◉正座から柄に手を掛け、相手の動きを瞬時に制する



2◉抜きつけた切っ先は尚相手に向けたまま、さらに攻め続ける



3◉相手から目を逸らさず、右手を持ち替え、左手を鯉口に置く



4◉納刀。最後まで油断を見せず、刃筋を縦にして逆手で鞘に納める

大きなストライドで踏み出し、一気呵成に水平に剣を抜きつける。抜き身の刃が空気を切り裂く音が聞こえてくるような迫力の構図



北辰一刀流六代宗家・小西真円一之氏と後援会名誉会長の熊木慶忠氏。開祖・千葉周作の末裔である熊木家が後見役を務め、宗家を中心に若き師範たちが歴史ある道場の剣風と気風とを現代に伝える。杉並区の本部道場の他、目黒区、宇都宮などでも定期的に稽古を開催。韓国にも支部を持ち「交剣知愛」の精神で剣術を通した国際交流にも積極的に関わっている



【北辰一刀流玄武館】
東京都杉並区善福寺2-28-6
☎03-3390-6223
http://www.hokushin-ittoryu.com

❖ 北辰一刀流 ❖

体のみで覚える剣術ではなく、頭と体で覚えていく近代剣術。合理的思想が幕末の名だたる志士たちを育てていった。

# 技の千葉

## 数多の剣豪を翻弄せし高等技術の数々

開祖◉千葉周作

剣術から神秘性・精神性を排除し合理的修行を全面に出した北辰一刀流。現代剣道の基本のすべてがここにある。

### 北辰一刀流を創設した千葉周作の合理思想

文政5（1822）年、北辰一刀流の創設者・千葉周作が日本橋に開いた剣術道場が「玄武館」である。周作の祖父・千葉吉之丞（きちのじょう）は北辰夢想流の創始者で、相馬藩で剣術指南をしていた。周作も祖父から北辰夢想流を伝授された。

16歳で松戸に引っ越して、ここで小野派一刀流の浅利又七郎義信に師事した。23歳で周作が免許を得ると、義信は周作を自分の師・中西忠兵衛の元へ向かわせる。

中西道場には「一刀流の三羽烏」と有名な三人の門下生がいた。その中のひとり、高柳又四郎は「音無しの剣」と言われる凄腕。竹刀同士がぶつかる音がする前に勝負が決してしまうからである。

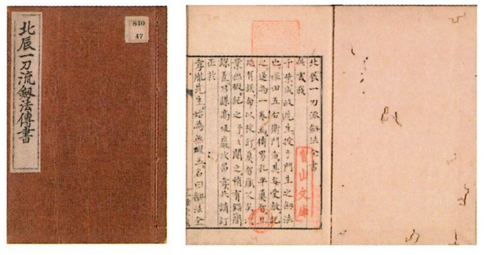
その高柳と周作が手合わせした時のこと。お互いにらみ合ったまま動かない。やがて道場に竹刀の音が響き渡った。周作の打ち込みを、高柳が竹刀で止めたのである。「音無しの剣」が音を発した瞬間でもあった。勝敗こそつかなかったがハイレベルな攻防だった。

周作に跡目を継がせたかった義信だが、自分の流派・北辰一刀流を作りたいと周作が拒否。諸国を巡りながら他流試合などを通じて北辰一刀流を広めていく。文政5年に玄武館を開場。やがてもっと広い神田於玉ケ池に移った。

北辰一刀流は合理的で革新的な理論に基づいていた。例えば、木刀を使う組太刀よりも竹刀と防具を用いた技術を重要視している。周作が確立した理論や技には、現代剣道の技のほとんどが含まれるという。また、複雑になりがちな段位も三段階のみに設定した。



千葉周作の肖像画（東條會館蔵）



玄武館の門人・山田宮司が記した「北辰一刀流・剣法全書」。北辰一刀流の理論がまとめられている（国立国会図書館蔵）





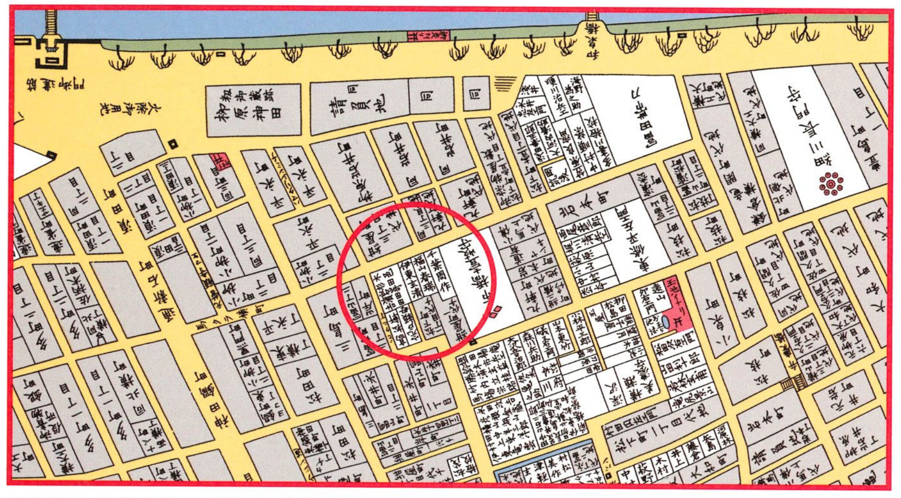
玄武館の隣には、儒学者・東条一堂の学塾があった。合理的精神を重んじる周作は、門下生が学問を学ぶことを奨励。塾生が道場に入門することも多く、お互いの交流を深めた。周作自身も文が立ち、初心者用に剣術心得を記した「剣術初心稽古心得」は平易な文章で、わかりやすい解説がされている。

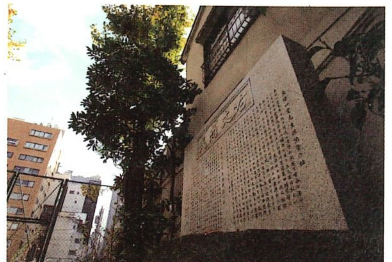
周作の一族は、みな剣の道に通じていた。兄の又右衛門は岡部藩の剣術指南を務め、弟の定吉は京橋桶町（おけまち）に道場を構えていた。於玉ケ池の周作の道場を「大千葉」、桶町の道場を「桶町千葉」「小千葉」と呼ぶ。定吉の道場には、のちに坂本龍馬が入門する。

また、子どもたちも滅法強かった。長男こそ夭折したものの、次男の栄次郎は「千葉の小天狗」と呼ばれる腕前。その変幻自在の竹刀剣法は、どこか曲芸を彷彿とさせた。栄次郎こそ「位の桃井」「力の斎藤」と並び称された「技の千葉」の張本人である。将来を期待されたが若くして逝ってしまう。

周作は62歳でその生涯を閉じた。彼の創設した北辰一刀流からは、新撰組の前身である浪士隊を組織した清河八郎、山岡鉄舟や、新撰組八番隊隊長の藤堂平助、山南敬助など幕末の名だたる志士が登場。一大派閥を作ることになる。

### 大千葉道場の今昔


神田於玉ケ池は、現在の千代田区岩本町付近。安政6（1859）年の地図では「千葉周作」の名を見つけることができる

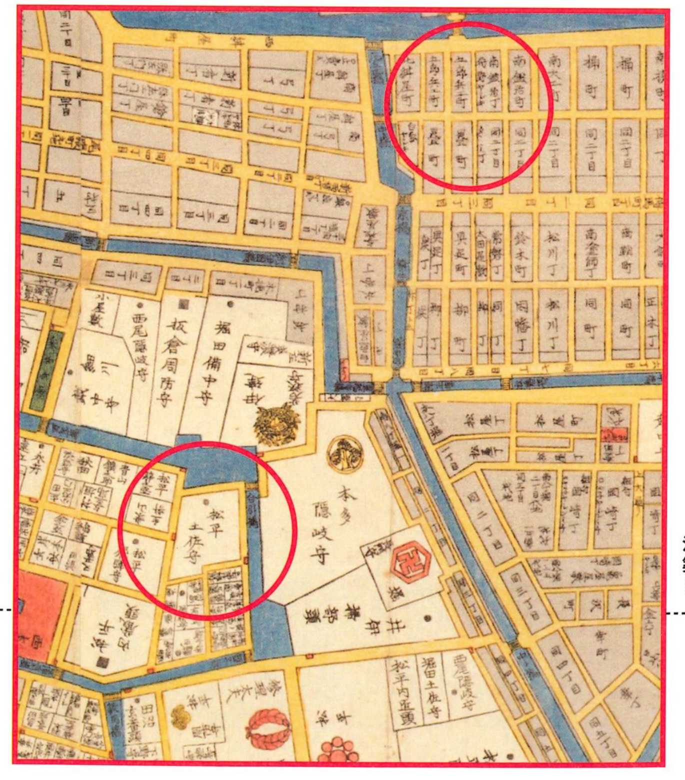

大千葉道場跡地。玄武館跡とその西隣で儒学と詩文を教えた東条一堂の塾跡を示す記念碑が建っている

江戸切絵図 日本橋北神田両国浜町明細絵図（©人文社）

### 小千葉道場の今昔



東京駅八重洲口そば、鍛冶橋通り沿いの福岡銀行東京支店の前に「千葉定吉道場跡」の立て札がある


小千葉道場は「狩野屋敷」と呼ばれた地域にあったという。左下の「松平土佐守」が土佐藩邸。龍馬はここから通っていた

江戸切絵図
築地八町堀日本橋南絵図
（国立国会図書館蔵）

# 龍馬を活かし導いた剣の道

北辰一刀流の免許皆伝でありながらめったに剣を抜かなかった龍馬。彼にとっての「剣の道」とは何だったのか?

## 剣の腕を磨きたくて江戸に留学した龍馬

幕末最大のヒーロー、坂本龍馬。彼も北辰一刀流の剣士であった。

天保6(1836)年、土佐国坂本家に生まれた龍馬。幼少期の龍馬は泣き虫で頼りなく、10歳過ぎても寝小便の癖が治らない子どもだったと言われる。12歳の頃、近所の漢学の楠木塾に入塾。しかし同級生に虐められた上に、抜刀騒ぎを起こして退塾になる。劣等生のレッテルを貼られた龍馬が変わったのは、剣術を習い始めてからだった。嘉永元(1848)年、小栗流の日根野弁治の道場に入門し、龍馬は心身ともにたくましくなっていく。熱心に稽古に励んだ龍馬は、5年の修行で「小栗流和兵法事目録」を許された。

当然、龍馬の目は数多くの剣豪が集結する江戸に向く。江戸で剣の腕をさらに磨きたい。父の計らいで江戸へ1年の剣術修行に赴いたのは龍馬19歳の時であった。

龍馬が学ぶべき道場として選んだのが「小千葉」こと千葉定吉の開く北辰一刀流の道場である。千葉定吉は千葉周作の実弟であり、剣の腕は兄に負けず劣らずであった。

龍馬は熱心に剣の修行に励んだが、それだけではなかった。彼が小千葉道場に通って数日後、浦賀にペリーが来航。それを目の当たりにした龍馬は西洋諸国の強大さに驚き、砲術や蘭学、漢学も学び始める。また、各地の有識者に会って自分の見識を深めた。

龍馬は翌々年にふたたび江戸へ留学。のちに土佐勤王党を組織した武市半平太らが一緒に留学していた。桶町道場だけでなく、玄武館にも通っていたといわれる。

一説によると、龍馬と桂小五郎は直接対決をしたことがあるらしい。安政5(1858)年10月、鏡新明智流の士学館主宰の他流試合のことだという。

対決の場で龍馬は意外な行動に出る。なんと脇ががら空きの片手上段の構えを取ったのだ。何かの罠かと警戒する桂を追い詰め、見事に面一本を取る。二本目は桂が取り、そして三本目。激しい打ち合いは桂の優勢だった。苦し紛れに片手上段の構えを取ろうとする龍馬。桂は「例の構えか」と油断した。それこそが龍馬の狙いだった。龍馬は勢い充分な突きを決め、桂をはね飛ばした。龍馬の勝利である。名手・桂小五郎に勝利したことで、坂本龍馬の名は江戸中に知れ渡ったのだ。ただし、この逸話は後世の創作の可能性もある。

いずれにしろ、この付近で龍馬は北辰一刀流の目録を伝授されたようだ。いわゆる免許皆伝である。

しかし、これ以降、龍馬はめったに剣を抜かなかった。龍馬の目に映るのは世界だった。日本人同士で争っている場合ではない。龍馬はそう感じていた。亀山社中設立、薩長同盟締結と次々に大仕事を成し遂げた龍馬だが、それらはすべて会合の結果であったのだ。

だからこそ、慶応2(1866)年、寺田屋で襲撃された時も龍馬自身は抜刀しなかった。ただ高杉晋作から上海土産でもらったピストルを発砲したのみである。

龍馬にとって、剣の道は人生を捧げるものではなかった。しかし弱虫だった龍馬を変えたのは紛れもなく剣であり、剣術に憧れて江戸へ赴いたことで龍馬の人生は大きく動いた。龍馬の人生を支えたのが剣の道なのである。

COLUMN

### 実は龍馬は弱かった?

桂小五郎に勝利したという龍馬だが、一方ではこんなエピソードも伝わっている。土佐勤王党を代表して長州に向かった龍馬、少年藩士に請われるまま勝負して三戦三敗だったそうだ。龍馬は「自分が弱いから負けた」と淡々としていたという。さて、本当の実力は?



(国立国会図書館蔵)

**坂本龍馬**
さかもと りょうま
生没年◉1836〜1867年

土佐藩郷士(ごうし)身分に生まれる。江戸遊学後、武市半平太の土佐勤王党に入党。弾圧が強まると脱藩して、藩を超えた志士活動を続けた。日本初の株式会社・亀山社中を創設、薩長同盟の締結、大政奉還の成立など大きな成果を挙げた。1867年、近江屋にて暗殺される

**龍馬終焉の地「近江屋」**

写真は坂本龍馬が暗殺された最期の地、京都河原町の近江屋。同席していた中岡慎太郎とともに京都見廻組に急襲され、絶命したとされる。享年31歳

新撰組

# 藤堂平助

とうどう へいすけ

**つねに先陣を切って敵中に斬り込んだ新撰組の勇ましき「魁先生」**

生没年 1844～1867年

武蔵国出身。新撰組八番隊隊長として知られる。北辰一刀流・玄武館の門弟と言われるが、一説によると近藤勇の試衛館の生え抜きという説も。また、伊東甲子太郎の伊藤道場の寄り弟子だったという説もある。いずれにしろ、新撰組結成当時からのメンバーで、剣の腕は相当なものであった。戦闘でもつねに先陣を切ることから「魁先生」と呼ばれていたという。

元治元（1864）年の池田屋事件では、最初に斬り込んだ4人のうちのひとり（残りは近藤、沖田、永倉）で、中でも平助の奮戦ぶりはすさまじく、刀はボロボロになり、鍔元には修復不可能なほどのひび割れができた。途中で額の怪我から血が目に入り戦線離脱している。この働きを認められ、近藤、土方に次ぐ報奨金を得た。

慶応3（1867）年、伊東とともに御陵衛士を発足、新撰組を脱退する。これにより新撰組に狙われることになり、同年11月、油小路で討たれる。この時、新撰組結成以来の同志だった永倉新八、原田左之助らが藤堂を逃がそうとしたが、藤堂はこれを拒否。「魁先生」と呼ばれた剣士のプライドと仲間への思いから、討ち死にを果たしたといわれる。

なお、藤堂には伊勢津藩主・藤堂高猷の落胤という説も。藤堂の佩刀「上総介兼重」は藤堂家お抱えの刀匠の作であり、それなりの値段もする刀なので、落胤の可能性は低くないと考えられる。

幕臣

# 山岡鉄舟

やまおか てっしゅう

**悩みに悩んで刮目した剣の真髄は剣に頼らぬ者こそ、真の達人ということ**

生没年 1836～1888年

江戸に生まれ、父の赴任に伴い飛騨郡山で育つ。父母を相次いで亡くし、江戸に戻った鉄舟はあらためて千葉周作の玄武館に通い始める。道場では並ぶ者なき強さを誇ったが、小野派一刀流の浅利又七郎義明と対峙した時のこと。鉄舟は義明の気迫に押され、じりじり後退し外へ閉め出されてしまう。これで真の剣豪の恐ろしさを知った鉄舟は義明の元へ弟子入り。一方、精神を鍛えるために高名な禅僧について修行した。

それでも義明への畏怖は消えない。悩みに悩み、滴水和尚との禅問答を経て、ついに鉄舟は「無刀の真理」に到達する。すなわち「剣を捨て、剣に頼らない者こそ、真の剣の達人である」。大悟した鉄舟はふたたび義明と相まみえる。すると、義明は鉄舟の構えを見ただけで「よく剣の真髄を悟られた」と一刀流の印可を授けたという。

のちに鉄舟は、一刀流小野宗家から正式に後継とされ、一刀正伝無刀流を開く。その教えの根底には剣禅一致の心得があった。

一方、公人としての鉄舟は、清河八郎らと浪士組を結成。浪士会解散後は幕臣として活動した。



勝海舟、高橋泥舟、山岡鉄舟で「幕末の三舟」とも



新撰組

# 山南敬助

やまなみ けいすけ

**近藤の腕に惚れ込んだ新撰組の古参メンバー脱退の咎で切腹を命じられる**

生没年 1833～1865年

陸奥国仙台藩出身。脱藩して江戸に出てきたといわれる。当初は小野派一刀流を学び、免許皆伝。その後、千葉周作の玄武館門弟になる。近藤勇率いる試衛館と他流試合をした際に、近藤に敗れてその強さに感服。以後は、試衛館メンバーと行動をともにする。

清河の浪士組に近藤らと参加し、京都での壬生浪士隊結成時には副長に就任。文久3（1863）年、大坂にて将軍徳川家茂を警護中、不逞浪士が呉服商に押し入る事件が起きた。山南は土方とともに現場に駆けつけ、激戦の末に討ち取る。山南の剣の腕を、近藤が信用していた証だといえよう。

同年9月、芹沢鴨と新見錦が粛正され、ここに近藤一派の新撰組が誕生する。山南は局長近藤、副長土方に次ぐ総長の地位を得た。

しかし、次第に山南は新撰組の行動に疑問を抱くようになる。元治2（1865）年、山南は「江戸に行く」と置き手紙を残し、ついに新撰組を脱走。当然、脱走は死罪になる重罪である。山南が弟のようにかわいがっていた沖田が追っ手として差し向けられた。大津で沖田に追いつかれた山南は抵抗もせず、屯所に連れ戻された。

新撰組旗揚げ以来の同志・永倉に再度の脱走を勧められるも、山南はこれを拒否。自分から介錯を沖田に頼み、見事に切腹して果てた。享年33歳。温厚で優しく、子ども好きな性格から、壬生村の女子どもからも慕われていたという。

幕臣

# 清河八郎

きよかわ はちろう

**北辰一刀流を政治の道で活かそうとするも幕府に不穏分子扱いされ、暗殺される**

生没年 1830～1863年

清河八郎は庄内藩の豪農の生まれだ。江戸に出てきた清河は儒学者・東条一堂に学ぶが「これからは文武ともに学ばなくてはダメだ」と、隣にあった玄武館の門を叩く。一説によれば、この時清河は21歳。遅いスタートというハンデを清河は月20日以上の猛稽古で埋めた。そして、なんと1年で免許皆伝を許されるのである。

その後、清河は於玉ヶ池そばで「剣と書」を指南する清河塾を開塾。剣術と学問の両方を教える塾は、江戸でもただひとつであった。

万延元（1860）年、桜田門外の変勃発。この事件に衝撃を受けた清河は倒幕・攘夷思想を強める。清河塾に集まった志士らとともに「虎尾の会」を結成するが、幕府にマークされて未遂に終わる。

やがて京都で、佐幕派の浪士を集めた浪士会結成に成功するが、清河の本心は尊皇攘夷にあった。

だが、幕府は清河の動きを不穏に感じていた。文久3（1863）年、幕府随一の剣客である見廻組の佐々木只三郎を差し向けて暗殺してしまう。享年34歳。自分の得た剣の力で政治を動かそうとした男。それが清河八郎だった。



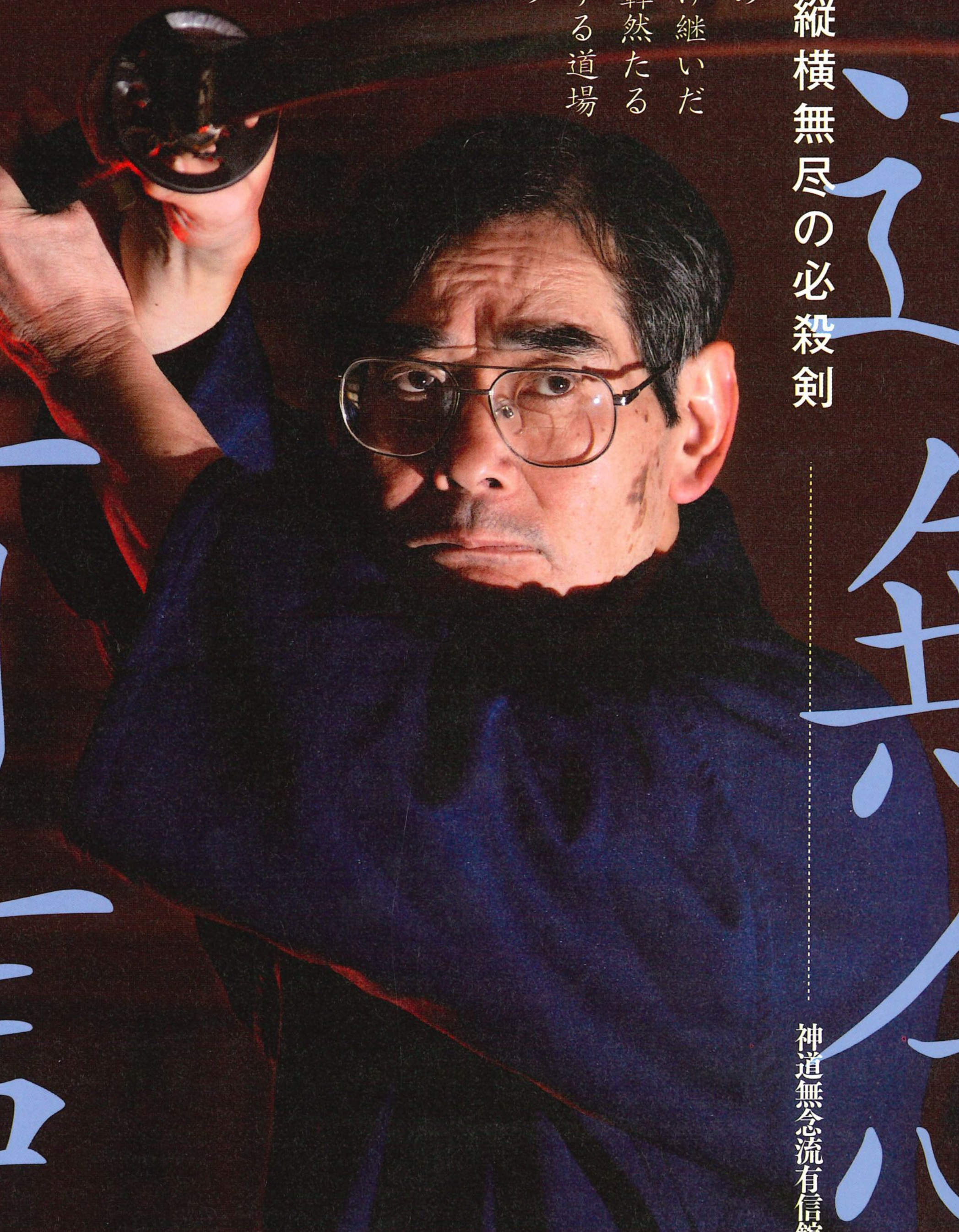
『清河八郎遺著』
（国立国会図書館蔵）

剣にも学問にも通じている俊英であった。山形県庄内町の清河神社に、祭神として祀られている

# 神道無念流 有信館

## 剛にして、縦横無尽の必殺剣

「力の斉藤」の練兵館から受け継いだ強烈な一撃と轟然たる気合がこだまする道場古の真剣勝負の境地が蘇る。



### 無念流剣術の理念

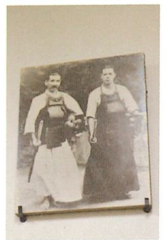
「力の剣法」といわれ、剛の印象が強い神道無念流だが「円にして縁を切らない剣法」を説き、技術のみならぬ精神の鍛錬を最も重んじてきた。稽古の反復を通して、人間の作為を超え、太刀、自我、天地が一体となった"無念の境地"に達することを目指す

神道無念流有信館第十代◎小川武氏

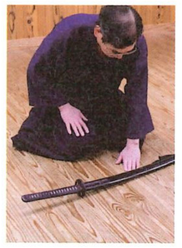


現在の有信館。平成8年、東京・目黒の地に当代館長により再建され、由緒ある流派を今に伝える

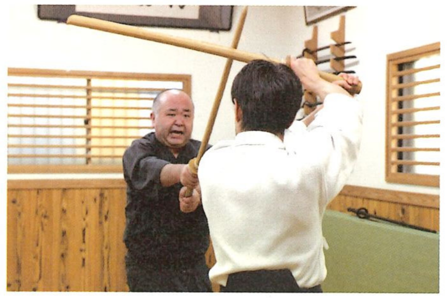








道場に掲げられた中山親子の写真。剣道・居合術・柔術の三範士号を授与されるという前人未到の栄誉を手にした博道。長男の善道もまた、天才の呼び声高い剣士だった



熱気を帯びる組太刀の稽古。緊張を打ち破るように道場に響き渡る声、そして木刀が交わる音。その打ちは強烈で、打突の衝撃で木刀が欠け、欠片が吹っ飛ぶなどというのは日常茶飯事だ

## 形の反復だけがその剣の徒に不動の心を宿す



### 神道無念流の組太刀

形こそは「明日なき真剣勝負」の境地を今日に伝える唯一の教えであると説く小川氏。それは幾多の体験と知恵が詰まった先人の遺産でもあるという。命を賭して勝負に挑んだ古の剣の徒の境地を追体験することが流派剣術の真髄であり、醍醐味なのだろう



初伝組太刀の二本目。相手の太刀を巻き落とすや否や、仕太刀は刀身に手を添えたまま、打太刀の右腰に切っ先を水平に突き刺すという戦慄の業

### 数奇な運命を辿った近代の名門剣術道場

半世紀の時を経て東京・目黒の地に復活した有信館道場。その歴史は維新後の世に始まる。

江戸三大道場の一角を占め、幕末にかけ幾多の烈士を世に送り出した神道無念流(しんとうむねんりゅう)・練兵館(れんぺいかん)で、斉藤弥九郎の下に学んだ根岸信五郎。彼が「力の斉藤」と評された名門の道統を受け継ぎ、自ら道場を構えたのは明治13年のことである。長岡藩の剣術隊長として戊辰戦争では官軍と刃を交えた根岸だったが、新政府の役人となっていた剣友たちの支援を得、神田西小川町に有信館の看板を掲げた。

竹刀剣術全盛の時代に、突き、体当たり、投げといった荒技を奨励し、汗と血が飛び交う凄絶な稽古を展開した彼の道場は「警視庁の稽古は冥土の旅、三途の川を渡れば有信館」とまでいわれ、語り草となった。横腹に弾丸が貫通するほどの重傷を負いながら戊辰戦争を戦い抜いた強者は、門弟たちにも厳しい修練の道を課したのだ。

その門下で類い稀なる才覚を現したのが、後に「最後の武芸者」と崇められた剣聖・中山博道その人である。18歳で上京し根岸に師事した博道は、小柄な体躯ながら、睡眠時間を削り、死をも覚悟したという過酷極まる稽古の果てに、遂にその才能を開花させる。

やがて根岸から道場を継承した博道は本郷真砂町に有信館を移転。さらに全国各地に続々と支部道場を設け、朝鮮羅南にまで進出した。

しかし、太平洋戦争が終局を迎えると同時に、博道は戦犯容疑をかけられ一時的に拘留される。混沌とする世情の中、有信館も人手に渡ってしまう。日本の近代を代表する名門道場は長らく歴史の舞台からその姿を消すことになった。

### 必殺の一撃と体捌きの妙 剽悍なる剣の使い手たち

博道の門下からは、後世に名だたる多くの才能が巣立って行った。中でも、羽賀準一、中島五郎蔵、中倉清の三名は「有信館三羽烏」の異名を取り、戦前～戦後の剣道界に大きな足跡を残した。自他ともに認める荒気性でならした羽賀は、足がらみや組討ちをも辞さない有信館のスタイルを終世貫き通し、異形の剣士として恐れられた。中島は警視庁剣道師範として多くの後進を育て、中倉は空前絶後の剣道公式戦69連勝という大記録を打ち立て「昭和の武蔵」と呼ばれた鬼才である。

先達たちがその剣風をもって体現

していたように、神道無念流の教えで特色をなすのは、裂帛の気合と破壊力を伴った激しい斬撃と、自在にして流麗な体捌きにある。相手の空隙を突き一撃必殺の業を繰り出す――「三寸横に動けば相手は隙だらけ」（根岸信五郎）とあるように、左右からの攻めを重視しているのも特筆に値する点だ。

## 勝って、打つ――形に秘められし真髄

17年前に有信館を再建し、中山家伝来の剣の教えを現代に伝える当代館長・小川武氏はこういう。

「我々が学ぶのはあくまで『刀法』です。真剣勝負は常に絶体絶命。肉を切らせて骨を断つ覚悟が求められます。そして『打って勝つ』のではなく『勝って打つ』。機会をいち早くとらえて間の攻防を制し、心理的にも有利に持ち込むことこそ流派剣術の真髄です」

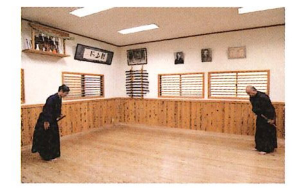
中山博道にはこんな言葉がある。

「剣道は正しく学んだ者にとっては80歳までは完全に相手と対抗できるものと確信している」

遠間からの飛び込み技に見るように、体格や身体能力といった要素で勝負を決してしまいがちな現代の竹刀剣道。小川氏は、剣術諸流の形は現代の剣道に充分に通用する理合を蔵すると語る。形を習熟した者が相手の懐深くまで攻め入れば、ことさら腕力・脚力・瞬発力に頼らずとも、畳半畳の業で充分相手に応戦できるのだ。

「戦前の大先生には、竹刀が打突部位に当たる前に確信を持って『一本！』と旗を挙げることのできる眼の利いた人もいた。『勝って打つ』とはそういうことです。形の教えには『勝って打つ』ための基礎となるべき、体全体の動きと業が既に含まれているのです」

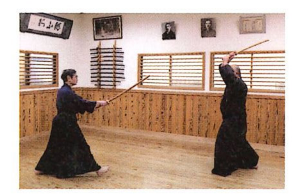
## 攻めくる刃を打ち崩し、間髪入れず突く



1◉一本目は、はじめに立礼を交わす



2◉相青眼からの攻防



3◉青眼のまま間を詰める打太刀（左）に対し、仕太刀（右）は一歩引いて上段に取り…



4◉一気に打太刀の剣を打ち落とし、構えを崩す



### 初伝組太刀 一本目

**七十六本からなる無念流の形 多彩な構えからの自在な攻防**

礼法に始まる初伝五本。あらゆる業の基本をなす。ここでは淀みない流れで相手の水月（みぞおち）を制する一本目を紹介しよう

5◉そのまま剣先を上げ、打太刀の水月を攻める。この際に刃を水平にするのは、肋骨の間を通して内臓まで届かせるためだ



**【神道無念流有信館】**

東京都目黒区五本木1-33-19
http://www.yushinkan.jp



若き日に第八代・中山善道師（中山博道の子）の薫陶を受け、有信館を現代に復活させた小川武館長。偉大な先師たちの志を継承し、その理念と技術を正しく今日に伝えるべく門弟達を導いている。神道無念流剣術の他、無双神伝流居合術、神道夢想流杖術を教授し、希望者には竹刀剣道の指導も行なっている。社会人を中心に、向上心に溢れた門弟達がその道場には集う





## これが真剣だったら…戦慄の凄業

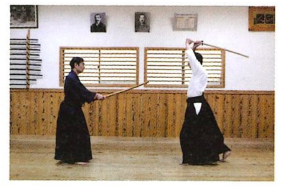
### 中伝組太刀 二本目

**激しい応酬の末に勝つ 大胆で鮮烈な荒業の数々**

中伝は七本からなる。頭から腰まで豪快に断ち斬る、相手の両腕を下から斬り上げるなど、恐ろしいまでに実戦的な業が揃う。



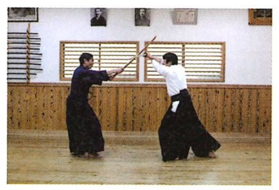
1◉青眼に構える打太刀に対し、仕太刀（手前）は八相の構えで応じる



2◉仕太刀（右）が先手を取り、振りかぶって正面を打つ



3◉打太刀（左）は刀身でこれを受け返し…



4◉逆に正面に斬り返し、今度は仕太刀が受け止める



5◉さらに互いに左右の面を相打ちする（二連撃）



6◉両者、霞の構えを取って一旦間合いを切り、気合を掛け合う

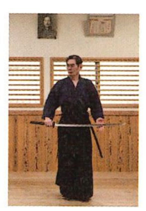


7◉改めて打太刀が正面を狙ってくるところを仕太刀は体を沈めて相手の懐に入り、刀身を左手で支えて相手の両腕を下から受け斬る

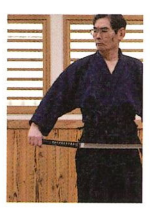
### 立居合

**あらゆる状況を想定し 四方の敵に対応する**

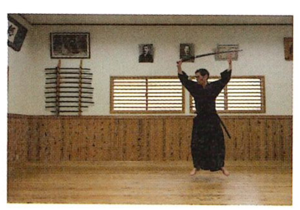
向かい来る敵を一撃必殺の太刀で迎え撃つ無念流の居合術。相手の一瞬の虚を突く緩急自在の業の数々は極めてダイナミックだ。



1◉敵に対して真横を向き、刃身に左手を添え軽く挟むようにする



2◉敵に悟られぬよう、静かに右手を鍔元から柄頭に移動する

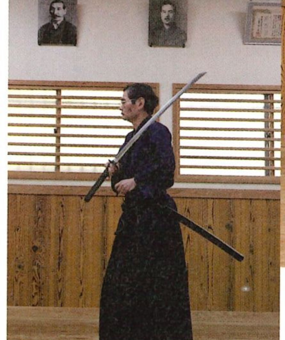


3◉敵意を察した瞬間、真上に飛び跳ねながら刀を持ち上げ、弓矢を放つように左手から刀身を放し…

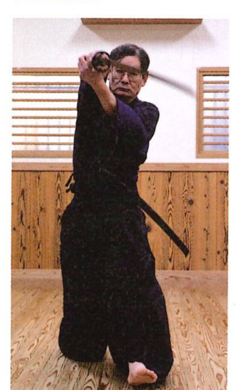
#### 十一本目――意表をつく跳躍と片手斬り

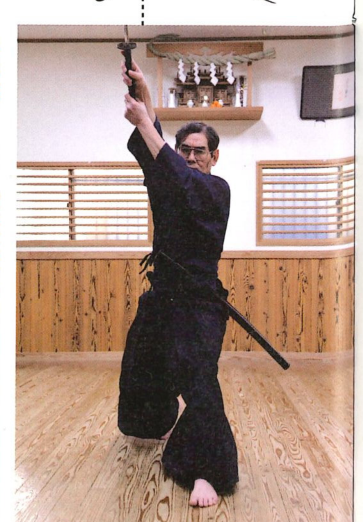


4◉右片手で弧を描くように「ヤー」の掛け声とともに一気に遠間の敵に斬りつける。アクロバティックで鮮烈な太刀筋だ



5◉血振りをした後、左肩に刀身を立てかけるようにし、右逆手に持ち替えて納刀





下方から逆袈裟に払い上げるように切る一本目の後半。独特の刀の運用法で敵を惑わせる

幕末江戸三大道場〈一〉

神道無念流

むやみに剣を抜くべからず、争うべからず。しかし、抜いたが最後、一撃必殺の技が敵を屠る。

# 力の斎藤

## 裂帛の気合いで放つ渾身の一撃

開祖◉福井兵右衛門嘉平



晩年の斎藤弥九郎

剣術以外の学問を奨励し砲術、兵法なども門弟たちに教える。土木工事など独自の教育法が人気だった

### 学者を目指して郷里を飛び出た若者

江戸三大道場のひとつ、練兵館。その創設者・斎藤弥九郎は、越中国の山村の農家の出である。儒学者になって身を立てることを決意し、わずか一分銀を握りしめて遠路はるばる江戸へ出てきたのは、弥九郎15歳の時だった。

同郷者の伝手で旗本の小姓になった弥九郎は、その勤勉さが認められて神道無念流の岡田十松の道場に入門。剣の腕のみならず、人望も厚かったのだろう。岡田が死去すると、門弟一同の推薦を得て道場を継ぐ。その傍ら、弥九郎は儒学や砲術、兵法、馬術なども学び西洋的な知識を増やしていく。道場で親しくなった江川英龍（伊豆韮山代官の家系。進歩系知識人だった）の影響も大きかった。

江川家の援助で文政9（1826）年、九段下俎橋付近に道場「練兵館」を開場。神道無念流の基本は「真を打つ」ことに尽き、渾身の一撃のみを一本としていた。剛直にして実直な剣法だったが、道場主の弥九郎は開明的思想の持ち主で、剣術以外にも西洋流の砲術や兵法、流行りの攘夷思想なども教えていたという。そういう点も評判を呼び、江戸の人気道場になる。

剣を持たせたら尋常ならざる気合いを放つ弥九郎だが、むやみな争いは好まず「剣は争いの備えだ」と説いた。学者を目指していた弥九郎らしい教えである。




現在、靖国神社の境内には「練兵館跡」の碑が残っている。斎藤はこの地で30年ほど道場を開いていた





弘化4（1847）年、弥九郎の長男・新太郎が剣術修行のため、全国へ出立。その時に長州藩の道場に立ち寄って、並み居る藩士を叩きのめしたことがある。新太郎は宿の主人に「外側の道場だけ立派で中身が伴わない」と告げる。藩士たちは激怒するも、新太郎はすでに出発したあとだった。すると今度は江戸に留学した藩士たちが、練兵館に殴り込んできたのである。

ここで相手をしたのは、弥九郎の三男・歓之助だった。長州藩士には災難なことに、この歓之助もかなりの手練れ。得意技は実践で磨いた突き技で、長州藩の藩士たちは歓之助の強烈な突きを次々に食らい、あっけなく沈没する。

「位の桃井」「技の千葉」と並んで、その技の威力から「力の斎藤」と称されたのは新太郎だったが、歓之助もその異名に恥じない一撃必殺の威力を誇っていたのだ。

長州藩は深く感服し、のちに藩士を多数練兵館に留学させることになる。中には桂小五郎のように、私費留学し、練兵館に学んだ志士もいた。桂の他にも、高杉晋作、芹沢鴨、永倉新八、伊藤博文など錚々たる顔ぶれが集っていた。

剣術以外にも砲術や兵法も教えた練兵館だが、一風変わった鍛錬もあった。弥九郎が購入した土地を、門弟たちに開墾させたのである。背景には「これからの武士は剣だけでなく、砲術も熟達しなければならぬ。有事の際には土台のひとつくらい作れなければ」という弥九郎の思いがあったという。

自身は活動には加わらなかったが、尊皇思想を持っていた。明治4（1871）年、74歳で死去。

練兵館は番町（現・千代田区九段下俎橋付近）にあった。地図では「斎藤弥九郎」の名前が見て取れる。のちに、九段坂上（現・靖国神社境内）に移った



江戸切絵図 御江戸番町絵図（国立国会図書館蔵）

COLUMN

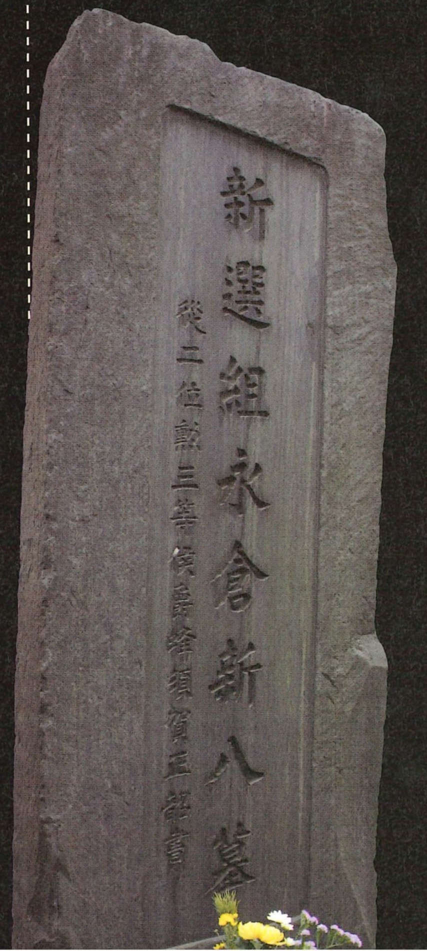
### 1人vs多勢の戦闘はあり得ない？

よく時代劇でヒーローvs大勢の侍というシーンがある。実はこれ、真剣同士の勝負ならめったにあり得ないこと。ただし、よく言われる「日本刀は2～3人斬ると血糊で斬れなくなるため」というよりは、かわされた際に同士討ちを避けるためという理由が主らしい。

神道無念流の剣豪たち

# 思いを渾身の一撃に乗せて動乱期を生きる

新撰組隊長、浪士組総長、そして攘夷志士と名だたる顔ぶれがそろっていた練兵館の門弟彼らの思想と行動を突き動かした道とは？




新撰組

## 永倉新八（ながくら しんぱち）

近藤に惚れ、行動をともにした新撰組有数の剣士
動乱を生き抜き、仲間の功績を世に伝える

生没年
1839～1915年

新撰組二番隊隊長。松前藩の江戸役人の息子として、江戸下谷に生まれる。幼少時から大の剣術好きで、岡田十松の神道無念流・撃剣館に入門。15歳で免許皆伝。19歳で成人を迎えると、武者修行に出たり、町道場の剣術師範を務めたりする日々を送っていた。

どうやら永倉は、その間に知り合った近藤に男惚れしたらしい。近藤も江戸っ子らしく快活な気性の永倉を好んだという。永倉が持って来た知らせで、試衛館メンバーは浪士組に入ることになる。

永倉自身も相当な剣の使い手であり、元新撰組の阿部十郎は「一に永倉、二に沖田、三に斎藤」と伝える。そんな永倉だから、新撰組の主立った戦闘には、必ず名前が挙がる。中でも有名なのは、やはり池田屋事件だろう。二十数名の尊攘志士が集う中に、斬り込んだのは近藤、沖田、藤堂、永倉の四人。沖田と藤堂が途中離脱するも、近藤と永倉は踏ん張り、土方隊の到着を待ったという。永倉はこの戦闘で左手親指の付け根の肉をごっそり持って行かれるケガを負い、防具をボロボロにされるほどだったが離脱はしなかった。

増長した近藤を諫めるために、脱退覚悟で近藤の「非行五ヶ条」を会津藩主に提出したことも。永倉は、近藤の同志でありたかったのだ。鳥羽・伏見の闘いで敗北後、江戸へ戻り、そこで近藤らと袂を分かつ。北関東で抗戦中に会津藩の降伏を知り、江戸へ帰還。その後、松前藩への帰参が認められた。

老いてもなお「竹刀の音を聞かなければ飯がノドを通らぬ」と言い切った、生粋の剣士だった。大正4（1915）年没。享年77歳。


前段の中央が永倉。晩年は警察や刑務所で剣術師範を務めた。死ぬまで剣の道一筋であった

新撰組

## 芹沢鴨（せりざわ かも）

豪放にして磊落、怪力無双の剣士は
酒に溺れて新撰組から排除される

生没年
1827～1863年

壬生浪士組筆頭局長。水戸藩上級武士の三男で、戸賀崎熊太郎に教えを受け、神道無念流免許皆伝の腕前だったという。

若い頃から、尊皇攘夷運動の天狗党に入党し、勤王を説いて回っていた。この時代、芹沢は自分と意見を異にした三人を並べて、ぽんぽんと首を刎ねてしまったことがあるという。また鹿島大社に参詣し、愛用の鉄扇で拝殿の大太鼓をたたき割ったことも。剣の腕と並々ならぬ膂力は本物だった。

文久3（1863）年、清河八郎の浪士組に参加。京都で試衛館メンバーと合流する。のちに芹沢、近藤が中心となり壬生浪士組を結成、芹沢が筆頭局長となった。

だが、芹沢には問題もあった。短気で癇癪持ち、何より酒癖が悪かった。道を譲らなかった力士を殺傷したり（大坂角力事件）、懸想していた芸奴が肌を許さなかったという理由で店に殴り込み、芸奴を断髪する（吉田屋事件）などの狼藉事件が続き、会津藩からついに芹沢の処分命令が下る。

そして同年9月、宴会後になじみの芸奴と同衾し、寝入っている芹沢たちのもとを、四～五人の男が襲った。驚いて隣の部屋に逃げ込んだ芹沢だが、結局数人に取り囲まれ、ずたずたに斬り殺されてしまったという。

近藤は、寝入っている芹沢を襲撃するにもこれだけの人数を割いたのだ。それだけ芹沢の武勇を恐れていた証だろう。享年35歳。

長州藩

## 品川弥二郎（しながわ やじろう）

剣で培った精神と人脈がのちに活きる
明治新政府の重鎮となった男

生没年
1843～1900年

長州藩足軽の長男として生まれる。吉田松陰の松下村塾で学問を学ぶが、安政の大獄で松陰が死刑になると、尊皇攘夷運動へと傾倒していく。同郷の桂小五郎や高杉晋作と同様に、斎藤弥九郎の練兵館で剣術を学んでいるが、塾頭まで務めた桂に比べると、際だった記録は残っていないようだ。

吉田の死後は高杉たちと行動をともにして、元治元（1864）年の禁門の変に参加。その後も幕府軍と抗戦を続けている。

やがて反権力的な闘いを繰り広げているだけでは日本を動かせないと気づいた品川は、木戸孝允とともに上京。政局の情報収集、同志の連絡係を務め、薩長同盟の成立に尽力する。長州勢が政権の中枢に復帰すると、品川も能力を買われ中央政治の場へ登場する。

維新後は新政府に出仕し、長州勢の中でも出世頭に。ドイツやイギリスに留学して見聞を広め、帰国後は明治政府の重要ポストを歴任するようになる。

品川の場合、剣で華々しい活躍を遂げたわけではない。彼は松下村塾や練兵館で培った人脈を通じ、政治で活躍した傑物だった。


晩年には政治団体・国民協会を組織。獨協学園なども創立している（国立国会図書館蔵）

神道無念流の剣豪たち

長州藩

# 桂小五郎

かつら こごろう

**神道無念流を極めた達人でありながら抜かずの精神を貫いた「逃げの小五郎」**

生没年 1833〜1877年

長州藩の藩医の長男として生まれる。生来病弱で長生きできないと思われていたため、姉が婿養子を取って家督を継ぐ。そのため桂家の養子になる。無事に育った小五郎は、10代の頃には藩きっての俊英として名を馳せていた。

弘化3(1846)年から、長州藩剣術師範である柳生新陰流・内藤作兵衛の道場に入門。この頃から、剣術の修行に力を入れるようになった。一方、同時期に吉田松陰の松下村塾にも通っている。

剣豪としての桂小五郎が目ざめるのは、やはり斎藤新太郎と出会ってからだろう。新太郎は、神道無念流の開祖・斎藤弥九郎の長男で、父同様に才能あふれた剣士だった。武者修行の途中、長州藩に寄った新太郎が藩士たちを倒してしまったことは前述の通り。

その強さに感服したのか、新太郎の帰国に伴い、小五郎は私費で江戸へ留学している。そのまま神道無念流の練兵館へ通い始めた。

病弱だった子ども時代はどこへやら、すっかり丈夫に成長した小五郎は剣にも目覚ましい才能を示し、免許皆伝を得て入塾一年で塾頭になる。上段の構えを得意としていて、小五郎が竹刀を構えると「静謐な気迫に周囲が圧倒された」という。竹刀で胴をたたき割ったという逸話を持つ渡辺昇とともに、練兵館の双璧と謳われた。このあたり、誠に「力の斎藤」の道場らしいエピソードであるだろう。

小五郎は藩の命令で帰国するまで5年間、見事に塾頭を務め上げた。天然理心流の達人・近藤勇をして「手も足も出なかったのが桂小五郎だ」と言わしめている。

しかし、これだけの剣豪でありながら、小五郎は生涯人を斬ったこともなければ、真剣を振るったこともなかった。戦闘の気配を感じるとすぐに撤退し、時には変装までして身を隠してしまうことから「逃げの小五郎」と揶揄された。

なぜ小五郎が戦いを厭うたのかはわからない。もしかしたら坂本龍馬と同じように、目先の小さな争いではなく、もっと大きな世界を見据えていたのかも知れない。



京都市河原町にある桂小五郎の銅像。長州藩京都藩邸跡に建つ

長州藩

# 高杉晋作

たかすぎ しんさく

**類い希なる発想力と行動力を持つ逸材道半ばにして無念にも病に倒れる**

生没年 1839〜1867年

長州藩士の息子として誕生。柳生新陰流・内藤作兵衛の道場に熱心に通い、剣術の腕を磨いたという。19歳になって吉田松陰の松下村塾に通い始める。松陰は高杉の才能に早くから気づいていたが、学問に身が入らない高杉を奮起させるために、あえて同期の久坂玄瑞(げんずい)ばかりを誉めたという。

安政5(1858)年、藩命で江戸留学し、練兵館に通っている。万延元(1860)年、東北から北陸へ修行の旅に出る。多くの剣客と仕合うことも目的だったが、最大の目的は様々な人々に会って見聞を広めることだった。

文久3(1863)年、藩主の命で高杉は奇兵隊を組織。身分にこだわらず尊攘志士を集めたもので、西洋の軍隊方式に則っていた。長州藩が保守派に流れた時は命を賭して決起し、保守派を粛正。藩を攘夷倒幕派へと導いた。

抜群の行動力と発想で、幕末を渡り歩いた高杉も病には勝てなかった。第二次長州征伐で海軍総督として幕府軍と戦ったが結核のため戦線を離脱。江戸幕府の終焉を確信しながらも、大政奉還を見ずにこの世を去る。享年29歳。時代の寵児の早すぎる死であった。



小柄ではあったが長い刀を愛用していて、刀を引きずって歩いているようだったという(国立国会図書館蔵)

長州藩

# 伊藤博文

いとう ひろぶみ

**明治新政府最大の功労者はその剣の腕で自ら暗殺に臨んだことも**

生没年 1841〜1901年

長州藩の百姓の長男だったが、父が足軽の養子となったため、伊藤も足軽身分となる。

身分に関わらず入塾できた松下村塾で学んだ(ただ、貧しかった伊藤は建物の外で講義を聴いていたという)後、桂小五郎のお供として江戸へ向かう。この時、小五郎は練兵館の門弟となり塾頭まで務めている。伊藤も練兵館に通ったといわれているが、門弟とまではいかなかったという説もある。

しかし、小五郎や高杉とともに攘夷運動に身を投じた伊藤は、仲間と二人で国学者の塙次郎、加藤甲次郎を暗殺している。武芸に関係のない民間人とはいえ、二人を暗殺しているのだから、やはり腕に覚えはあったのだろう。

なお、第一次長州征伐を受けて藩の上層部が幕府に従う意志を見せた時は、高杉らとともにクーデターを起こしている。挙兵した高杉のもとへ一番に参じたのは、伊藤であったという。伊藤にも熱い長州志士の血が流れていた。

維新後は政府の要職を歴任後、初代内閣総理大臣に就任。アジアで最初の立憲体制を作り上げた。明治42(1909)年、ハルビンにて暗殺される。69歳の時だった。



同じ長州閥の山県有朋とは政治のやり方が違うが気の合う友人だったという(国立国会図書館蔵)

鏡新明智流

**傲慢な志士や人斬り以蔵すらもあしらう本物の剣客の、本物の品格。**

# 凛とした美しさ、誰も侵すこと能わず 位の桃井

**開祖◉桃井直由**

構えの美しさ、剣の品格は天下一品。流麗な体さばきで相手を翻弄した桃井の気品ある剣筋に猛者たちも一目置く。

こんなエピソードがある。桃井と高弟たちが稽古帰りに、馬上の志士に引率された新徴組の市中見廻りと遭遇した。高飛車な志士たちが一行に難癖をつけた時、桃井は馬上の主を引きずり下ろして「講武所教授方の桃井春蔵だ。理不尽は許さない。ご希望ならお相手も辞さない」と叱りつけた。

相手は桃井の気迫にのまれ、何もできずに平謝りしたという。まさに抜刀せずに相手を圧倒する「位の桃井」の本領発揮であった。

さて、桃井春蔵直正は鏡新明智流の四代目である。初代の桃井直由は郡山藩士だったが、剣術好きが高じて辞職。諸国をさすらい、柳生流、戸田流、堀内流、一刀流を身につけたという。養子の直一とともに江戸で道場・士学館を開く。

三代目の直雄の時に、当時14歳だった田中甚助が入塾する。沼津で直新陰流を二年習っていた。直雄に才能を見込まれた彼こそが、四代目の桃井春蔵になったのだ。

桃井の士学館でもっとも有名な剣豪は、土佐の武市半平太、岡田以蔵だろう。桃井は武市の剣、人格を見込んで塾頭に任命。塾頭をよく務めた武市は帰国後、攘夷運動の真っ直中に身を投じていく。それは血塗られた道でもあった。

## 武市、岡田の攘夷志士を育て上げた士学館

鏡新明智流(きょうしんめいちりゅう)四代目・桃井春蔵直正は構えの美しい剣士であった。その凛とした美しさを、ある幕臣は「その姿勢、位は他に類無し」と激賞したという。「位の桃井」が生まれた道理である。

とはいえ、構えの美しさだけで桃井の士学館が、江戸の三大道場に数えられたはずがない。「位の桃井」の真髄は、剣を抜かずに相手を伏せさせることにある。



二代直一が開いた士学館はあさり河岸（現・中央区新富付近）と呼ばれる地域にあった。三代直雄で衰退するが、四代直正で隆盛を極めた



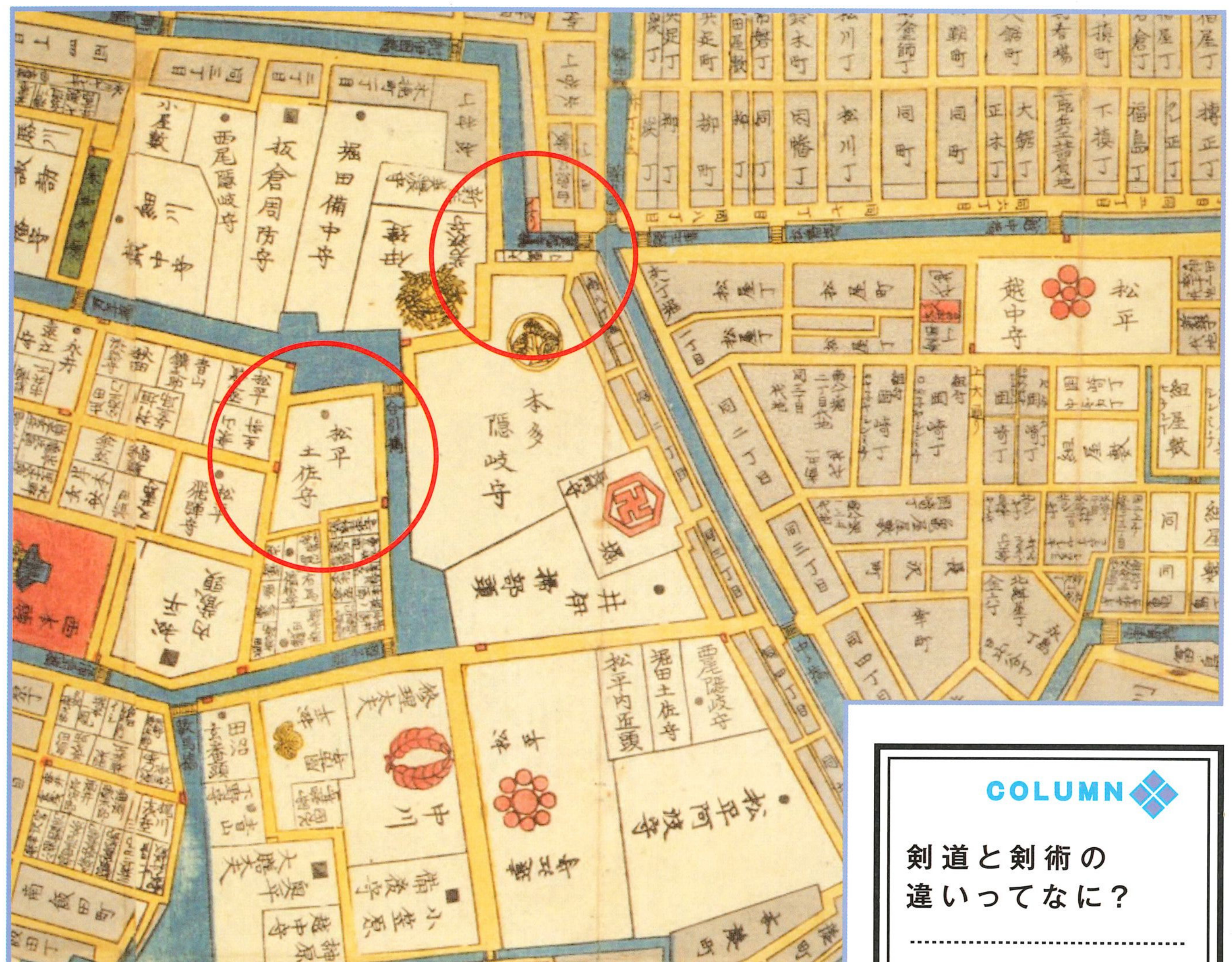




かつて士学館があった近く。信号の150メートル程先には、龍馬も寄宿していた土佐藩築地邸（現・中央区役所）があり、武市はそこから通っていた

桃井自身は幕府に召し抱えられた時期もあったが、途中で一介の道場主に戻っていた。やがて価値観が一変し、幕府が朝敵となる時がやってきた。桃井は彰義隊に誘われたがこれを断り、朝廷側に出仕して薩長兵に剣を教えている。

晩年は神官の任につき心穏やかに過ごしたというが、刃物を持ったゴロツキ三人を投げ飛ばしたなど、豪快な逸話も多く残る。明治18（1885）年、コレラで没。



江戸切絵図 築地八町堀日本橋南絵図（国立国会図書館蔵）

左の「松平土佐守」が土佐藩築地邸。その右上につぶれて読みにくいが「大富丁」（大富町）とあるあたりがあさり河岸。桃井道場はここにあった

### COLUMN 剣道と剣術の違いってなに？

剣道と剣術の大きな違いは、やはり「人を斬るための技術か否か」という点。太平の世に発展したとはいえ、剣術は人を斬る技術を学んでいる。面の打ち方も真っ直ぐに打ち下ろす剣道とは違い、斬った時に頭蓋骨に引っかからないように、斜めに振り下ろすという。

鏡新明智流の剣豪たち

# 勤王の世を求めて暗躍する剣豪たち

桃井によって創設された鏡新明智流は今や失伝してしまった。使い手の幾人かは非業の死を遂げている。

## 陸援隊

直接の剣の師匠は武市半平太。しかし師匠とは異なる方法で倒幕を夢見ていた

# 中岡慎太郎

なかおかしんたろう

生没年 1838～1867年

土佐国の庄屋の長男として生まれる。安政2（1855）年頃から、武市半平太の道場で剣術を教わっている。武市が江戸に剣術修行に出ると岡田以蔵らとともに同行し、武市と同じく桃井春蔵の士学館へ入塾したようだ。

実をいうと、道場でどうだったのか、剣士としての中岡の姿は今ひとつ伝わっていない。確かなのは、武市半平太が創設した土佐勤王党にいち早く参加したことだ。

むしろ中岡の本領は土佐勤王党解体後に発揮された。土佐藩で尊攘派への弾圧が始まると、いち早く脱藩。都落ちしていた公卿・三条実美の従者となって、各地の脱藩志士のまとめ役になっている。一方で政敵の暗殺を画策しているが、これは未遂に終わっている。

攘夷志士への弾圧を前にして中岡は雄藩連合による武力倒幕へと傾いていく。坂本龍馬などと同じく各地を飛び回り、脱藩志士のまとめ役を引き受け、薩長同盟や薩土密約の締結のために尽力した。

慶応3（1867）年、長州の奇兵隊を参考に陸援隊を組織し、中岡が隊長に就任する。

中岡や龍馬が夢見ていた倒幕・開国はそこまで近づいていたかに見えたが、同年11月、京都の近江屋で面会していた坂本龍馬ともども暗殺される。背後には過激な攘夷を望まない土佐藩上層部の意向もあったといわれる。享年30歳。



高知県室戸岬にある中岡慎太郎の像。京都の円山公園には坂本龍馬と並んだ像もある

## 土佐藩

土佐藩きっての剣豪が目指した攘夷の道 それは血にまみれた修羅の道だった

# 武市瑞山

たけちずいざん

生没年 1829～1865年

幕末志士の中で、鏡新明智流の剣豪といえば、まず武市瑞山（半平太）の名前が挙がるだろう。

武市は土佐藩白札郷士の出身。初めて剣を習ったのは12歳の時で、一刀流の師匠についた。その師匠が亡くなると、今度は同じ一刀流の麻田勘七に入門し、免許皆伝を得る。安政2（1855）年、妻の叔父である棒術家・島村寿之介と共同で開いた道場には、百二十人を超える門弟が集った。

すでにひとかどの剣士だった武市だが、翌年に藩の臨時御用として江戸への剣術留学が許された。門弟の岡田以蔵、中岡慎太郎らとともに江戸へ出てきた武市は、師事先に桃井の士学館を選んだ。

これには、武市留学の前年に土佐藩へ桃井の門弟が招聘されたことも理由だろう。折から、土佐藩には一刀流の名手・石山孫六が滞在していて、土佐藩の剣には彼の影響が強く出てきていた。しかし土佐に招聘された桃井の高弟・上田馬之助は、この石山に勝利したという。武市勢が士学館の剣に興味を持ったのも道理なのである



武市が獄中で描いたという自画像。南画の腕があり、美人画なども遺している（『武市瑞山関係文書 第一』／国立国会図書館蔵）

武市は熱心な生徒だった。士学館の稽古だけでなく、桃井について回り各藩邸で他流試合もこなしていった。桃井もまた武市の才能と情熱を認め、塾頭に任命している。多少ダレた風のあった士学館の塾風が、武市が塾頭になったところパリっと引き締まったというから、やはり武市には人をまとめる才能があったのだろう。

安政4（1857）年、祖母の病状悪化に伴い、武市帰国。しかし、この時すでに武市の胸には剣の道だけでなく国家の大事に向けた思いがあったのかもしれない。

桂小五郎、久坂玄瑞、高杉晋作らの志士と交流し、ますます尊皇攘夷思想を固めた武市は、ついに文久元（1861）年「天皇による国家統一・国威発揚」を謳った土佐勤王党を結成する。そこには土佐・薩摩・長州・水戸の若き志士たち百二十九名の名があった。

武市は、藩の論調を攘夷尊皇に持っていきたかった。それには公武合体を説き開国論者である参政・吉田東洋が邪魔だ。話し合いの余地がないと見た武市は、那須信吾らに命じて東洋を暗殺する。

この後も武市率いる土佐勤王党は、天誅・斬奸と称して政敵を暗殺し続けた。幸か不幸か、剣豪武市半平太の腕が存分に発揮されたであろうことは想像に難くない。



しかし、文久3（1863）年、八月十八日の政変で長州藩が失脚すると同時に攘夷志士への弾圧も強まってくる。武市も投獄されたが、仲間に類が及ぶのを怖れて一貫して容疑否認。最終的には山内容堂より「主君に対する不敬行為」の罪状で切腹を命ぜられる。慶応元（1864）年5月、誰もなし得なかったという三文字割腹の法を用いて、自決。享年37歳。

# 剣に生き、義に散った隻腕の剣士 伊庭八郎

才を認められながら跡目を継がなかった激動の時代を駆け抜けた若き天才剣士。

開祖●伊庭秀明

江戸末期、大衆の間で流行した心形刀流。その極意は第一に心を磨くこと。磨いた義の心とともに生きた剣士がいた。

## 山岡鉄舟の突きを三度とも避ける

元禄の頃、江戸で大流行した剣術の流派がある。それが練武館の心形刀流だ。心を磨くことを第一に、技(形)を磨くことを第二にしているという。奥義に曰く、

「つねに心を直にして形を正すように工夫し、それによって心、形、刀三者一体の働きができる」

だから心形刀流というわけだ。多彩な技がある上に「強さだけを求めなくてもいい。体や心の養生のために修行するのもひとつの方法だ」と打ち出したために、とても大衆受けし、八代目秀業・九代目秀俊の頃には門弟も千人を超えた。後世では、玄武館、練兵館、士学館の三大道場に、この練武館を加えて「四大道場」として数えられている。

伊庭八郎秀穎は、心形刀流の十代目になるはずだった。八代目秀業の嫡子だったが、幼少時は武芸よりも読書を好んだ。剣を始めたのは十代半ばと遅いスタートだったが、才能があったのだろう、ぐんぐん上達していく。しかし、父・軍兵衛秀業が流行病で急逝したため、高弟の垪賀惣太郎が養子に入り、九代目秀俊を名乗る。もともと心形刀流は、高弟が養子になって跡目を継ぐことが多かった。

九代目に鍛えられ、ますます才能を伸ばしていく八郎。こんなエピソードが伝わっている。

ある時、北辰一刀流の山岡鉄舟と八郎が仕合った。山岡は「鉄砲突き」と呼ばれる強烈な突きが得意技。だが、八郎はその鉄砲突きを三度もかわしてしまう。山岡の外した竹刀は道場の羽目板を破ったが、八郎はそれを見て微笑んだという。八郎の技巧ぶりと剛胆さを示しているといえるだろう。

しかし、八郎が十代目を襲名することはなかった。時代は激しく動き始めていた。文久3(1863)年、八郎は奥詰衆(将軍の親衛隊)のひとりに選抜される。翌々年、奥詰衆は遊撃隊に改編され、八郎もそこに加えられた。慶応3(1867)年、十四代将軍家茂の護衛のため、八郎たち遊撃隊も上洛。京では二条城に逗留し、しばしば上覧試合も行なわれたそうだが、ここでの八郎は勝ち負けにこだわらなかったといわれる。

実は、当時の八郎にはすでに労咳の症状が出ていた。おそらく自分の寿命が長くないことを自覚していたのだろう。八郎は幕府と将軍に殉じることを決意していた。

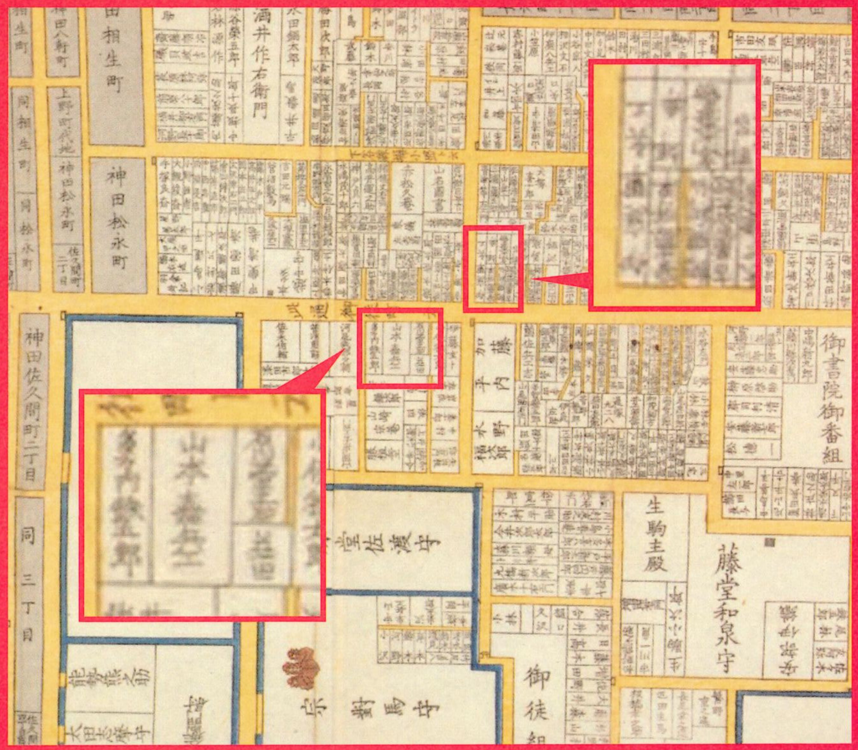
慶応4(1868)年、ついに鳥羽伏見の戦いが勃発。十五代将軍慶喜の遊撃隊に入った八郎は、新撰組とともに薩摩兵相手に奮戦する。三人ほどを斬り捨てたが、無常にも被弾し昏倒。将軍は江戸に逃げ帰り、幕府軍は敗走した。

一命を取り留めた八郎は、ふたたび遊撃隊に参加。箱根で再度官軍&小田原藩軍と戦った。ここで八郎は左腕を失うほどの重傷を負うが、少しも臆することなく右手のみで刀を振るい続けた。

その後、榎本艦隊と蝦夷へ向かうも船が座礁。かろうじて助かった八郎は、もはやこれまでと自害しようとするが、従者に涙ながらに止められ、函館の地を踏む。

明治元(1868)年、榎本武揚の蝦夷共和国の元で歩兵頭並に命じられると、隻腕でありながら新政府軍に対して徹底抗戦を貫き通した。4月20日、木古内の戦いで胸に被弾。5月25日に息を引き取った。剣に生き、義に生きた剣豪の散り様であった。享年27才。

江戸切絵図 下谷絵図(国立国会図書館蔵)



嘉永4(1851)年の台東区上野近郊。地図上には「伊庭軍兵衛」の名がある。この数年後に、斜向かいの「山本嘉兵衛」あたりに伊庭道場は建てられたという




名誉新談/伊庭八郎(東京都立中央図書館特別文庫室蔵)

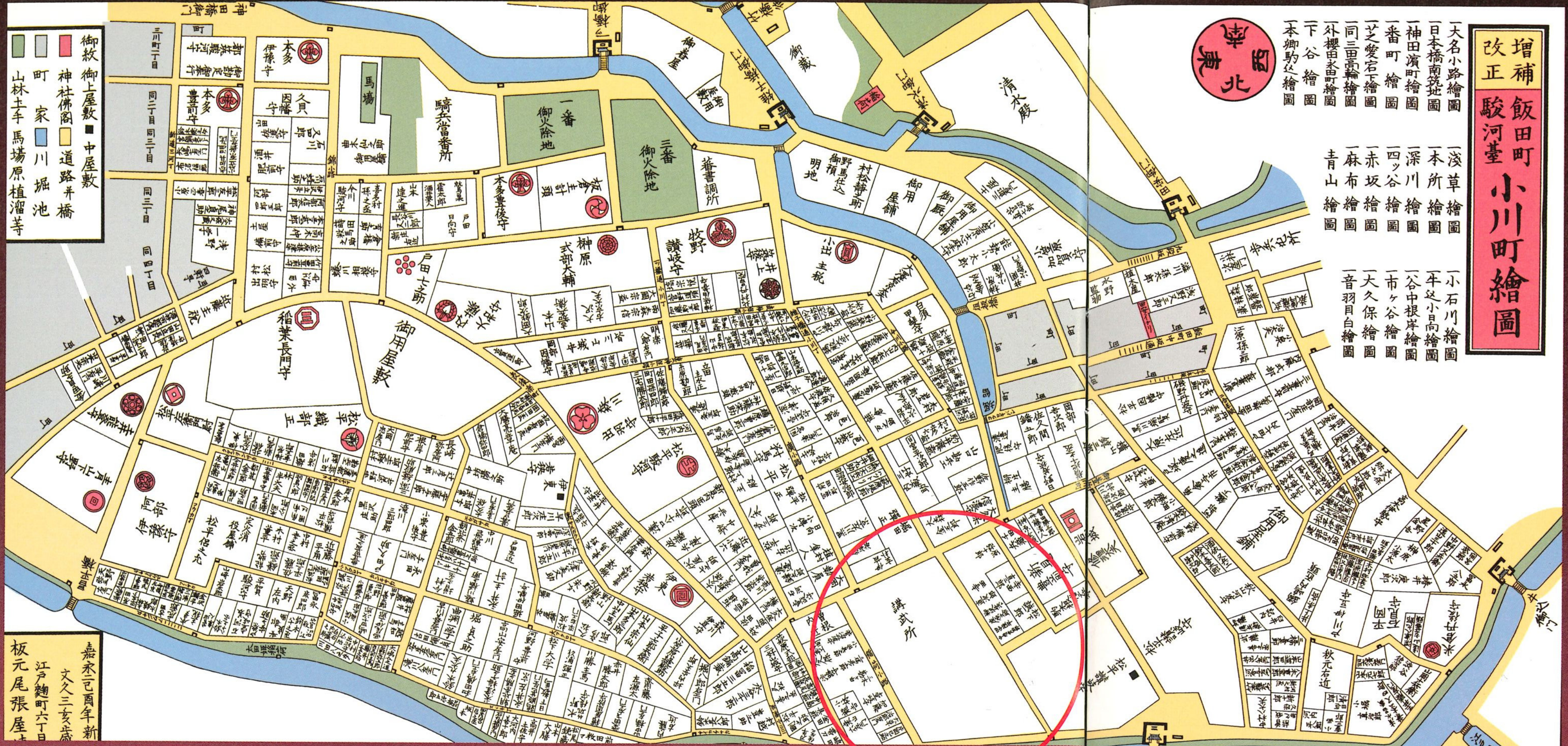
月岡芳年に描かれた伊庭八郎の錦絵。庶民からも人気を集めた

深く絡み合った剣豪たちの縁。
切磋琢磨して、剣の道をひた走る男たち。

# 幕末の三剣豪

## 幕末の剣聖と呼ばれた男が作った講武所

三大道場とは別に、後世の人々から「三剣豪」と呼ばれた剣の達人たちがいた。一に男谷、二に島田、そして三に大石……。




江戸切絵図 飯田町駿河台 小川町絵図（©人文社）

講武所はもともと築地に建てられたが、安政7（1860）年に神田小川町に移転した。建坪は1686坪、敷地面積は1万坪以上。道場としてはかなり大きい

### 老中・水野忠邦も惚れ込んだ男谷の剣

玄武館、練兵館、士学館（＋練武館）の三大（四大）道場とは別に、江戸後期には三剣豪と呼ばれる男たちがいた。幕末・明治の儒学者中村栗園は「天保年間、剣術をもって天下に鳴ったのは江戸に男谷某、柳川には大石某、中津には島田見山がいた」と記している。

江戸の男谷某とは、男谷信友のことだ。8歳から剣術を学び、直心影流十三代目を襲名している。剣の腕だけでなく槍や弓も達者だったらしい。おそろしく腕の立つ男谷だったが、気性は穏やかで冷静。女中や下人を大声で叱責することなど、ほとんどなかったという。

それまでの剣術は固有の型を守るあまり、他流試合を禁じていることが多かった。男谷は他流試合や打ち合いを推奨し「固有の型に固執することはない。むしろ相手の長所を参考にしろ」と言っている。そんな男谷の試合は、一風変わっていた。三本勝負のうち、必ず相手に一本花を持たせるのである。男谷の圧倒的な技量がなければ不可能な所業だっただろう。

さて、天保9（1838）年のことだ。つとに江戸に鳴り響く剣豪・男谷の元へ、ある若武者がやってきた。豊前国中津の剣士・島田虎之助である。この虎之助、幼少の頃から才能を示し、郷里の道場ではすでに敵はいなかった。だから武者修行に出てきたという。

試合を受けた男谷はいつもの通り、一本を虎之助に取らせた。だから虎之助は「天下の男谷先生もたいしたことはない」と思い込んでしまった。その後、井上伝兵衛の道場に出向いた虎之助は、男谷との勝負を得意げに話した。すると井上は不機嫌になって言う。

「あの男は本当の技量など、簡単には見せてくれんのだ」

井上の紹介状を持って男谷を再訪し、ふたたび剣を合わせた虎之助。すると先ほどとは様相がまったく違う。男谷の竹刀の先が膨れあがるような、巨大なプレッシャーが虎之助に迫ってくる……。

結局、虎之助は何もできないまま完敗。彼我の実力差を痛感して男谷に弟子入りしたという。その後、よく修練を積み一年ほどで師範免状を受けた。だが、39歳で病没。男谷は「右腕を失ったようだ」と弟子の死を嘆いたという。

男谷はその後、幕府に各流派をまとめて集団訓練させる組織が必要、という建白書を提出。それが採用され、講武所が発足。男谷が初代頭取に任じられている。文武両道で人望も厚かった男谷を、のちの人々は「幕末の剣聖」と呼んだ。

残りひとり、柳川の大石某は筑後柳川藩の大石進のこと。身長七尺の大男で、五尺三寸あまりの長竹刀を愛用していた。大きな体躯と長竹刀から繰り出す強烈な突きが自慢で向かうところ敵無しだった。

この大石が江戸に出てきたことがある。彼は桃井や伊庭の道場で見事に勝利を収め（桃井などは本気で勝負をしなかったという説も）、ついに玄武館で千葉周作と対戦した。千葉は長竹刀に対抗すべく、樽の蓋のような鍔をつけていたと伝えられる。常識にとらわれない、周作らしい奇策で引き分けに持ち込んだ。

大石は男谷とも戦っている。ただし、勝敗は史料によって異なり、真偽の程はわからない。

一方、大石ではなくて比留間与八を三剣豪に推す説もある。比留間は、秩父に道場「耀武館」を持つ甲源一刀流の達人で「車切り」という逆袈裟斬りを得意として剣客たちに恐れられたという。



千代田区三崎町の日本大学法学部図書館の前に「講武所跡」の標札が立つ。道路の右側から神田川までの一帯が講武所だった

その他の剣術〉〉

❖天然理心流❖

真剣を振るうことを想定した木刀での修行。
実戦で負けないことが最大の目標。

# 技よりも気組み 新撰組が振るう剛剣

## 開祖◉近藤内蔵之助

腕を斬られても、相手の頸を斬れ。
農民たちが自衛のために学んだ田舎剣術。
その謹直な流派が時代を動かした。

### 多摩や相模の農民が支持した実戦剣法

近藤勇、土方歳三、沖田総司など、新撰組の主たるメンバーが使い手だったことで有名な天然理心流。その創設は寛政年間（1789～1801年）に遡るという。創始者は近藤内蔵之助で、彼は自称「天真正伝香取神道流の開祖・飯篠長威斎家直の直系」だった。剣術だけの流派と思われがちだが、柔術・棒術なども含まれ、それぞれに皆伝がある。

二代目は近藤三助。内蔵之助から指南免許を得て、彼の養子になって跡目を継いだ。内蔵之助は市川柳橋に試衛館道場を開く一方、近くの農村に出向いて農家の子弟に指南をした。二代三助は武蔵国多摩地方や相模国に出向いて、富農層を門弟に取り込んでいった。

実際、武士出身が多い鏡新明智流や神道無念流に比べると、天然理心流の門弟には武蔵や相模の豪農層が圧倒的に多かった。それには時代背景がある。江戸も後期になると権力腐敗が進み、治安が悪化してくる。役人が当てにならないことを充分承知していた富農層は、自ら自衛手段を探さなくてはならなかった。そういった意味では、富農が多い多摩地区や相模地方に目をつけた内蔵之助たちは、慧眼といえるのかもしれない。

自分たちの命と財産を守るための剣術を身につけたい。天然理心流が栄えた背景には、そういう農民の決死の覚悟があるので、流派には華麗な打ち合いや多彩な技というものは少ない。あくまでも敵を倒すための実戦向けの剣術なのである。

基本の理念は、

「勝つ剣術ではなく負けない剣術」

すなわち腕を斬られても相手の頸を斬って命を絶つべし、という気迫で剣士たちは臨むという。まさに捨て身の剣術なのだ。

そのため、天然理心流では、江戸の流派があまり省みなくなった木刀による組稽古が重要視されていた。とはいえ、形式張った古くさい型を延々繰り返しているわけではない。

ご存知の方も多いと思うが、木刀はだいたい竹刀の三倍以上の重さがある。天然理心流では、普通の木刀以上に太くて重たい木刀を稽古に使用していた。木刀を握りしめた時、親指と他の指がくっつかないほどだったという。

それをぶんぶん振り回して稽古するのだから、当然握力もつく。さらに真剣を握れるような手の形が作れるし、重たい木刀を振るうために足腰が鍛えられ、気も練られていくというわけだ。

ちなみに近藤勇が稽古用に使っていたという木刀が現在も残っているが、これは真剣と同じ重さだという。ここにも天然理心流の実戦主義が見て取れる。田舎剣法と笑われながらも、幕末の動乱期に天然理心流がひときわ大きな役割を果たしたのは、ひとえにこの実戦主義のおかげだろう。

ところで二代三助には多くの高弟がいたが、最終皆伝である印可・指南免許を誰にも与えないまま客死してしまった。だから後継者がややこしいことになった。

そういった混乱の中で、なぜ嶋崎周助が三代目近藤を継いだのかは不明だ。周助が三助から得た免許は剣術のみだったが、周助以外の高弟には剣術・柔術・棒術の免許すべてを会得した者も複数いたはずだった。だが実際に近藤を名乗ったのは周助のみであった。

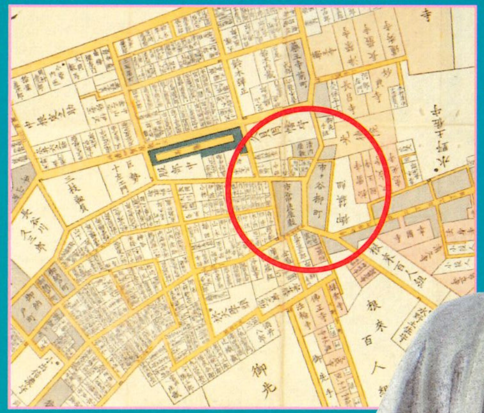
この三代周助のもとで頭角を現したのが、多摩の農民・宮川久次郎の三男・勝五郎。周助の養子となって近藤を継ぎ、近藤勇と名乗った。のちの新撰組局長である。

#### COLUMN

**天然理心流の段位とは？**

天然理心流は5段位。切紙（1年6ヶ月）→目録（1年6ヶ月）→中極意目録（3年2ヶ月）→免許（3年6ヶ月）→指南免許（10年）の順で昇段する。カッコ内は取得にかかるおおよその年数。沖田は10代前半で指南免許を得るほどの才能だった。

江戸切絵図 市ヶ谷牛込絵図（国立国会図書館蔵）



市谷甲良町にあった試衛館の道場。大棟梁の甲良氏が幕府から拝領した土地を町人に貸していたという。三代周助の身元保証人・山田屋権兵衛の蔵の裏手にあったといわれる




試衛館跡地に建つ記念碑。現在の市谷柳町付近になる。かつてはにぎやかな町人のまちだったが、今では閑静な住宅街だ



近藤勇の像（板橋市）



土方歳三の像（日野市）




近藤勇が斬首された板橋に墓所がある



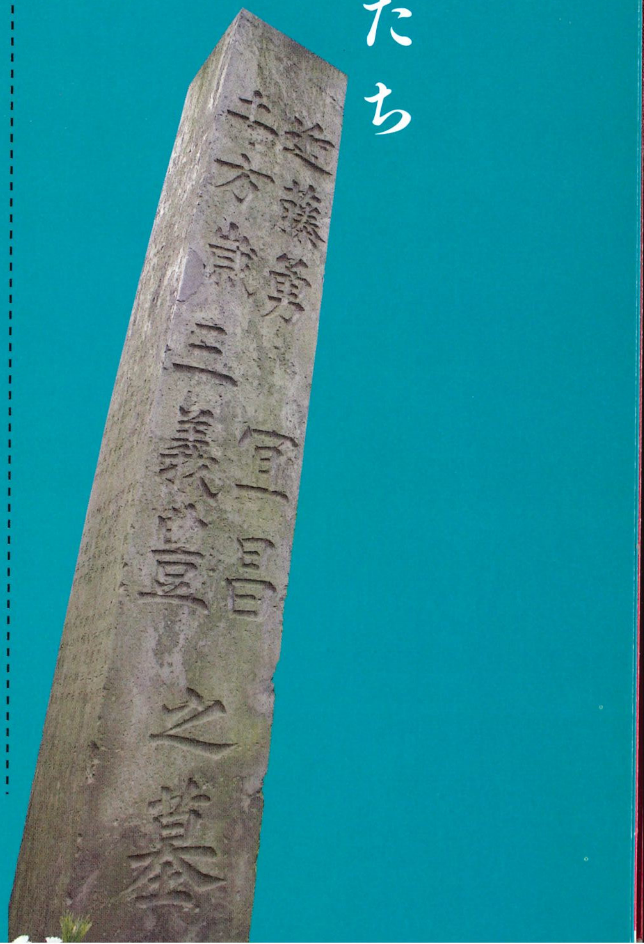
近藤神社と生家跡。道路を挟んだ斜向かいには天然理心流五代目を継いだ勇の娘婿の道場「撥雲館」がある（調布市）



# 時代を動かした剛の剣の使い手たち

天然理心流の剣豪たち

田舎剣法と揶揄された天然理心流は実戦の場を得て、歴史に燦然ときらめいた。新撰組隊士を支えた、主を裏切らない剣だった。




## 局長

## 近藤勇（こんどういさみ）

**並々ならぬ胆力備えた新撰組局長 人柄同様、剣筋も剛胆にして実直**

生没年 1834～1868年

武蔵国多摩郡の農民・宮川久次郎の三男に生まれる。幼名は勝五郎。嘉永元（1849）年、天然理心流の試衛館道場に通い始め、めきめきと頭角を現す。

まだ近藤が宮川勝太と名乗っていた14歳の頃、父の不在時に自宅に賊が押し入った。兄二人はすぐに立ち向かおうとしたが、それを三男の勝太が「今はヤツらも気が立っているから、自分たちがケガしてしまう」と止めた。そして、賊が仕事を終えて引き上げようとした時に、勝太を先頭にそれっと斬りかかった。慌てた賊は金品を投げ捨てて逃げ出したという。

この噂を聞いて、天然理心流の三代目が「百姓にしておくには惜しい」と勝太を養子にしたのだ。

そういう肝の据わった近藤だから、剣もまた豪快にして実直だった。近藤は自分の門人たちに「剣は気組みだ」と教えたという。要は相手を飲み込むような気合いを持て、ということだろう。

文久3（1863）年、試衛館メンバーは浪士組に参加。内部の権力闘争を経て、近藤勇を局長とする「新撰組」ができあがった。

翌年、池田屋事件勃発。この事件で新撰組の名が一躍知れ渡る。慶応3（1867）年、新撰組を離反した伊東甲子太郎、藤堂平助ら御陵衛士を暗殺。ただし、その報復で近藤は狙撃され、鳥羽伏見の戦いには参加できなかった。

翌年、甲州勝沼の戦いで敗れ、新政府軍に出頭。この時、近藤は大久保大和と名を変えていたが、新政府軍に近藤を知る者がいて顔がばれてしまう。4月25日、板橋刑場にて斬首。享年33歳。

（国立国会図書館蔵）



## 副長

## 土方歳三（ひじかたとしぞう）

**竹刀剣術は苦手だったが実戦には強い 新撰組と近藤を支え続けた「鬼の副長」**

生没年 1835～1869年

新撰組副長。武蔵国多摩郡の農家の生まれ。十人兄弟の末っ子だったといわれる。十代後半には生家が作る秘薬を行商しつつ、様々な道場で手合わせをしていた。真紅の面紐を後ろへ長く垂らした土方のことを「道具のつけ方も知らない」と侮った相手は、いざ戦うとこてんぱんにやられたという。

やがて天然理心流の近藤勇と知り合い、土方も入門。以後、土方は生涯のすべてを近藤の片腕として働いた。新撰組内では規律を破った者には、幹部でも切腹を申し伝えた。その厳格な様子から「鬼の副長」として恐れられていた。

実直で豪快な近藤の剣に比べると、土方の剣は器用で才気走っていた。実は土方は天然理心流の中極意（ちゅうごくい）目録までしか得ていない。竹刀剣術はあまり得意ではなかったが、実戦となると滅法強く、足下の砂を蹴り上げて相手を惑わした隙に斬るなど、臨機応変な戦いぶりであったという。

近藤とどこまでも行動をともにした男は、甲州勝沼の戦い後に近藤が斬首されると、死に場所を求めて北へ赴く。そして望み通り、侵攻してきた新政府軍と戦い、華々しく散っていった。享年35歳。


（国立国会図書館蔵）

役者のような色男で、京でも女性の憧れの的だった

## 一番隊隊長

## 沖田総司（おきたそうじ）

**近藤も後れを取る？ 新撰組随一の使い手 道半ばにして病に倒れ、無念の死……**

生没年 1842？～1868年

新撰組一番隊隊長。陸奥白河藩士の長男として江戸に生まれる。9歳頃から試衛館の内弟子に。若くして塾頭を勤め、15歳の頃に試衛館で日野神社に奉じた額には近藤より先に名前が書いてある。

天才的な剣の使い手だった。永倉新八は後年「土方や井上、藤堂、山南が竹刀を持っては子ども扱いされた。本気でやれば師匠の近藤もやられるだろうとみんなで噂した」と伝えている。近藤も、自分に何かあった場合は跡目を沖田に譲ろうと考えていたらしい。

新撰組では一番隊隊長を務めていた。沖田が初めて人を斬ったのは文久3（1863）年。浪士組の殿内義雄が相手だった。その後、芹沢鴨、大坂の与力・内山彦次郎などの暗殺も手がけている。幸か不幸か、沖田の天才的な剣の腕は新撰組でますます冴え渡った。

剣を持てば修羅か羅刹かというような沖田だったが、普段は陽気でいつも冗談を言っては笑っているような性格だったという。

元治元（1864）年の池田屋事件では先陣を切って斬り込む。だが、途中で昏倒して戦線離脱。発症のためと言われてきたが、実際の発症はもっと後という説もある。いずれにしろ慶応3（1867）年以降は前線に立つことなく、療養せざるを得なかった。

慶応4（1868）年、近藤の斬首に遅れること2ヶ月。肺結核のため死去。最期まで近藤の無事を案じていたという。享年25歳。

竹刀剣術と実戦剣術の違い




旅館・池田屋の跡地は、現在同じ名前の居酒屋になっている。二階には新撰組のイラストも



池田屋の跡地に建つ碑。現在でも、新撰組ファンによる現地詣でも多いようだ

# 新撰組で一番強かったのは誰だ?

幕末きっての剣豪集団・新撰組。腕に覚えのある達人ばかりが集まった中で誰が一番強いのか? 検証してみよう。

# 一に沖田、二に永倉、三に斎藤

## 最後の剣客よりも強かったという近藤

名だたる剣の使い手が揃っていた新撰組。やはり気になるのは「新撰組でもっとも強い男は誰か?」ということだろう。

昔からこういった話題で、必ず名前が挙がるのが「一に沖田、二に永倉、三に斎藤」である。これはそのまま隊の隊長でもある。沖田が一番隊隊長、永倉が二番隊隊長、斎藤が三番隊隊長だ。隊員を指揮する隊長の技量が秀でているのは当然だろうから、やはりこの三人が隊士内では抜きんでていたと考えられる。この三人は、新撰組の撃剣師範も務めていた。また、先にも書いたが、この三人には元新撰組・阿部十郎の証言もある。

阿部は伊東甲子太郎に従って新撰組を脱退し、御陵衛士になったメンバーだ。外出していたため油小路の変(藤堂らが暗殺された事件)を逃れ、のちにその復讐として近藤を狙撃したひとりである。

その阿部が言うには、

「沖田総司、これがマア勇の一弟子でなかなかよく使いました。その次は斉藤一と申します。それからこれは派が違いますけれども、永倉新八という者がおりました。この者は沖田よりはチト稽古が進んでいました」

つまり、沖田が近藤の一番弟子でよい技量を持っていて、次に斎藤一だと言っているのだ。斎藤の流派は一刀流とも無外流とも言われるのだが、阿部は天然理心流ととらえていたようだ。

その二人よりも稽古が進んでいたと阿部に言われたのが、神道無念流の永倉だ。

ところが当の永倉自身はこのように述懐している。

「土方歳三、井上源三郎、藤堂平助、山南敬助などが竹刀を持っては子供扱いされた。恐らく本気で立ち合ったら師匠の近藤もやられるだろうと皆が言っていた」

この時、永倉は自分の腕については触れていないが、沖田の剣に一目置いていたことは確かだ。

沖田にはこんなエピソードもある。若い頃から試衛館の師範を務めていた沖田、その稽古は相当厳しいものであったらしい。稽古中の沖田は「荒っぽくて、すぐ怒る」といわれ、門弟たちから近藤よりも恐れられていたという。

さて、ではここまで名前の出てきていない近藤、土方の強さはいかほどだったのだろうか?



## 時代を知る人々の証言から振り返る、新撰組の真の強さ

まず土方だが、これは前述したように、竹刀を使った道場剣法は苦手だった。天然理心流でも中極意目録までしか得ていない。十代の頃、行商しながら、あちらこちらの流派で修行した時の癖が抜けなかったためといわれている。

ただ、実戦では滅法強くて、砂を相手にぶつけたり、首を絞めて殺したりと、剣術にとらわれない戦い方をした。土方の恐るべきところは、こういった目的のための合理主義にあるのだろう。同時に新撰組という組織と、独自の集団戦法を作り上げた頭脳が、土方最大の武器であったともいえる。

今ひとり、局長の近藤だが、天然理心流を継ぐほどだから、当然強い。前述の阿部はこう述べた。

「勇は百姓の子でありますけれども、なかなかこの事(撃剣)にかけましては熱心なものでございます。で、それがために近村におきましては榊原健吉とか近藤勇といいました。けれども実地(実戦)にかけましては、榊原健吉よりは近藤勇のほうが上だろうというのでございます」

ここに登場する榊原健吉とは「幕末の剣聖」こと男谷信友の弟子で講武所師範を務めた剣豪。維新後に帯刀が禁じられると、剣を使った興業(撃剣興業)を開いて剣術の命脈を保った人物である。明治20(1887)年には、明治天皇の御前で「天覧兜割り」を成功させた、最後の剣客といわれる実力者だ。

この榊原よりも近藤の実力は上だったと阿部は証言している。阿部はもともと反近藤派で、近藤の性格については「勇は奸智に長けた男」と称している。そういう立場でも認めざるを得ないほど、近藤の腕は立ったのだろう。

おそらく竹刀勝負では沖田が勝つ。しかし、実戦勝負は、相手を飲み込むような気合いも含めて近藤が上だった。そういうことだったのだろう。

COLUMN

### 鍔迫り合いなんてウソ?

時代劇でおなじみ、剣豪同士の鍔迫り合い。実は、真剣同士で鍔を合わせたら刃で顔や手を斬ってしまうため、鍔迫り合いなんてあり得ないのだ。鍔迫り合いは、竹刀を使う道場剣法や現代剣道だからこそできる技。真剣の戦いは、抜いたら斬るしかないのである。




勇猛に描かれた近藤勇。明治の錦絵シリーズ「名誉新談」の一枚で、月岡芳年が画を描き、松林伯園が記述を担当した(名誉新談　近藤勇/東京都立中央図書館特別文庫室蔵)

# 無外流（むがいりゅう）

## 真理以外、何も存在しない

**開祖◎辻月丹**

**求道者・月丹が長年の問答の末にたどり着いた境地。無外流の真理は、剣禅一如の中にある。**

時代小説でもおなじみの流派だがその内容は謎に満ちている。禅語で説かれた剣の真理とは？

### 真理に到達するまで19年の禅問答

池波正太郎の人気時代小説『剣客商売』の主人公・秋山小兵衛は無外流の達人である。山本周五郎の『雨あがる』の主人公も無外流の使い手だ。無外流は、時代劇や時代小説の定番といっていい。

といっても、無外流がどんな流派だったのか、実は不明な点も多い（だからこそ、小説の題材になりやすいのかもしれない）。開祖は近江出身の辻月丹で、１６８０年頃のことだ。13歳で京に出て、まずは山口流の皆伝を得た。その後、愛宕山などにこもって荒行を行なう。この修業時代、襲ってきた山賊を一刀の元に返り討ちにしてしまい、この山賊の首級をドクロにして一生持ち歩いたという。

20代半ばに江戸に出てきて道場を開くが、さっぱり繁盛しない。そんな折、下男が剣を教えてほしいと申し出た。月丹は「ついに下男にまで侮られたか」と内心情けなく思っていたが、ふと気づいた。

「あれが雇いの下男でなければ、剣の稽古を断っていただろうか」

そうして自分にまだ俗世の欲があることを恥じた月丹は、禅寺に通い始める。やがて通いつめて19年、月丹はついに大悟して「無外流」を創設するのである。

ところが、流派の中身は謎に包まれている。無外流といえば居合を想像する向きも多いが、この無外流の居合は四代辻資幸の高弟が取り入れたもの。月丹の時代には居合はなかったと考えられる。また、先頃の研究では、今まで剣の心得として伝えられてきた「無外真伝剣法訣」の「十則」も、実は剣法ではなく禅の心法に近いのでは、と考えられ始めている。

月丹にはこんな逸話がある。すでに無外流の達人として名を成していた月丹のもとへ、勝負を挑んできた武者がいた。ちょうど薪割りをしていた月丹は「あとで」と言うが引き下がらない。しつこい武者に月丹は薪を武器にして武者の頭を一撃した。そしてひと言。

「これが無外流だ」

武者はあえなく倒れ伏したという。無外流は型のない剣とも言われているが、まさにそれを象徴しているエピソードだろう。

最盛期には大名家や武士階級を中心に、数多くの門弟を集めた。中でも、土佐藩では上級武士の習う剣術とされて愛好されていた。





新撰組

## 斎藤一（さいとう はじめ）

**狙ったターゲットは一刀で屠る無敵の剣を誇る新撰組の恐ろしき刺客**

生没年 1844～1915年

新撰組三番隊隊長。出身は江戸だが明石浪人を名乗っていたという。沖田、永倉と並んで、新撰組最高峰の剣士に数えられる。19歳の時、口論から旗本を斬ってしまい、京都の父の知人の道場に身を寄せる。文久3（1863）年、新撰組隊士募集に応募し、斎藤は三番隊隊長に任じられる。

新撰組内で斎藤は粛正役を多く務めた。例えば、長州藩の間者だった御倉伊勢武（みくらいせたけ）、荒木田左馬之助を背後から暗殺。また、薩摩藩と通じた武田観柳斎も、後ろから一刀のもとに斬り殺している。これも斎藤の腕があってこそだろう。

その後、伊東甲子太郎の御陵衛士にスパイとして参加し、のちに新撰組に復帰。戊辰戦争が始まると、鳥羽伏見、甲州勝沼と転戦。斎藤はつねに最前線で戦った。近藤投降後は会津藩の元で新政府軍と抗戦。会津藩が降伏した後も戦い続けたが、松平容保の使者の説得で投降した。維新後は警視庁に採用され、西南戦争で活躍する。

新撰組屈指の剣豪だった斎藤だが、その流派が明確でない。子孫は一刀流と伝えるが、研究者の間では無外流という意見もある。


生前の斎藤の写真は少ない。西南戦争に従軍した警察隊時の写真といわれる

土佐藩主

## 山内容堂（やまうち ようどう）

**末期の江戸幕府を支えた土佐藩主武芸全般に秀でた頑固者**

生没年 1827～1872年

土佐藩第十五代藩主。分家の出であったが、先代が急死したため家督を継ぐことになる。この時、幕府の協力を得ているため、のちに幕府擁護に回ったともいわれる。

武芸全般が得意な殿様だった。修めた武術は多岐にわたり、剣術は無外流。これは土佐藩上級武士が修める流派だったから当然だろう。なお居合術は長谷川流でこちらも達人級だったという。

容堂の側近、板垣退助はこんなエピソードを伝えている。

「七日七晩、休み無しの稽古を続けたことがあった。あまりの激しさにみんな倒れ、最後までお相手できたのはわずかだった」

公人の容堂も苛烈だった。藩政改革のために公武合体派の吉田東洋を重用。幕政にも口を出すが、将軍後継問題で井伊直弼に敗れて謹慎。その間に武市瑞山率いる土佐勤王党が吉田を暗殺。容堂は藩政に復帰すると、徹底的に土佐勤王党を弾圧した。一方では朝廷にも出仕していて、そんな容堂の態度を西郷隆盛は「単純な佐幕派のほうが、はるかに楽だ」と評していた。維新後は東京の別邸に妾を囲って豪奢な生活をしたという。


維新後は家臣や領民身分の者と親しむことができずに、内国事務総裁を辞任した（国立国会図書館蔵）

# 薩摩藩と示現流

## 二の太刀要らずの剛剣

開祖◉東郷重位

防御の技を持たず、二の太刀の技も持たない。
裂帛の気合いを込めた初太刀を、ただ振り抜くだけ。

勝負は一撃で決めるべし。
先手必勝、一撃必殺を是とする実戦剣術は
薩摩藩門外不出の剣法とされた。

### 防御を知らぬ薩摩藩の秘剣

薩摩藩に伝わる門外不出の剣。それが示現流である。開祖は戦国時代末期の武士、東郷重位。もともと、重位は薩摩で盛んだったタイ捨流の剣士。タイ捨流は、飛び回り飛びかかり相手を攪乱して討つなど、激しい剣技で知られる。

その重位、藩主・島津義久に従って京に上った際、京都鞍馬口天寧寺の和尚・善吉より天真正自顕流を習い、印可をもらった。そして、双方の流派を取り入れて新流派を創設したのが始まりである。

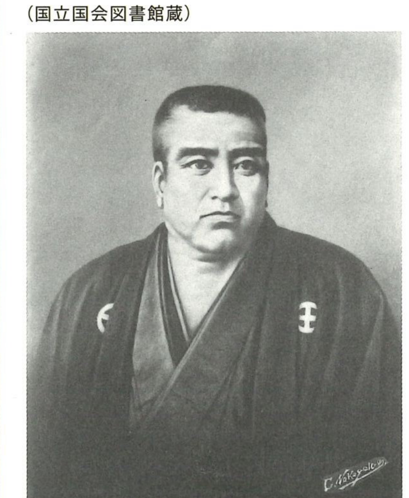
慶長9(1604)年、藩主・家久の命で、重位はタイ捨流の師範・新之丞と御前勝負をした。木刀を額近くで水平に構えた重位の気迫に、新之丞は動くことすらできない。家久に叱責され打ち込んでみたが、木刀は真っ二つに折れた上に、新之丞はへたり込んでしまった。業を煮やした家久が自ら打って出るが、重位は扇で家久の手を痛打。圧倒的実力を見せつけた。この時から薩摩藩では示現流が重用されるようになった。

さて、この示現流、どのような剣法なのであろうか。




薩摩最大の英雄と言えば西郷隆盛。西南戦争では示現流の使い手たちを引導したが、当の西郷は示現流を習ったことはないという(鹿児島明暗録　西郷隆盛／東京都立中央図書館特別文庫室蔵)

(国立国会図書館蔵)







まず示現流には「防」の技がない。「攻撃は最大の防御」が特徴で、初太刀にすべてを賭けて斬り込んでいく。そのため初太刀の勢いはすさまじく、受けた相手の刀をへし折ってしまったり、受けた刀もろとも相手へ押し込み脳天を割ってしまうこともあるという。「受け太刀も二太刀も必要ない」剣法なのである。実際、江戸時代末期まで防具を見たことがないという薩摩武士も多かったそうだ。

だから新撰組局長の近藤勇は、つねに隊士たちに「薩摩者と勝負する時は、まず初太刀をかわせ」と口酸っぱく注意していた。

修行方法も独特な面がある。まず、他の流派で見られるような、竹刀を持って二人で戦うことはない。修行はすべて木刀を使い、ひとりで行なうものである。ユスという木で作った木刀を用いて、六尺ほどの丸太を立て、左右への袈裟懸けでひたすら打ち込むのが基本。この時「猿叫」といわれる独特の気合い(本来は「エイ」だが、気合いがこもって「キエーイ」「チェストー」のように聞こえる)を発する。達人になると、打ち下ろした丸太に煙がくすぶるという。

この他にも、丸太を数本立てて、その間を駆け巡りながら打つという修行もある。一人対多数を想定した野戦剣法といえるだろう。

骨太で実戦的な示現流は、薩摩武士の性によくあった。江戸時代、薩摩藩の御流儀となり、門外不出の剣として守られたのだった。

長い歴史の中では、重位の示現流から独立した小太刀流や古示現流、薬丸示現流などの流派もある。

では、示現流にはどのような剣豪がいたのだろうか。まず名前が挙がるのが、中村半次郎であろう。詳しいことはのちのページに譲るが、薬丸示現流の使い手で、西郷隆盛腹心の武士だった。西郷と薩摩藩に敵対する政敵や過激な攘夷志士を斬りに斬りまくった、かの「人斬り半次郎」である。

もうひとりの人斬り、田中新兵衛も示現流の使い手だった。関白の側近・島田左近の暗殺、本間精一郎暗殺などで腕を振るった。つねに実戦を想定して修行し、なおかつ一撃必殺の技を誇る示現流は暗殺に適していたのだろう。

ただし、西郷隆盛、大久保利通、島津斉彬など上層部は、示現流の稽古をしたことがないそうだ。

鹿児島では現代でも東郷家の手で示現流が受け継がれている。




西南戦争の錦絵。西郷率いる薩摩軍は「新政厚徳」の旗を掲げ、新政府軍を迎え撃った。桐野利秋(中村半次郎)ら、将校の名前も(鹿児嶋征討紀聞 日向路にて官軍を迎え戦う賊徒／国立国会図書館蔵)



# 人斬り以蔵 邪剣のなれの果て

類い希なる剣の腕を持ちながら暗殺という裏仕事に暗躍した剣豪たち。支えたのは信念か、恩人への思いか。




岡田以蔵の墓は、高知市に現存している。同じ墓には父や弟、弟の妻が埋葬されている

## 岡田以蔵

おかだ いぞう

生没年◉1838～1865年

土佐藩の郷士身分に生まれる。武市瑞山の道場に通い、剣の腕を磨く。瑞山が結成した土佐勤王党では剣の腕を活かして、天誅と称して敵対勢力を暗殺した。その後、脱藩するも酒で身を持ち崩す。捕縛後は拷問に負けて仲間や罪状を自白してしまう。のちに打ち首

### 師にすらも見放された末路

幕末をテーマにしたドラマや小説、映画で、龍馬や新撰組と同様に、よく聞く名前がある。岡田以蔵――通称「人斬り以蔵」。幕末最凶の暗殺剣の使い手である。

さて、岡田以蔵は土佐藩郷士の家系の生まれであった。のちに父が足軽に採用されたため、以蔵も足軽身分ということになる。

幼少時、土佐で名を馳せていた武市瑞山の道場に通い始める。勉学はからきしだった以蔵だが、運動神経は抜群だった。剣の覚えもよく、ぐんぐん上達していく。出来のよい弟子はやはりかわいいのだろう、瑞山もどこに行くにも以蔵を連れ歩くようになった。

安政3(1856)年、藩命で瑞山は江戸に留学する。名目は「剣の修行」である。高弟の以蔵も瑞山と一緒に江戸へ出向いた。江戸では三大道場のひとつ、桃井春蔵の士学館に通うことになった。武市は桃井に実力と人格を認められ、塾頭まで務め上げた。以蔵は内弟子にはならなかったが、土佐藩邸から熱心に通ったようだ。ただし、目録を受け取ったという話はないので、やはり「位の桃井」からすると、以蔵に何か欠けているものがあったのかもしれない。

翌年、瑞山とともに土佐に帰国。その後、瑞山は以蔵を含めた幾人かの門弟とともに、中国・四国地方に武者修行の旅に出る。剣術修行といってはいるが、ペリー来航以来ざわついている各国の動静を探りたいという考えもあった。

この途中、以蔵のみは豊後岡藩の道場に長期滞在している。あまり裕福でない以蔵の懐具合を瑞山が心配したためといわれる。以蔵はこの道場でさらに腕を磨いた。

文久元(1861)年、瑞山がついに土佐勤王党を結成。当然、以蔵も師に従って入党した。そして以蔵が「人斬り以蔵」になるのも、これ以降のことである。

土佐勤王党は、言葉通り土佐藩の尊皇攘夷主義の志士たちが集まって作った結社である。土佐藩では藩主・山内容堂の意を受けた公武合体派(開国主義でもあった)の吉田東洋が藩政改革を進めていた。藩の持論を尊皇攘夷に持っていきたい瑞山には目の上のたんこぶ的存在である。ボスの容堂が将軍の跡目問題に首を突っ込んだ上に、井伊直弼に負けて謹慎状態になった時を逃さなかった瑞山は、ついに東洋の暗殺に至るのである。ただしこの東洋の暗殺





事件には、以蔵は関わっていないようだ。

以蔵が初めて関わった暗殺は、文久2(1862)年の井上佐市郎といわれる。井上は前年に起きた東洋の暗殺事件を捜査していた下級警官だったが、それが以蔵たちに危険視された。料亭に呼び出し泥酔させたところを、以蔵含む四人で襲ったという。

その後も、本間精一郎や猿の文吉、多田帯刀など、安政の大獄に関わった者やそれに乗じて攘夷志士を弾圧した人々を中心に、土佐勤王党の天誅は続いた。短い期間で立て続けに起こった天誅事件で、以蔵の名は一躍知れ渡り、人々はその獰猛な剣を恐れた。

しかし、以蔵の人斬り生活は長くは続かなかった。文久3(1863)年、以蔵は突然土佐藩から脱藩。伝手をたどって長州藩などに世話になっていたようだが、脱藩の理由は今もわかっていない。

脱藩中、坂本龍馬の紹介で勝海舟の護衛をしていた時のこと。突然、三人の浪士が勝に襲いかかってきた。驚いて跳びのく勝の前で、浪士のひとりが血飛沫をあげて倒れた。目にも留まらぬ早さで剣を抜いた以蔵が、すでに仕留めていたのだ。以蔵が一喝すると、残りの二人は逃げて行ったという。

勝は以蔵の早業に感心したが「君は人を殺すことを好んではいけない」とたしなめた。以蔵は「それでもあの時私がいなかったら、先生の首は既に飛んでしまっていたでしょう」と答えた。

そんな風に脱藩後も剣の腕は衰えなかった以蔵だが、やがて酒に溺れていく。勝にも見放され、無宿者にまで落ちぶれるハメに。元治元(1864)年、京都の無宿人狩りで顔に入墨(＝犯罪者扱い)され、京から追放される。しかも、洛外で待ち構えていた土佐藩の役人に捕縛されてしまった。

土佐藩では山内容堂が藩政に復帰し、攘夷志士たちの弾圧に血道を上げていた。すでに師・武市瑞山や同志はみんな捕まっている。以蔵もそのひとりに加わった。

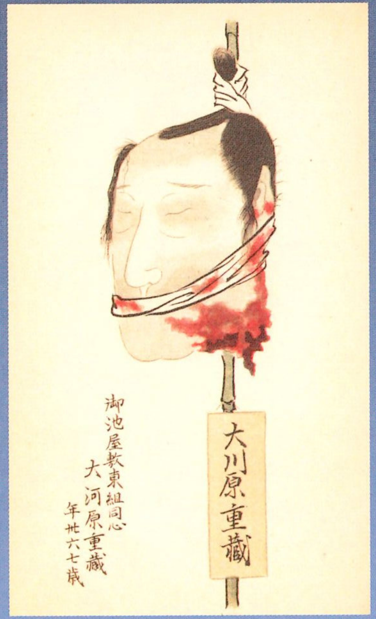
自分から仕掛けるには強い以蔵だが、滅法打たれ弱かった。他の同志が耐えている中、拷問に泣きわめき、罪状や仲間を白状してしまう。瑞山はそんな以蔵を予測していて「早く死んでくれれば……」と家族への手紙に書いている。慶応元(1865)年、打ち首獄門。

かように、潔い剣士とは言えない生き様だった「人斬り以蔵」だが、後世の人気は高いようで、ドラマなどでは「拷問に耐えて死んでいった」とされることもある。




**森孫六**

京都東町奉行所与力だった森孫六のさらし首。暗殺グループには岡田以蔵も名を連ねていたという(『武市瑞山関係文書 第一』／国立国会図書館蔵)




**大川原重蔵**

大川原重蔵のさらし首。安政の大獄で志士を摘発した京都町奉行所与力が狙われ、四人同時に殺害された(『武市瑞山関係文書 第一』／国立国会図書館蔵)

**天誅の名の下に
邪魔な政敵たちを斬り殺す
しかし、以蔵の剣には
信念も忠義もなかった**

## 薩摩藩

# 田中新兵衛

たなか しんべえ

**最初の「天誅」を引き起こした張本人 裁きの場で白刃閃かせて自決**

生没年 1832〜1863年

薩摩の商家の出身で、示現流の使い手。幕末の商家の出身で、小さい頃から剣を得意にしていた。西郷隆盛や大久保利通らのパトロンだった豪商森山新蔵に目をかけられ、志士たちと知遇を得る。

文久2（1862）年、関白九条尚忠の側近・島田左近が暗殺される。島田はかねてから幕府寄りの発言が多く、攘夷志士からマークされていた人物である。

彼を襲ったのは田中新兵衛、岡田以蔵、河上彦斎。すべて幕末の人斬りとして恐れられた使い手である。この左近暗殺以降、新兵衛や以蔵らは「天誅」と称して、反対勢力を次々と粛正していく。

翌年、今度は公卿・姉小路公知が襲われた。公知は斬られながらも相手の刀を奪い取っていた。それが新兵衛の物だったということで、新兵衛は捕縛されてしまう。

当初は否認していた新兵衛は、裁きの場で刀を見せられた瞬間、脇差を抜いて自決。これで真相は闇の中に葬られることとなった。下手人は他にいるという説も根強かったが、近年の研究では、生き残った者の証言などから新兵衛の実行犯説が有力となっている。



新兵衛らが暗殺した本間精一郎のさらし首。本間は尊攘志士だったが、スパイの疑いが持たれ殺された。首は四条河原に晒されたという（『武市瑞山関係文書第一』／国立国会図書館蔵）

## 薩摩藩

# 桐野利秋

きりの としあき

**ほぼ独学で身につけた神速の居合術 西郷隆盛の腹心といわれた「人斬り」**

生没年 1838〜1877年

薩摩藩下士の三男に生まれる。元の名は中村半次郎。家は貧しかったが、15歳で道場に通わせてもらった。しかし父が流刑になり兄が病没したため、半次郎が家族の面倒を見ることに。貧しく忙しい日々の中、半次郎は鍛錬を欠かさなかった。半次郎の剣は一応示現流の体だが、目録や皆伝は得ていない。そんな金はなかったからだ。野山に生えている木に向かってひたすら斬りつける日々。そうやって神速の剣を身につけた。

西郷になんとか面会を果たし、藩主・島津久光の京都行きに加えてもらった。久光帰国後も京に残り青蓮院宮の警護にあたる。公武合体派の青蓮院宮は攘夷志士によく狙われたが、すべて半次郎が返り討ちにしていたという。この頃から「人斬り」と呼ばれた。

やがて西郷は半次郎を浪人として長州藩に送り込み、情勢を探らせた。これが薩長同盟に大いに役に立ったという。西郷は半次郎の恩人だ。嬉々として働いただろう。

新政府樹立後は陸軍に配属。この頃、桐野利秋と改名する。桐野の「絶対」だった西郷と西南戦争の最前線で戦い、戦死を遂げる。



体も大きく容貌も立派で優れていたという桐野



## 幕臣

# 佐々木只三郎

ささき たださぶろう

**龍馬を斬った男として歴史に名を残す 小太刀を使わせたら右に出る者なし**

生没年 1833〜1865年

佐々木只三郎を「暗殺者」と呼ぶのは語弊があるかもしれない。確かに彼は清河八郎や坂本龍馬を暗殺したとされている。しかし、それは只三郎の職務の一環であった。

会津藩士の三男として生まれた只三郎は、幕臣の養子になった。会津藩で盛んだった神道精武流を学び、小太刀を持ったら日本一とまで言われた男だ。もともと神道精武流は、小笠原長政が剣術と柔術を組み合わせて創設した流派。甲冑を着た相手を組み伏せ、鎧の間を小太刀で突く。そういう戦法に作られている。只三郎が小太刀の達人だったのも道理である。

文久2（1862）年、清河八郎の建白で浪士組結成。しかし、清河を危ぶんだ幕府は、幕臣随一の実力を持つ只三郎に暗殺を命じる。只三郎は見事、清河を討ち果たす。なお、京都残留の浪士組を京都守護職の会津藩主預かりにしたのは、只三郎だったという。新撰組の生みの親でもあるわけだ。

元治元（1864）年、京都見廻組発足。只三郎もそこに加わった。只三郎率いる見廻組と新撰組のタッグは、攘夷志士にとって恐ろしい脅威だったに違いない。

慶応3（1865）年11月、近江屋にて坂本龍馬、中岡慎太郎を急襲し、激しい戦闘の末に暗殺。しかし、この暗殺を誰が命じたのか、いまだに不明な点も多い。

只三郎は鳥羽伏見の戦いで見廻組とともに戦うが敗戦。途中、腰に受けた銃弾が元で戦死する。

## 肥後藩

# 河上彦斎

かわかみ げんさい

**何人斬っても何も思わぬ「人斬り」に人の心を蘇らせた、ただひとりの人物**

生没年 1830〜1863年

肥後藩士の元に生まれ、兵学を宮部鼎蔵に学んだ。林桜園に皇学も学んだ。両者とも幕末の尊皇攘夷論者である。ところが剣術はどこの道場に通ったという記録はない。彦斎は居合の練習を独自で行なっていたらしい。彼の居合は、右足を前に左足を後ろに伸ばし、膝がほとんど地に接するほどの低い姿勢から、するりと逆袈裟切りで剣先を一閃させる。この居合で何人の政敵を屠ったのか、彦斎本人ですらも判然としないらしい。

彦斎は攘夷一筋の志士だった。だから、開国論者や公武合体派は許せない。例えば、攘夷仲間で「誰それが悪い」と名前が挙がると、その日のうちに斬りに行ってしまったという。ただし、実際に彦斎が手にかけたと実証されているのは、佐久間象山暗殺のみである。のちに彦斎はこう述懐する。

「誰を何人斬っても何も思わなかったが、佐久間象山を斬った時だけは人を斬った気がした。髪の毛が逆立つような恐怖を感じた」

以来、人を斬ることをやめたという。しかし、攘夷論者の彦斎は新政府に疎まれ、参議暗殺事件の嫌疑で投獄。のちに斬首された。



小柄で色白だった彦斎は、一見女性のようだったという。平素は穏和で礼儀正しい人物だった

# 坂本龍馬と剣術の終焉

刀を捨てて銃を取った
龍馬の脳裏に浮かんでいたものは?
そして刀を捨てきれなかった
新撰組が直面した現実とは。
剣術の終焉を見届けた男たちの物語。

## 剣術から近代武器への転換

**剣術の実力者でありながら、剣の力に頼らなかった龍馬。彼の目に映っていたのは、西洋列強に対抗する手段だった。**

坂本龍馬が北辰一刀流を習得していたことはよく知られている。ただ、免許皆伝にまで至っていたのかは不明だ。龍馬が得た目録として記録に残っているのは、薙刀の目録(しかも、初級のもの)しかないからだ。とはいえ、塾頭まで務めたので一定の腕前であったのは確かだろう。しかし、これもまた有名な話だが、龍馬はその人生において人間を相手に剣を振るったことは一度もない。

では龍馬はいつ頃、剣の道に見切りをつけたのだろう?

江戸留学を終えて土佐に帰国する頃には、すでに剣術に一定の距離を置いていたように思える。土佐に帰国した時、文字をあまり知らないにも関わらず「学問をする、洋学も学ばなければ」と告げて兄弟に驚かれたという逸話がある。この時点で、龍馬にとって剣術よりも大切なものができていた証だろう。

対して龍馬の友人・武市瑞山は剣の力で革命を成し遂げようと思った人物である。武市が創り上げた尊皇攘夷集団・土佐勤王党には龍馬も名を連ねているが、目的のためなら暗殺すらも厭わない武市の方針には共鳴していない。

武市が想定していたのは、あくまでも「自分」対「藩」であり「藩」対「幕府」であった。龍馬が見据えたのは、藩を超えた対幕府であり、ひいては対諸外国であった。対象の差が藩の要人暗殺に対する二人の温度差を生んだのかもしれない。

といっても、龍馬は武力すべてを否定していない。暗殺などは嫌った龍馬だが、強大な相手と渡り合うためには自分も相応の力を持たなければいけないと考えていた節がある。龍馬の考える「力」とは、西洋式の武器であり軍隊だった。そうでなければ、打倒幕府もさることながら、西洋列強へ対抗できないという確信があったのだろう。幕末の志士の中でもっとも早く「剣の時代の終わり」を痛感した人物が、龍馬だった。



一方、剣の道にあくまでもこだわったのが新撰組である。中でも副長土方は、新政府軍の鉄砲射撃を前にして「我らには剣がある」と吼えた人物。その土方ですら、鳥羽伏見の戦い後にこう呟いた。

「これからの戦いは、刀槍ではらちがあきません。鉄砲には、かないませんよ」

新撰組すら剣を信じられなくなった時、本当に「剣術の時代」は終焉を迎えたのである。



KENGO
A faction and a Japanese sword

# 第二章

# 日本刀 〜名物・業物・国宝〜

人を斬る。
それを至上の目的とする道具として
技術の粋を極め
独自の発展を遂げた日本刀文化。
「殺し」と「美学」がアンビバレントに同居し
使い手たちの逸話が彩りを添える。
刀の魅力は今もって衰えることはない。

# 武士の魂が宿る日本刀

## 奥深き日本刀の世界に触れる

戦の道具でありながら人々を魅了し続ける美しさを持つ日本刀。刀をよく知ることで剣豪や名将がより一層身近になるはずだ。

平安時代、源頼光は大江山に住む鬼・酒呑童子を童子切で斬り伏せ、江戸時代初期に天下無双と言われた二刀流の使い手・宮本武蔵は、和泉守兼重で数々の試合を勝ち抜き、幕末最後の武士と言われた新撰組局長・近藤勇は愛刀虎徹で池田屋事件に臨んだ。特に虎徹は激しい斬り合いを経ても、切味は一向に落ちなかったという。

歴史上に名を残す剣豪は多くいるが、彼ら剣豪が剣豪たり得たのは、その腕だけでなく、持てる術を体現してくれる名刀があったればこそ。剣豪と名刀とは、切っても切れないものなのである。ではどういった刀が名刀と呼ばれているのだろうか。

### 時代や価値観で変わる名刀の条件

名刀の条件は、実は時代によってさまざまである。現代では、刀は美術品としての側面が強いため、形や刃文の美しさが重視される傾向にある。戦がまだ身近であった江戸時代初期では、切味はもとより、強靱さも名刀の条件に加えられているなど、明確に定まっていたわけではない。

このように時代や鑑定する人間の価値観によって名刀の条件は変わっていくのだが、概ね「切味」「外観の美しさ」「いわく」の三つが秀でているものを「名刀」、もしくは「名物」としている場合が多い。

さて、本章ではこれから刀剣史上有名な名刀・名物を紹介していくわけだが、先ほど挙げた名刀・名物の要件のうち「切味」は、昔なら死体の胴を、現在では巻藁や畳表などを実際に斬る「試し斬り」で判断する。「いわく」はその名のとおり、その刀にまつわる伝説やいわれである。「外観の美しさ」は刀の各部の名称や、それぞれの造込みの違いをある程度知っていないと、十分に刀を堪能することができない。そこでまずは、本書で初めて刀剣の世界に触れる人向けに、簡単にではあるが、刀の基本的な事項について解説しておこう。

### 覚えておきたい刀剣の基礎知識

刀の各部の名称は、図のようになっている。図の刀は一般的な「鎬造」の刀だが、刀の造込みとしてはほかに、横手や鎬がなく平面になっている「平造」、鎬筋と棟との間が広い「切刃造」、切先のみが両刃となっている「切先両刃造」などがある。

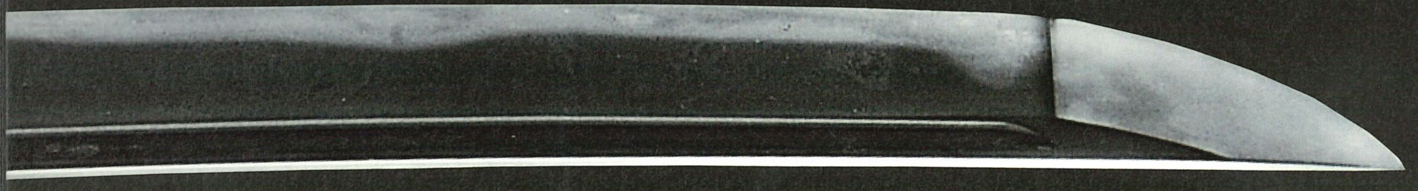
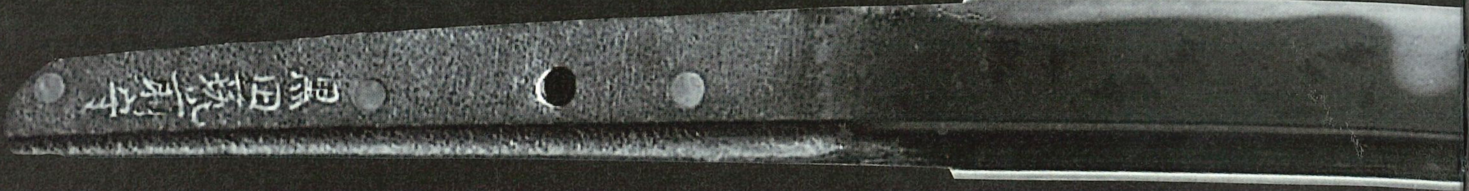
反りの付いた「湾刀」は、平安時代中期頃から見られるようになり、それ以前は、真っ直ぐな直刀が主流だった。反りには、はばき元でいきなり反る「腰反り」、反りの中心が刀身の中央付近にある「鳥居反り」、反りの中心が中央より先にある「先反り」、後ろにある「内反り」がある。

続いて刃文だが、刃文は最も目に付くところであり、刀の美しさを計る上で、大きなウエイトを占めている部分だ。その刃文は、真っ直ぐな「直刃」と、波立っている「乱刃」とに大別される。乱刃の中にも、波上の文様が規則正しく繰り返す「互の目」、数珠玉をそろえたような頭の丸い刃文の「数珠刃」、丁子の実を並べたような文様の「丁子刃」などがある。

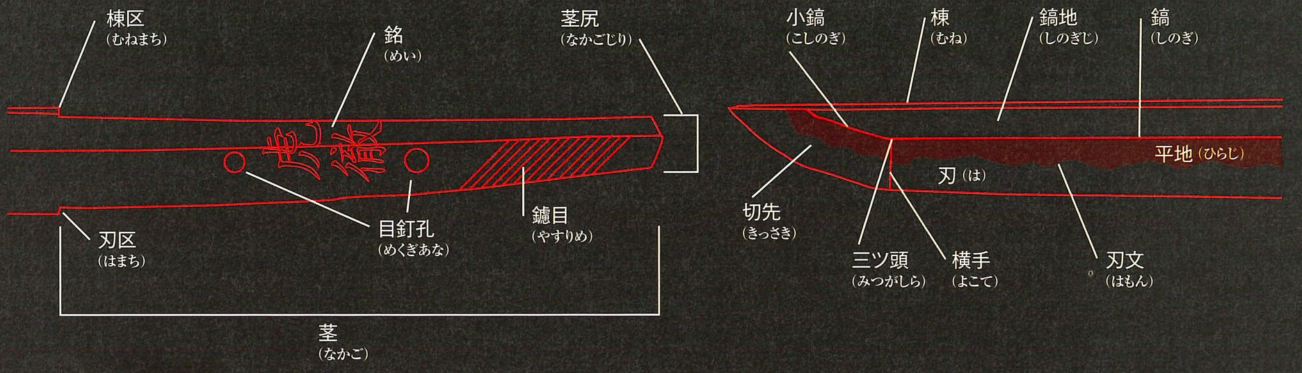
また刃文には、焼入れの際の温度等で変化する粒々が現れるもので、この粒子が大きいものを「沸」、小さいものを「匂」と呼んでいる。ほとんどの刀には、沸と匂が混在していて、それぞれ沸が多いものを「沸出来」、匂が多いものを「匂出来」という。沸や匂の粒がクッキリとしていることを「沸が深い」「匂が深い」、刃文と地との境界を「匂口」と呼び、この境界がくっきりとしていることを「匂口締まる」と表現して、美しさの基準となっている。

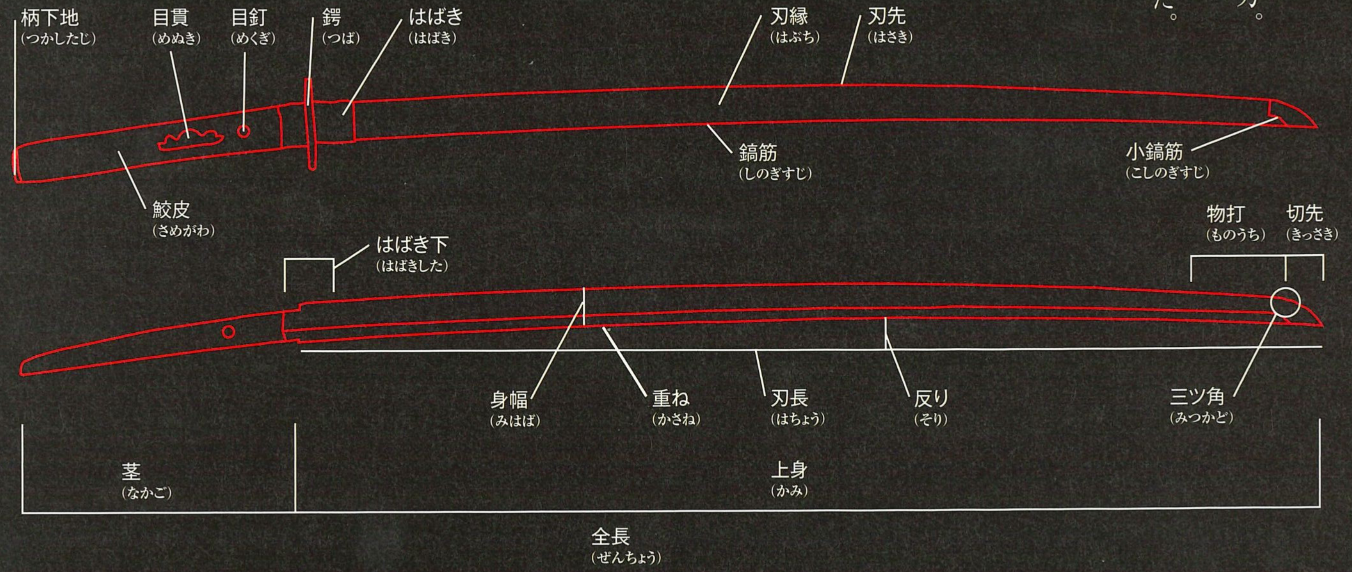
地肌もまた、刀の美しさを構成するひとつである。刀は、炭素量が異なる鉄を組み合わせ、折り返し鍛錬を行なうため、地肌には炭素量の多寡によって、縞模様ができる。この模様には、木の板に似た「板目肌」、年輪のような模様の「杢目肌」、木を縦に切ったような「柾目肌」などがあり、地肌の文様の美しさが、刃文、ひいては刀全体を美しく見せる。

駆け足となってしまったが、刀を鑑賞する上で、以上のような用語や見所を押さえておけば、刀の持つ美しさを感じることができるはずだ。

国宝 へし切長谷部（福岡市博物館蔵／撮影：要史康）



天下の名刀

# 大包平
おおかねひら

## 国宝にも指定された最強の日本刀

現存する日本刀の中でも最高傑作として知られているのが国宝に指定されている大包平だ。形から刃文に至るまで全てが美しい。



大包平・表

反りの高い大太刀にも関わらず刀身は薄く、軽い（東京国立博物館蔵）

### 現代に伝わる名刀中の名刀

大包平は、平安時代末期から鎌倉時代の備前国古備前派の刀工・包平作の日本刀だ。現存する日本刀の中でも最高傑作とされており「太刀銘備前国包平作（名物大包平）」として国宝にも指定されている。

日本刀の基本的な形である鎬造、庵棟（いおりむね）だが、身幅が広く三尺近い長寸であることに加え腰反りが高く、切先も短い「猪首切先」となっている。形だけ見ると戦闘的な印象を受けるが、その反面、地鉄がよく詰んだ小板目肌、小沸がついた深い匂と金筋が入った刃文は、華やかさを醸し出している。実用性と美しさを両立させた名刀中の名刀である。

またこの大包平の特徴のひとつとして、同じような他の長寸の太刀よりも格段に軽くなっている。長寸の太刀は、通常、強度を増すために重ねが厚くなってしまい、2kg以上の重量があるのだが、この大包平は、重ねを薄くして軽量化し、その重さをわずか1・35kgに抑えている。これだけ長寸ながら重ねが薄いということは、それだけ刀工の腕が秀でていたということの表れでもある。

### 所有していたのは姫路城を造った池田輝政

この天下の名刀・大包平を所有していたのは、安土桃山時代の武将・池田輝政だった。

輝政は、織田信長の乳兄弟であり重臣でもあった池田恒興の次男として生まれ、父や兄の元助と同様に信長に仕えた。信長の死後は、美濃国大垣城主となった父と兄と共に豊臣秀吉に仕えたが、小牧・長久手の戦いで父と兄が戦死したため、若くして家督を継いでいる。その後、関ヶ原の戦いでは徳川方につき、戦後、播磨姫路52万石に加増されて「姫路宰相」「播磨宰相」などと称された人物だった。

大包平は、池田来国光や池田正宗と共に代々池田家に伝わり、家中の年中行事に使われていたとされるが、１９６７年に文部省（当時）が６５００万円で池田家から買い上げ、それ以降現在まで、東京国立博物館に保管されている。

最強×国宝

DATA〉〉〉

池田輝政 所用
備前国大包平
びぜんのくにおおかねひら

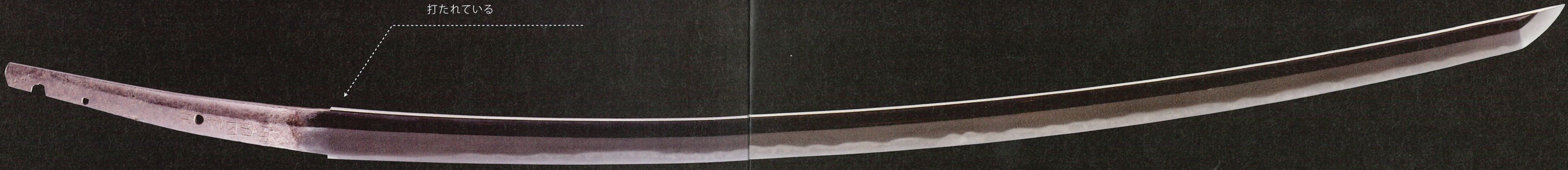
年代：平安時代末期
刃長：89.2cm
反り：3.5cm
元幅：3.7cm
先幅：2.5cm



池田輝政

（1565〜1613）

池田恒興の次男で、播磨国姫路藩主。城の普請にも秀でており、天下普請では総普請奉行を務めたほか、姫路城の現存する城郭は、彼が大規模改修したもの



大包平・裏

茎には「備前国包平作」と銘が打たれている

# 幕末志士の愛刀

## 近代日本への転機となった幕末の力

この激動の時代を生き延び制するためには理論に加え武士の魂である「刀」が必要だった。



鬼×愛刀

### 鬼の副長が愛した斬れ味鋭い和泉守兼定

幕末「鬼の副長」として攘夷派の志士たちのみならず隊士たちにも恐れられていた新撰組副長・土方歳三が愛用していた刀が、この和泉守兼定である。

刀工・兼定の歴史は室町時代末期にまで遡るが、なかでも通称「之定」と呼ばれる二代目兼定の刀は地肌の紋様が美しく、斬れ味鋭い名刀と言われた。江戸時代の文政年間に書かれた『古今鍛冶備考』(山田浅右衛門著)中の「業物位列」(斬れ味のランク)によれば、長船秀光、孫六と並んで二代目和泉守兼定は「最上大業物」のひとつとされている。二代目兼定の業物は安土桃山時代の武将たちにも人気があり、武田信虎、柴田勝家、明智光秀、森長可など、錚々たる人物に愛用されていた。

歳三が使用していた和泉守兼定は、これら「最上大業物」に認定された二代目兼定の作ではなく、会津藩お抱えとなっていた十一代藤原兼定の作(十二代の作とする説もあり)とされているが、刀の斬れ味は良好であったようで、鬼の副長の愛刀にふさわしいものだったと言えるだろう。

土方歳三資料館に現存している和泉守兼定は、刃渡り二尺三寸五部(約71センチ)、慶応3(1867)年の裏銘があるものだが、文久3(1863)年に、近藤勇が日野の佐藤彦五郎宛に送った手紙には、歳三の刀について「和泉守兼定二尺八寸(約85センチ)」とあるため、歳三は和泉守兼定をふた振り所持していたのではないかとする説もある。

**和泉守兼定**

現存する和泉守兼定は、歳三の死後、函館より遺品とともに日野の家族のもとに届けられたとされている(土方歳三資料館蔵)



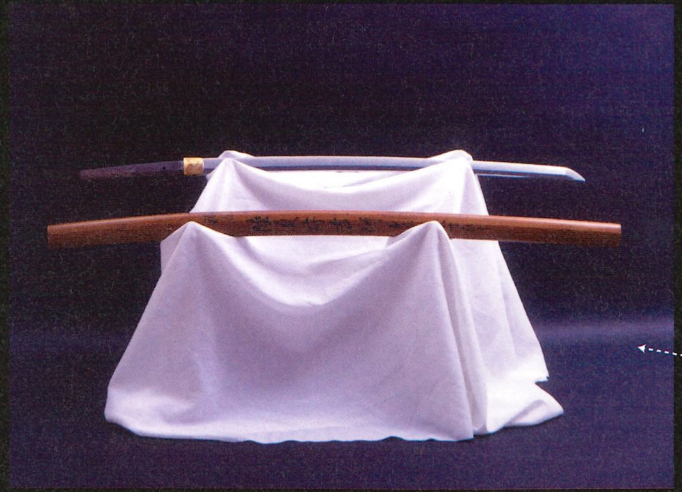
DATA〉〉〉

土方歳三所用
和泉守兼定
いずみのかみかねさだ

年代:江戸時代末期
刃長:70.3cm







DATA〉〉〉

坂本龍馬 所用
陸奥守吉行
むつのかみよしゆき

年代:江戸時代初期
刃長:74cm

**陸奥守吉行**

龍馬が実際に帯刀していた陸奥守吉行は残念ながら現存していない。写真は同時代の吉行銘の刀(高知県立坂本龍馬記念館蔵)

龍馬×最期

### 幕末の風雲児 坂本龍馬の愛刀

土佐藩の郷士(下級武士)の家に生まれ、のちに脱藩して浪人となったにもかかわらず、薩長同盟を結ばせて近代日本の立役者にまで上り詰めた坂本龍馬。彼の眼は遥か先を見据えていたが、志半ばで京都近江屋にて暗殺されてしまう。その彼の最期の瞬間に立ち会った刀が、陸奥守吉行だ。

この刀を打った刀工の陸奥守吉行は、江戸時代初期に活躍した陸奥国中村出身の人物で、本名を森下平助という。吉行は、のちに土佐藩に招かれ、鍛冶奉行を務めたことから「土佐吉行」とも呼ばれ、土佐藩内の他の刀工の刀よりも、ひときわ優れた刀を打っていたという。

龍馬が最期に持っていた陸奥守吉行は、坂本家先祖伝来の刀で、家督を継いだ兄・権平から贈られたもの。龍馬はこの刀を特に気に入り、京都へ行く時には必ず帯刀し、いつも自慢していたという。

だがこの名刀も、龍馬を最期まで護ってはくれなかった。

### 龍馬の最期を見届けた陸奥守吉行

慶応3(1867)年11月5日、越前で福井藩主の松平春嶽と会談した龍馬は、京都に戻ると醤油屋である近江屋に身を隠した。龍馬の京都での定宿は寺田屋であったが、前年の1月に寺田屋で襲撃されたことから、近江屋に留まることにしたのだった。

同年11月15日、それまで龍馬は近江屋の土蔵に隠れていたが、数日前から風邪をこじらせ、母屋の二階に移っていた。当日は、陸援隊の中岡慎太郎、土佐藩士の岡本健三郎、画家の淡海槐堂らの訪問を受けたが、夜まで残っていたのは中岡慎太郎だけだった。

夜8時ごろ、十津川藩の郷士を名乗る数人の男たちが龍馬に面会を求めてきた。龍馬の用心棒兼世話役だった元力士の山田藤吉が、男たちを二階に案内しようとしたところ、男たちは背後から藤吉を斬り捨てて二階へと上がっていき、龍馬と中岡に斬りかかった。

部屋の中にいたため帯刀していなかった龍馬と中岡は、抵抗らしい抵抗もできないまま数カ所を斬られ、道半ばにしてこの世を去ってしまったのだった。

# 龍馬を斬った刀

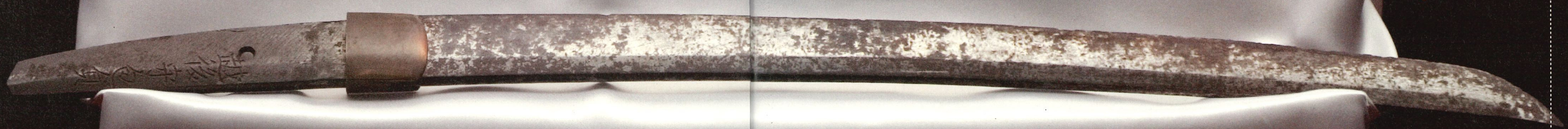
DATA〉〉〉
桂早之助 所用
越後守包貞
えちごのかみかねさだ

刃長：42.1cm
反り：0.8cm

## 暗殺に使われた刀に残る刃こぼれ

**坂本龍馬を斬った刀は現存している！**

坂本龍馬を暗殺したのは誰か？それは今もって謎に包まれたままだ。しかしこの世には「龍馬を斬った刀」がふた振り存在する。それが、京都見廻組隊士・桂早之助が使用した脇差・越後守包貞（偽銘とされる）と、同じく京都見廻組隊士・今井信郎所用の脇差・山城守源一法だ。



ではなぜ、この両刀が龍馬を斬った刀として伝わっているのだろうか。その経緯と、刀の所有者であった桂早之助と今井信郎、そして彼らが属していた京都見廻組について見ていこう。

**龍馬殺害の犯人は京都見廻組だった！**

治安が悪化していた幕末の京都には、治安維持と反幕府勢力を取り締まる組織として、新撰組と京都見廻組の二つがあった。浪士、町人、農民らで構成され「会津藩預かり」という非正規組織だった新撰組に対し、京都見廻組は、旗本や御家人で構成された、正規組織だった。

当時は、京都見廻組よりも新撰組の活躍のほうが華々しく、また大々的に喧伝されており、勤皇の志士たちから恐れられていたのは、もっぱら新撰組のほうだった。そのため、龍馬が暗殺された時も、志士たちのみならず、町民にいたるまで、犯人は新撰組だと目されていた。

しかし戊辰戦争が終結した明治2（1872）年5月、函館で降伏した一人の人物の証言からこの推測が覆ることになる。その人物こそが、京都見廻組隊士・今井信郎だった。

今井は降伏後に兵部省と行部省で行なわれた取り調べの際、自分は佐々木只三郎、桂早之助らと共に近江屋に押し入り、龍馬と中岡慎太郎を殺害したと自白した。今井が名前を挙げた見廻組隊士は、今井本人を除き全員が鳥羽・伏見の戦いで戦死している。裏付けは取れず、また、のちに同隊士だった渡辺篤も自分が龍馬を殺したと名乗り出、今井の証言とは異なる部分があったが、今井の供述が事件の仔細に渡っていたため、真相に近いとされた。

この今井の証言が元となって、近年では、龍馬暗殺を企てたのは、佐々木只三郎率いる京都見廻組であるというのが定説となり、今井家、桂家に伝わっていた刀が「龍馬を斬った刀」として、保存されているのである。

越後守包貞

匂い深く、沸よくつき、地刃ともに明るく冴えた越後守包貞。だがこの桂早之助の脇差は偽銘とされており、作者は不明である。なお、早之助は小太刀の名手だったとされる（霊山歴史館蔵）

龍馬×殺害



DATA〉〉〉
今井信郎 所用
山城守源一法
やましろのかみみなもとのいっぽう（かずのり）



山城守源一法

山城守源一法は、江戸寛永年間に活躍した江戸石堂派の刀工で、はばき元に菊文を切るのが特徴。息子に江戸石堂派の代表工である日置光平（出羽守光平）がいる（霊山歴史館蔵）

# 戦国武将の名刀

武将が持つ刀に
自らの命と野望がかかっていた戦国時代。
下克上の嵐が吹き荒れる中
全国各地で様々な名刀が誕生していった。



## 源頼光

（948～1021）
鎮守府将軍源満仲の嫡男。大江山の酒呑童子退治伝説の主人公として知られる（頼光四天王大江山鬼神退治之図／国立国会図書館蔵）





## 鬼を討ち取った伝説の名刀

56～57ページで紹介した国宝・大包平と並び称される名刀中の名刀が、この国宝・童子切安綱だ。

こちらも大包平同様に鎬造、庵棟であるが、はばき元で強く反る「腰反り」が高く、小切先となっている。また地鉄は板目で、地景や地斑が交じり、刃文は小乱に足が入り、金筋がかかっている。

刀の美しさは、大包平に劣らないが、何と言ってもこの刀の「いわく」、つまり伝説が素晴らしい。『享保名物帳』によれば、この「童子切」の号は、平安時代中期の武将・源頼光がこの刀を使い、丹波国大江山に住み着いた鬼・酒呑童子の首を切り落としたという逸話から付けられたという。また、江戸時代の逸話では、六人の罪人の死体を積み重ねて試し切りを行なったところ、六体すべてをまっぷたつにしただけでなく、土台にまで刃が達したというものも残っている。

刀の所有者も歴史上の名だたる人物が名を連ねており、室町時代には足利将軍家にあったが、十三代将軍義輝の時に織田信長に渡った後、豊臣秀吉、徳川家康、徳川秀忠から福井藩主・松平忠直に渡り、その後、津山松平家に継承された。なお、現存している拵「梨地糸巻太刀」は、江戸時代に製作されたものである。

【国宝】
## 梨地糸巻太刀

金梨地鞘糸巻の拵。江戸時代に作られたもので、それ以前の拵は現存していない（東京国立博物館蔵）

DATA〉〉〉
梨地糸巻太刀
なしじいとまきたち

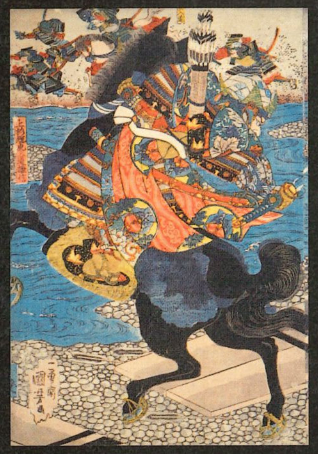
年代：江戸時代
全長：109.1cm
柄長：24.8cm
鞘長：84.6cm





【国宝】
## 太刀 景光 景政

秩父の武士である大河原時基が、新領地である播磨国にて作らせた刀。景光と弟子・景政の合作である（埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵）



## 上杉謙信

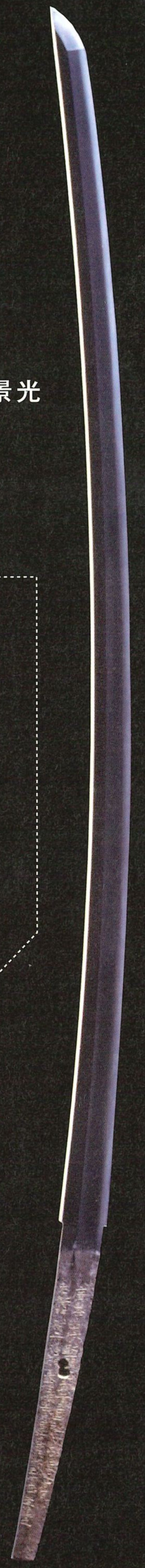
（1530～1578）
越後の戦国大名。甲斐の武田信玄との川中島の戦いは有名。足利将軍家から要請を受けて上洛を試みるが病死（武田上杉川中嶋大合戦の図/国立国会図書館蔵）

【国宝】
## 童子切安綱

江戸時代以降、津山松平家に代々伝えられてきたが、1951年に国宝に指定され、1962年に文化財保護委員会によって買い上げられた（東京国立博物館蔵）

DATA〉〉〉
源頼光 所用
童子切安綱
どうじぎりやすつな

年代：平安時代末期
刃長：80cm
反り：2.7cm
元幅：2.9cm
先幅：1.9cm



DATA〉〉〉
太刀 景光 景政
たちかげみつかげまさ

年代：鎌倉時代
刃長：82.4cm
反り：2.4cm

【国宝】
## 短刀 備州長船住景光

備前国長船派の刀工・景光の作。板目肌がよく詰んでおり、映りが鮮やか。なお、付属の拵は室町時代のもの（埼玉県立歴史と民俗の博物館蔵）

DATA〉〉〉
上杉謙信所用
短刀 備州長船住景光
たんとう びしゅうおさふねじゅうかげみつ

年代：鎌倉時代
刃長：28.3cm
反り：内反り
元幅：2.6cm



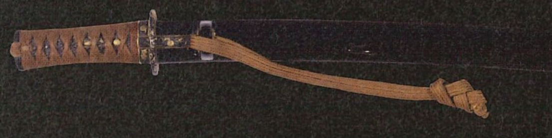
## 戦国時代最強を誇った軍神愛用の短刀

戦国時代、甲斐の虎・武田信玄と川中島で死闘を繰り広げた、越後の龍・上杉謙信。自らを毘沙門天の生まれ変わりであるとし、軍神と称されるほど戦に長けていた。

この短刀・備州長船住景光は、その上杉謙信が愛用していたものであり、刀身の表には「秩父大菩薩」の文字、裏には梵字が彫られている。鎌倉時代の刀らしく平造の内反りで、華やかな片落互の目の刃文を持っている。拵の黒漆小さ刀は、室町時代末期の作だ。

刀工である景光は、鎌倉時代末期に活躍した人物で、同じく国宝に指定されている楠正成所用の太刀・備前国長船住景光も彼の手によるもの。

また景光は、弟子の景政と合作で太刀・景光 景政も製作しており、こちらは、武蔵国秩父の武士である大河原時基の手から広峯神社に奉納され、その後、上杉謙信の所用となって上杉家に伝わった。埼玉県立歴史と民俗の博物館には、短刀の備州長船住景光と共に、太刀の景光 景政も所蔵されている。



DATA〉〉〉
黒漆小さ刀　くろうるしちいさがたな

年代：室町時代　全長：46.2cm　柄長：11.8cm　鞘長：34cm



## 名工と呼ばれた正宗代表作のひとつ

豊臣秀吉の寵愛を受け、後に徳川家康と天下分け目の戦を繰り広げた石田三成所用の刀が、現代に伝わっている。

鎬造で反りが高く、中切先、刃文は湾(のた)れ、互(ぐ)の目乱(めみだれ)が入り、沸がつき、金筋が入ったこの見事な刀は、銘こそ入っていないが、鎌倉時代末期から南北朝時代に活躍した相模国鎌倉の刀工、五郎入道正宗の作と伝えられている。この石田三成所用の正宗は、所有者の名をとって「石田正宗」とも呼ばれるが、刀身に多数の切込跡が残っているので「石田切込正宗」とも号されている。

この刀を作った正宗は「日本刀＝正宗」というイメージが定着しているほど、日本刀剣史上最も有名な刀工であり、彼の作風は後世の刀工に多大な影響を与え、逸話や伝説も多く残されている。また、正宗の作に銘が入っているのはまれで、在銘のものは、数本しか現存していない。

石田三成はこの刀を宇喜田秀家から賜り、のちに三成から徳川家康の次男・結城秀康に贈られ、江戸時代に入って津山松平家へと伝わった。



### 石田三成

（1560～1600）

豊臣秀吉に見出され、後に豊臣政権で五奉行を務める。秀吉死後は徳川家康と対立、関ヶ原の戦いで敗れ、京都で斬首された

【重文】

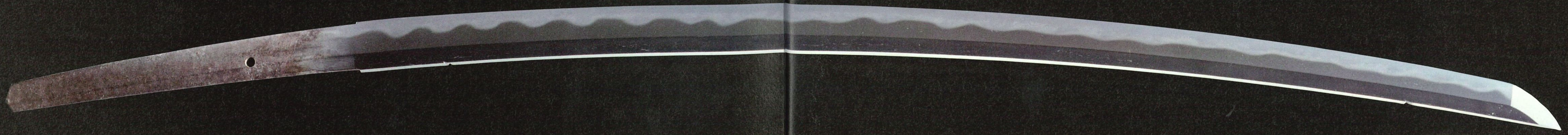
### 石田正宗

正宗代表作のひとつに数えられる。刀身に残る多くの傷が、戦国時代を生き延びた事実を物語る（東京国立博物館蔵）

DATA〉〉〉

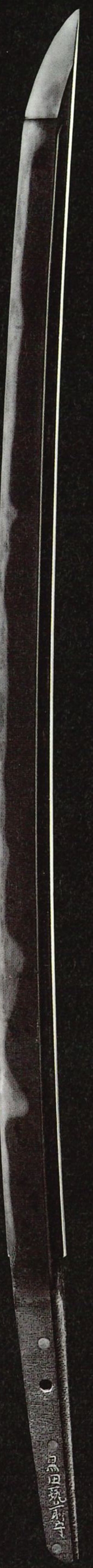
石田正宗
いしだまさむね

年代：鎌倉時代
刃長：68.7cm
反り：2.5cm
元幅：2.8cm
先幅：2.1cm









【国宝】

### 長谷部国重（へし切長谷部）

圧し切りとは、振りかぶらずに押すだけで切ること。切味見事な刀でなければ不可能だ（福岡市博物館蔵／撮影：要史康）

## 茶坊主を膳棚ごと斬った「へし切長谷部」

織田信長、豊臣秀吉の下で名軍師として活躍した黒田孝高（如水）所用の刀。

鎬造、庵棟で切先が大きく、身幅が広めで反りが浅くなっている。勇壮な形をしており、刀工・長谷部国重の特徴である、刃だけでなく棟や鎬地まで焼入れがなされた「皆焼」となっている。

この刀は、別名「へし切長谷部」としても呼ばれている。まだこの刀が織田信長のもとにあった頃、ある茶坊主が信長に無礼を働き、信長の怒りを買った。茶坊主が恐れて膳棚の下に隠れたところ、信長はこの刀をもって、茶棚ごと茶坊主を圧（へ）し切ったため「へし切長谷部」と号されるようになったという。

その後、この刀は勲功を上げた黒田孝高が信長より賜り、以降、黒田家に伝わった。なお、茎の表の「黒田筑前守」、裏の「長谷部国重本阿」の金象嵌は、孝高の子・長政の代に彫られたもので、付属の拵は、孝高所用の安宅切の拵に似せて江戸時代に作られたものであるとされる。

DATA〉〉〉

長谷部国重（へし切長谷部）
はせべくにしげ（へしきりはせべ）

年代：南北朝時代
刃長：64.8cm
反り：0.9cm
元幅：3.0cm
先幅：2.5cm



### 黒田如水

（1546～1604）

戦国時代の武将で、諱(いみな)は孝高、通称は官兵衛。織田信長、豊臣秀吉に仕え、秀吉の天下統一の立役者となった



DATA〉〉〉

金霰鮫青漆打刀拵
きんあらさめせいしつうちがたなこしらえ

年代：江戸時代後期
全長：92.2cm
柄長：21.5cm
鞘長：69.5cm

# 「妖刀」と呼ばれた村正(むらまさ)

## 徳川一族にあだなす呪われし刀

血塗られた伝説を持ち
歴史の表舞台から消された刀、村正。
なぜ村正は「妖刀」と呼ばれることになったのか？
その謎と歴史に迫る！



DATA〉〉〉
勢州桑名住村正
せいしゅうくわなじゅう
むらまさ

年代：室町時代
刃長：66.9cm
反り：2.1cm

### 村正の妖刀伝説はこうして伝わった

刀身に妖しげな気を纏い、その妖気に魅了されて手にしたが最後、人を次々と斬り殺したくなる血に飢えた妖刀……。「村正」に対して、おそらく多くの人がこのようなイメージを抱いていることだろう。

しかし実際はそんなオカルト的な事件があったわけではない。妖刀と呼ばれるようになったのは、徳川家康をはじめとして、代々徳川家に災いをもたらしたという理由からだった。

家康は、三河国岡崎城主であった松平家の出身であり、徳川姓を名乗るようになったのは桶狭間の戦いで今川義元が織田信長に討たれ、今川家から独立した後から。その家康の祖父である松平清康は、尾張の守山城攻略の最中、乱心した家臣の阿部正豊に暗殺されてしまう。俗に言う「森山崩れ」であるが、その際に阿部正豊が使用していた刀が、村正作のものであったという。

この「森山崩れ」によって松平家は力を失い、跡を継いだ松平広忠は、今川家の庇護下に入らなければならなくなった。再び三河を取り戻すのは、孫・家康の時であり、その間30年もの間、松平家は苦難の時を過ごすことになる。その松平家没落のきっかけとなった事件に村正が関わっていたのだ。

そしてこの広忠もまた、村正によって命を奪われる。謀反を起こした家臣(一説には岩松八弥とも)に斬りかかられ、その傷がもとになって、24歳という若さで死亡している。この時使われた刀も村正作のものだったという。









**勢州桑名住村正**
徳川家に祟る妖刀として忌み嫌われた村正だが、幕末には勤皇の志士たちの間で人気となったという(東京国立博物館蔵)

### さらに続いた徳川家の受難

村正による徳川家への障りはこれだけではない。天正7(1579)年頃、清洲同盟の盟友であった信長から、家康の正室・築山殿と嫡男・松平信康に対して、武田氏への内通疑惑がかけられ、さらに信康の切腹が通達された。畿内統一を目前に控えていた信長に対し、この頃の家康はまだ三河と遠江の二国を支配下におさめたばかりで、力の差は歴然だった。家康としてはこの信長の通達に従うしかなく、築山殿を殺害し、信康を切腹させた。この信康切腹の際の介錯として使われた刀が、またしても村正であった。

さらに家康自身も、今川家の人質として暮らしていた幼少時代、村正の短刀で手を切ったことがあり、関ヶ原の戦いの後、やはり村正の槍で指を傷つけている。また、関ヶ原の合戦で、家康の本陣を急襲した真田幸村が家康に投げつけた刀も、村正だったという伝承が残っている。



**徳川家康**
(1543〜1616)
三河国岡崎城主・松平広忠の嫡男として生まれ、幼少期は今川・織田の人質となる。豊臣秀吉の死後、関ヶ原の戦いで石田三成を破り、260年続く江戸幕府の礎を築いた。村正作の刀により、祖父・父・息子の命を奪われている

徳川×呪い

確かにここまでくれば、家康が村正を「妖刀」と恐れてしまっても仕方がないことかもしれない。それ以降、徳川の天下となってからは、皆が家康の怒りに触れることを恐れ、村正を帯刀・所持することはなくなったとされている。それが、妖刀伝説へと時代の流れとともに変化していったと思われる。

はからずも妖刀の代名詞となってしまった村正だが、その刀を作った刀工の村正は、伊勢国桑名の人であり、その刀は「折れず、曲がらず、よく切れる」という名刀ぞろいであったという。戦が続いた戦国時代には、この実戦的な村正は武将たちに好んで使われていた。そのため、徳川家に因む事件において「たまたま」村正が関わっていたとしても、偶然の産物にほかならない。



# 誰もが憧れる「最上大業物（おおわざもの）」の刀 虎徹（こてつ）



## 虎徹と大業物

江戸時代から現在に至るまで抜群の実力・知名度・人気を誇る刀が長曽祢虎徹である。かの近藤勇も愛用したと言われているが……。

DATA〉〉〉
長曽祢虎徹入道興里
ながそねこてつにゅうどうおきさと

年代：江戸時代
刃長：70.9cm

### 晩年作のものほどよく斬れた名刀虎徹

講談での近藤勇の有名な決めゼリフに「今宵の虎徹は血に餓えている」とあるように、虎徹は新撰組局長・近藤勇の愛刀としても知られており、正宗、村正などと並んで、日本刀の代名詞的存在となっている。しかも虎徹は名前ばかりではなく、切味、見栄えとも優れ、江戸時代の業物一覧（ランク）では、一番優れた「最上大業物」のひとつに数えられている。

そんな切味鋭い名刀を生み出した刀工・虎徹は、江戸時代初期の刀工であるが、50歳を過ぎてから刀の道へと入ったと伝えられている。

名工×名刀



茎裏
茎裏には、試し斬りで四つ胴を斬ったとの金象嵌が入っている（東京国立博物館蔵）

茎表
長曽祢虎徹入道興里と銘が入った茎表。虎徹は武士が憧れる刀であった

虎徹は近江国佐和山に生まれたが、関ヶ原の戦いで佐和山城が落城したため、4歳の時に金沢へと移った。金沢では甲冑を作っていたが、50歳を越えた頃、江戸に移り刀を作り始めたとされる。甲冑から刀工に鞍替えしたのは、江戸時代に入って戦がなくなったため、甲冑よりも需要のあった刀を作るようになったからだろう。

ほかの刀工と違い、虎徹は晩年になるほど名刀を作っており、その作風は、地鉄が強く、地刃の匂口が明るく冴えるのが特徴で、よく斬れる刀だったという。写真の長曽祢虎徹入道興里（虎徹は入道名であり、名を興里といった）は、金象嵌で「四胴山野加右衛門六十八歳ニテ截断～」と入っているが、これは試し斬りを表しているもので、68歳の山野加右衛門が四つ胴、つまり罪人の死体を四つ重ね、その胴を斬ったことを示している。四つ胴ともなると、なかなか斬れないため、虎徹の切味がどれほどのものか、よくわかろうというものだ。

### 江戸時代には人体を用いて刀の切れ味を試していた

この「試し斬り」であるが、ヨーロッパなどでは動物などを用いていたが、江戸時代の日本では、人体（罪人の死体）を使って刀の切味を計っていた。試し斬りを行なうのもれっきとした役職のひとつであり、幕府の命で試し斬り役を務めていた「人斬り浅右衛門」「首切り浅右衛門」と呼ばれた山田浅右衛門などが有名だ。

山田浅右衛門とは特定の人物ではなく、代々試し斬り役を務めていた山田家の当主が名乗った名称（中には朝右衛門を名乗った当主もいる）。死刑執行人（当時の死刑は斬首）も兼ねており、試し斬りの依頼があれば、斬首時や斬首後の死体で、刀の切れ味を試していた。そのため、あらゆる刀に精通しており『懐宝剣尺』『古今鍛冶備考』を記して、刀の切れ味によって刀工を「最上大業物」「大業物」「良業物」「業物」「大業物・良業物・業物混合」に分類してランク付けしている。

### 近藤勇の虎徹はニセモノだった？

さて、切味の良い「最上大業物」であり、知名度も高かった虎徹は、刀にこだわりを持っていた新撰組局長・近藤勇が好んで使用していたとされているのだが、実は近藤が虎徹を所持していたかどうか、定かではない。

近藤は新撰組が名を上げた池田屋事件の後、養父に宛てた手紙の中で、永倉新八や沖田総司の刀は折れてしまったが、自分の刀は虎徹だったので無事だったと記している。この手紙からもわかるように、近藤は自分の刀を虎徹であると信じていたようだが、近藤が虎徹を入手した経緯が諸説あって不明なのだ。

また、人気のあった虎徹は、江戸時代に限らず、現在に至るまで贋作が非常に多いため、近藤の刀もニセモノではなかったかとする説もあるのだ。

だが、たとえ近藤の刀がニセモノだったとしても、激しい戦いを無傷で切り抜けたのであるから、その刀を選んだ近藤の眼は、非常に確かなものだったといえるのではないだろうか。

# 日本刀 その進化の歴史

古来より戦に用いられてきた刀は
動乱の時代を迎えるたび
実戦の中で鍛えられながら進化し
機能と美しさを磨き上げていった。

現在誰しもがイメージする、片刃で刃文は波打つ乱刃、そして湾曲しているという日本刀の形は、平安末期から鎌倉時代頃に定まったもので、それ以前の古代の刀は、形も用途も全く異なるものだった。

日本に鍛造技術が伝わったのは五世紀以降の古墳時代あたりとされる。この時代から飛鳥時代頃に作られた古代の刀は、鎬（棟と刃の間にある稜線）がなく刀身が平らな「平造」で、時代が下るにつれ、鎬と刃の間隔が狭い「切刃造」、および切先の部分が両刃になっている「切先両刃造」の刀が現れる。

刀身は反りがなく真っ直ぐな「直刀」となっている。直刀は、湾刀のように「斬る」ことには向いていないが「刺す」ことには秀でているため、この時代の刀の主な使い方が、刺突であったと考えられている。またこの時代の刃文は、地と刃の境が真っ直ぐに入った「直刃」となっていた。

## 「斬る」ことを目的とし湾曲していった刀

平安時代に入っても、刀は依然として直刀・直刃であったが、平安時代も中期になると、浅いながらも反りが付いたものが作られ始める。また、刀の造も切刃造が主流だったが、鎬の稜線が棟よりとなり、鎬造との中間形とも言うべき形になってきた。

この反りが付いた最初の刀を作らせたのは、一説には平将門であるといわれている。この頃は、地方の治安が乱れ、たびたび小競り合いが起こっていたため、甲冑や刀などが、これまでのものより、実戦的なものへと進化していった時期でもあった。

そして武士が台頭してきた平安時代末期になって、鎬造で大きな反りが付いた「湾刀」へと進化し、刃文にも乱れが入るようになって、我々がよく知る日本刀の基本形が作られることになる。

また、この平安時代末期から鎌倉時代初期にかけては、政情が不安定となって騒乱が頻発し、刀の需要が飛躍的に高まったため、山城国の三条宗近、備前国の包平、伯耆国の安綱など、後の世まで語り継がれる名工が輩出された時期でもあった。茎に銘が刻まれるようになったのもこの頃からで、武士の要望に応じ、刀工たちが工夫を凝らした結果、ここにきて刀が飛躍的に発展していったのだ。

## 腰に佩く「太刀」から腰に差す「打刀」へ

鎌倉時代中期頃までは、戦いの主流は一騎打ちであったが、鎌倉時代後期からは、二度にわたる元寇がきっかけとなり、徒武者による集団戦へと変わっていった。接近戦が増えたことに伴い、刀は強度を増した、より重ねが厚いものへと形を変えていき、さらに室町時代中期には、室内での戦闘用に、刀身の短い脇差の製作も行なわれるようになった。

応仁の乱が起きた室町時代末期以降になると、それまで刀は刃を下にして腰に佩いていたが、戦陣で素早く身に付けられて接戦に対応できるよう刃を上向きにして帯に差すようになった。刃を下にして佩くものを「太刀」、刃を上にして差すものを「打刀」というが、打刀はさらに、太刀よりも短く、軽量に作られており、この頃から、打刀と脇差の二本を差す武士が現れるようになってきた。

## 泰平の時代、刀は戦闘用から象徴へ

室町時代で、日本刀はほぼ完成されたといっていいだろう。安土桃山時代に入って、刀は製鉄技術の進歩などにより、重ねが厚く、身幅も広く、切先が大きなものへと変化していったが、それほど形状に大きな変化は見られない。しかし、安土桃山時代は豪華絢爛な文化が生まれた時代であるため、それまで奉納用などごく一部のものにしか装飾を施されなかった刀にも、金銀を使った華やかな拵などが作られるようになり、これが江戸初期まで続いた。また江戸時代に入ると、それまで打刀と脇差の拵が別々だったものが、同一の形式と材料で作られるようになっていく。

泰平の世が訪れた江戸時代中期には、実戦で刀を使う機会が減ったために象徴的な意味合いのほうが強くなる。

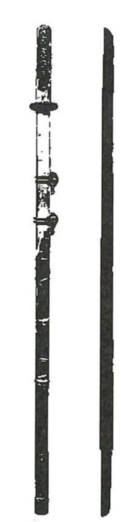
拵にさらに細かな装飾を凝らしたものが増えていったことに加え、世の中が安定し物流もスムーズになり、それまで鉄の産地ごとに特色のあった刀の地鉄も、地域の差がなくなっていった。この地域差が見られなくなったのが、ちょうど慶長年間を境としているため、刀剣史上では、慶長以前に作刀されたものを「古刀」、慶長以降のものを「新刀」と呼んでいる。

だが、象徴となり、華美になっていった刀も、もう一度本来の姿に戻る時がやってくる。それが幕末だ。

動乱の幕末には、切味だけでなく、強靭さといった実用性が重視されるようになり、拵もまた、質実剛健という言葉がふさわしい、機能的なものとなっていった。明治時代になると、廃刀令が公布されて刀が身近なものではなくなってしまう。幕末は刀が輝いた最後の時代だったといえるだろう。



【古墳時代〜飛鳥時代】
大陸文化の影響を受けており、鎬や横手がない平造で、両刃と片刃のものがあった



【飛鳥時代〜平安時代初期】
刀身が真っ直ぐ伸びた直刀で、鎬と刃の間隔が狭く「切刃造」や「切先両刃造」が主流。刃文は直刃だった



【平安時代中期〜鎌倉時代初期】
刀身に反りが付いた「湾刀」へと変化し、鎬造が主流となる。この時代の特徴的な刀として、刀身と柄が共造となった「毛抜形太刀」がある



【鎌倉時代中期〜室町時代初期】
大きな反りが付き、元幅が広く、刀身も長くなる。この頃までは、刃を下にして佩く「太刀」だった



【室町時代中期〜安土桃山時代】
刃を上にして差す「打刀」が主流となり、より実戦的になった。鉄製の甲冑への対応のため、重ねがさらに厚くなっている



【江戸時代】
江戸時代中期以降は、反りが浅くなる。また、泰平の時代を反映し、刀そのものよりも拵などの装飾が発達した

KENGO
A faction and a Japanese sword

# 第三章

# 江戸時代&戦国時代の剣術

「剣術」が一つの兵法として
体系づけられたのは室町・戦国時代から。
幕末を賑わせた剣豪たちが体得した剣術も
それぞれ師から弟子
弟子からまたその弟子へと
代々伝えられてきたものだった。
その源流、草創期の開祖にまで遡ってみたい。





COLUMN

## 明治の世、剣客の手で甦った剛刀

**美しさを廃し、武器としての戦闘力を極限まで追求した「究極の刀」がある。それこそが「同田貫」であった。**

# 「武器としての刀」を極めた剛刀・同田貫(どうたぬき)

**小説『子連れ狼』の拝一刀(おがみいっとう)の愛刀としても知られる同田貫は美装よりも実用性に重きをおきあらゆるものを叩き斬るために造られた「史上最強の実戦刀」だった。**

### 実戦で真価を発揮した無骨な刀「同田貫」

同田貫という刀がある。絶大なる切味を誇るわけでもなく、美しさにも乏しい無骨な刀だ。

作刀した刀工・同田貫は、室町時代末期に活躍した肥後刀工の一群であり、一説には、加藤清正お抱えの刀工であったとされる。江戸時代に刀工をランク付けした山田浅右衛門の『懐宝剣尺』では、同田貫は、ランク外ではないものの「大業物・良業物・業物混合」に同田貫正国がランクインしているのみで、刀だけでなく刀工も、飛びぬけて素晴らしい名工とされていたわけではなかった。

しかしこの評価は、相手が鎧を装着しない「素肌剣法」が広まった江戸時代以降のもの。同田貫の真価は、鎧に身を包んだ相手と戦う「実戦」でのみ発揮される。

同田貫の刀身は、重ねが厚く、長寸のものが多い。また、多くの刀は、重さを感じさせないよう重心が手元寄りにあるのだが、この同田貫は、切先寄りに重心があり、同じ重量の刀と比べても、重く感じる。頑丈さ・長さ・重さの三拍子揃った剛刀であるため、同田貫は他の刀にはできない「鎧ごと叩き斬る」ということが可能なのである。

### 榊原鍵吉が見せた同田貫の真の姿

同田貫の頑健さを表すエピソードに「天覧兜割り」がある。

明治19(1886)年11月10日、明治天皇が紀尾井町の伏見宮邸に行幸した際、兜の試し斬りをする天覧試合が行なわれた。

使用された兜は、高名な明珍作の南蛮鉄桃形。これに挑んだのは、警視庁の師範・鏡新明智流の逸見宗助、逸見と同門の上田馬之助、そして幕末の剣聖・男谷信友の弟子で直心影流男谷派の榊原鍵吉だった。



右＝近世報国高名集。下＝榊原鍵吉の肖像画（ともに国立国会図書館蔵）



一番手の逸見は刀が跳ね返されて失敗。刃先も欠けてしまった。続く二番手の上田も、刃先を滑らせてやはり失敗に終わった。だが榊原鍵吉は、58歳という年齢だったにも関わらず、同田貫業次(なりつぐ)を最上段から振り下ろし、真っ向から約20センチほど斬り割ったのである。

榊原鍵吉がいくら直心影流免許皆伝の腕前だったといっても、兜を割ることができたのは「斬り裂く刀」ではなく「叩き斬る刀」である同田貫だったからこそなのである。

# 柳生新陰流とは?

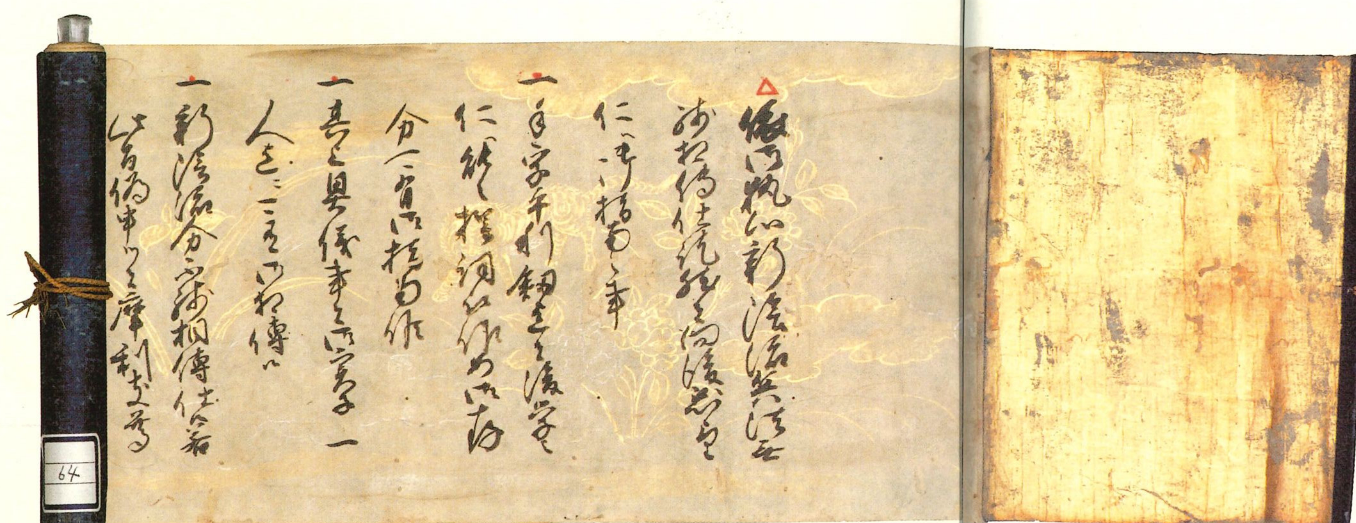
## 開祖・宗厳の剣技を高めた宗矩の辣腕

徳川将軍家指南役として天下に聞こえた柳生の剣。大和の小豪族から剣一本でなり上がった一族の軌跡。

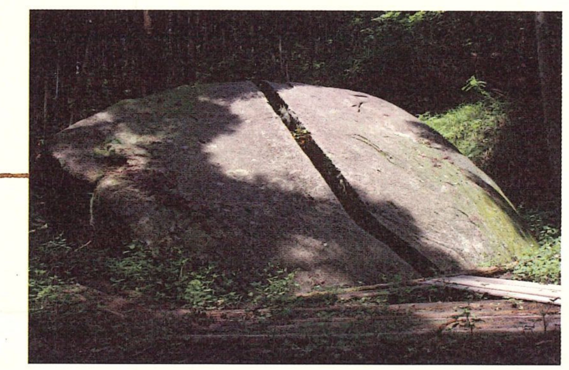
### 家康を魅了した新陰流奥義「無刀取り」

柳生氏は大和国（奈良県）の土豪であり、京に近いという土地柄、常に政局に翻弄されてきた。三好氏が台頭すれば三好氏に、新たに筒井氏が勢力を伸長すれば筒井氏に仕え、松永久秀の勢いに呼応して主君である筒井氏に反旗を翻した。そうして柳生氏は生き延びてきた。

猫の目のように変わる政局をよそに、中条流や新当流などの諸流派を学び、五畿内随一といわれる剣技を



新陰流免許状（寶山寺蔵／奈良地域関連資料画像データベース）



修行中の宗厳が天狗と試合し一刀のもとに切り捨てたが、残っていたのは2つに割れた巨石だったという（奈良市柳生町）

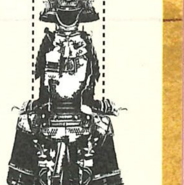


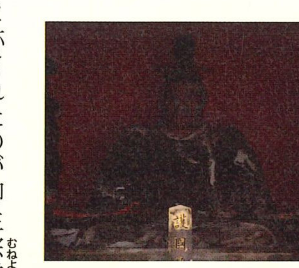
柳生剣法許状（寶山寺蔵／奈良地域関連資料画像データベース）

と称されたのが柳生宗厳（石舟斎）である。

柳生新陰流は宗厳と「剣聖」上泉信綱との出会いに端を発する。

廻国修行の途上、奈良・宝蔵院を訪れた信綱は、胤栄の立会いのもと、宗厳との試合に臨んでいる。試合は一日一回、三日間続けて行なわれたが、宗厳は信綱に一太刀も浴びせることができず完敗を喫している。一説によると、この時、信綱は素手で立ち合い、宗厳の木刀を奪い取る「無刀」の極意を見せたという。ちなみに信綱は試合に新たに考案した稽古用の剣術具・蟇肌撓を用いている。これはその後も柳生新陰流に引き継がれ、現代の竹刀のルーツとなった。





家康に仕官した柳生宗矩は、優秀な政治家としての顔も持っていた。歴代将軍の信も厚く、江戸柳生を定着させた功績は大きい。柳生宗矩木像（奈良市・芳徳寺）

宗厳は信綱一行を柳生庄に招き、指南を請うた。信綱は約半年滞在し新陰流を伝授、宗厳は奥義「無刀取り」を完成させ、永禄8（1565）年に新陰流の印可状を授けている。これにて免許皆伝である。

しかしそれ以降は不遇の時代が長らく続いた。変わり行く畿内の情勢に柳生氏は乗り遅れ、太閤検地によって隠田が発覚するに及んで、所領を没収されてしまうのである。前後して大きな転機が訪れる。

文禄3（1594）年、無刀取りの妙技を耳にした徳川家康が、兵法上覧を命じたのだ。宗厳は五男の宗矩を伴って、家康の待つ京郊外の鷹ケ峰の陣屋に赴き、父子で組太刀を披露した。家康は無刀取りを試そうと自ら木刀を打ち込むと、ものの見事に宗厳は妙技で奪ってみせた。感服した家康はその場で剣の師範となるよう命じたが、齢70近い宗厳は辞退し、その代わりに宗矩を推挙する。こうして徳川と柳生の深い関係が始まった。

宗矩の若い頃のことははっきりしないが、徳川家に仕官した後は二百石の旗本として家康に仕え、慶長5（1600）年の関ケ原の戦いで功をたて、旧領の柳生庄二千石を回復。翌年には二代将軍秀忠の剣術指南役となり一千石加増、合わせて三千石の大身旗本となる。一介の剣士からの立身出世であり、三代将軍家光の頃には所領は一万石を超えた。ここまで大成した剣豪は他にいない。

権力者に巧みに取り入る辣腕政治家としてのイメージが強い宗矩だが、真剣を振るったという数少ないエピソードのひとつが、慶長20（1615）年の大坂の役である。この時、宗矩は秀忠に従軍していたが、秀忠の本陣を豊臣方の武者三十五人が急襲、宗矩は馬前に立ち塞がり、瞬く間に七人を斬り捨てたという。宗矩が人を斬ったと記録されているのは後にも先にもこの時だけである。



宗厳が金春七郎のために描かせた剣の目録。もともとは剣の名目と絵だけのものだったが、七郎の2人の息子のために後から説明文を書き加えた

宗矩の長男・十兵衛三厳は竹千代（後の家光）の小姓となり、宗矩の将軍家指南役としての存在感はますます増し、柳生と徳川の関係は強固なものになっていった。

宗矩は寛永9（1632）年に柳生の武道書となる「兵法家伝書」を著し、柳生新陰流の思想をまとめている。内容は「進履橋」「殺人刀」「活人剣」の三部構成になっており、技法から心構えまでを説いている。

「進履橋」は新陰流の基本的な技法を記した入門編であり、真骨頂は「殺人刀」と「活人剣」にある。人を斬ることは本来許されるものではないが、柳生新陰流には「一殺多生の剣」というものがあり、確実に誰かを斬り捨てることで万人を救う道もあると記している。この書は兵法を通じて修身を説くという試みであり、つまりはそれまでの実戦を前提とした「武芸」が、武士として備えるべきたしなみのための「武道」へと変わるという意味で画期的な書物であった。

十兵衛三厳は講談や小説などによって柳生一族の中でも最も有名だが、その多くは創作である。家光の勘気に触れ暇を出されたのは事実で、再出仕するも宗矩の死に伴い柳生庄に戻った。隻眼でもなければ、隠密であったとも考えにくいが、柳生の名に恥じない優れた剣士だったのは確かで、父のような上昇志向もなく、日々兵法の研究に明け暮れていたようだ。

剣客オールスターによる夢の最強決定戦！

# 寛永御前試合

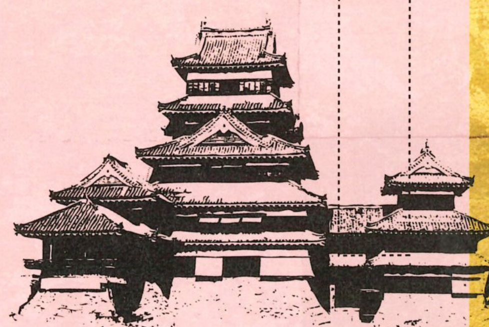
三代将軍・徳川家光は病弱だったがゆえに武術に高い関心を示した。それは一種の現実逃避だったかもしれない。


新陰流の印可を得ていた三代将軍・徳川家光

## 大衆を虜にした最強の座を巡る戦い

徳川幕府三代目将軍・家光は幼少時から病弱で、将軍となってからも度々病に臥せった。精神疾患の気もあったといわれ、武芸や能を好んだのも気晴らしのためだったかもしれない。柳生宗矩が家光の師範となるのは元和7（1621）年。家光はそれから約7年の修行で新陰流印可を得ている。剣術の腕前は決して低くはなかった。しかし、それ以上に剣術に対する執着心は異常なほど高かったと思われる。

家光は、伊達政宗、藤堂高虎、毛利秀元ら戦国時代を生き抜いた武将たちを御咄衆として、合戦の話を聞くことを好んだ。元和偃武――、戦乱の時代は過去のものとなり、徳川幕府の治世も磐石、戦場とは無縁の世界に生きて、病弱の身はますます力こそすべてだった時代への憧れを強くしたのだろう。寛永9（1632）年9月22日、江戸城内武術御撰広芝（吹上滝見の御茶屋周辺にあったという）の御稽古場で御前試合が催された。世に言う「寛永御前試合」である。



腕に覚えのある武芸者が一堂に会し、将軍家光の前で一対一の試合を披露するというもので、向正面には「天下のご意見番」として名高い旗奉行・大久保彦左衛門忠教、審判は柳生宗矩ともう一人の将軍家指南役である小野派一刀流の小野忠常らが務めた。試合は文献によって異なるが、後世に編まれた『陸軍歴史』によれば、全11試合が行なわれている。心形刀流対浅山一伝流、柳生新陰流対新免二刀流、馬庭念流対中条流など、見どころの多いラインナップではあるが、実はこの御前試合自体、実際に行なわれたかどうか限りなく怪しいのである。荒木又右衛門対宮本伊織という黄金カードも組まれているが、特に4試合目の大久保彦左衛門と加賀爪甲斐守の一戦は「一心太助の物語」などの講談で庶民人気の高い実力派旗本が、乱暴狼藉を働いた悪名高い旗本の若造をやり込めるような内容であり、7試合目に出場した伊達政宗に至っては御歳65で、56歳の秋元但馬守に勝利するのだ。



寛永御前試合は講談などの題材としても庶民に人気だった（『寛永御前試合』／国立国会図書館蔵）

これが講談ともなると、試合内容はさらに歯止めが利かなくなり、

**塚原卜伝　対　法蔵院覚善坊**
**柳生宗冬　対　由井正雪**
**伊東一刀斎　対　毛利玄達**

など、あり得なくも是非見てみたいと思わせる、まさに夢のようなカードが並ぶ。もちろん史料には「寛永御前試合」があったとする記述は見当たらないが、行なわれなかったという記述もまた、ないのである。誰もが見てみたいと思う戦いであれば、講談で客が沸くのは道理なのだ。

しかし江戸幕府の公式記録である『徳川実紀』には江戸城内で上覧試合が行なわれたという記述がある。開催されたのは慶安4（1651）年2月24日から4月11日。いわゆる『慶安御前試合』であった。当時、家光の体調が優れず、記録によれば「御病間御心なぐませ給わんため」開催されたとある。

この試合の見どころのひとつとなったのが「尾張の麒麟児」として名高い柳生厳包と宗矩の三男・柳生宗冬の尾張柳生と江戸柳生の新陰流同門対決である。試合は人払いして行なわれたといい、宗冬の木太刀が剃刀のように厳包の胴衣を切り裂いたが、厳包が素早い打ち込みで宗冬の右拳を砕き勝利を収めたという。尾張柳生家には試合で使われた木太刀が伝えられている。無論『徳川実紀』には試合の詳細が細かく記録されているわけではない。

御前試合を終えてからほどなくして家光は逝去した。享年48。死因は肺がんだったといわれている。

### 寛永御前試合対戦表

寛永9（1632）年9月22日
江戸城内武術御撰広芝　御稽古場

【第1試合】
○伊庭如水軒（心形刀流）
VS
×浅山一伝斎(浅山重晨)（浅山一伝流）

【第2試合】
○竹内加賀之助（真揚流柔術）
VS
×由井直人

【第3試合】
○佐川蟠竜斉
VS
×関口柔心

【第4試合】
○大久保彦左衛門
VS
×加賀爪甲斐守

【第5試合】
△荒木又右衛門（柳生新陰流）
VS
△宮本伊織(宮本八五郎)（新免二刀流）

【第6試合】（鎧勝負）
○初鹿野伝右衛門
VS
×朝比奈弥太郎

【第7試合】
○伊達政宗
VS
×秋元但馬守

【第8試合】
○柳生市之丞(中山路介九郎)
VS
×石川又四郎

【第9試合】
○石川軍東斉
VS
×松前帯刀

【第10試合】
△樋口十郎兵衛門定勝(馬庭念流)
VS
△中条五兵衛(森田五兵衛実氏)(中条流)

【第11試合】
△羽賀井一心斎(芳賀一心斉)
VS
△難波一刀斉(難波不伝)

（講談に登場する対戦）

塚原卜伝VS法蔵院覚善坊

柳生宗冬VS由井正雪

伊東一刀斎VS毛利玄達

山田真龍軒（山田流鎖鎌）VS
井伊直人（柳生新陰流）・井伊貞女（薙刀）

吉岡又三郎兼房（吉岡流小太刀）VS
毛利玄達（毛利流手裏剣術）

日置民部（日置流弓術）VS
鷲津七兵衛（鹿島神道流棒術）

曲垣平九郎（曲垣流馬術）VS
和佐大八郎（弓術）

など

**兵法の道を求めて放浪した伝説の剣客**

# 武蔵と二天一流

**最も高名な剣豪・宮本武蔵。一般的なイメージは創作物によるものだが果たして実際の武蔵はいかなる人物だったのか。**

**宮本武蔵**
みやもと むさし
生没年◉1584?-1645年

## なぜ武蔵は創作物が多いのか

宮本武蔵。二刀を用いる二天一流の開祖であり、兵法の道を極め『五輪書』を著した兵法家である。絵画や彫刻、書など数多くの優れた芸術作品を残し、海外でもその名は知られている。知名度からいえば名だたる剣豪の中でも別格の存在だが、そのイメージの大半は創作物によるところが大きい。しかし、その剣の道を歩んだ求道者としての生き様といい『五輪書』に著した到達点といい、宮本武蔵という異能の剣豪の物語は、誰もが興味を掻き立てられずにはいられない。没後数十年も経つと、早速虚実ないまぜの逸話や伝承が語られていったが、その後も創作物が引きも切らないのは宮本武蔵の生涯が劇的であるからに他ならない。物語の語り部たちの創作意欲を喚起するドラマが、彼の人生には内包されているのだ。

武蔵の出生はよくわからない。天正12(1584)年生まれというのが通説ではあるが、それは『五輪書』序文に「生国播磨の武士新免武蔵守藤原玄信、年つもって六十」と書いてあるためだ。執筆した寛永20(1643)年から逆算して、武蔵の自称に従えばそういうことになる。

通説では生まれは美作(岡山県)というものもあるが、こちらも武蔵に従えば播磨(兵庫県)となる。

宮本ではなく新免を名乗っているのは美作の兵法武芸家・新免無二斎の家を武蔵が継いだからである。実父か養父かははっきりしないが、武蔵の養子である宮本伊織の直系に伝わる家系図によれば養父の可能性が高い。また、無二斎が途中から宮本姓を名乗ったともいわれるが、こちらもはっきりしない。ともあれ兵法の集大成である『五輪書』に名乗るからには、時の将軍足利義昭から「日下無双(ひのしたむそう)」と称された無二斎の存在は大きかったと思われる。

少年期の物語はほとんど創作だが『五輪書』には初試合のことが書かれている。武蔵は13歳、相手は新当流有馬喜兵衛という兵法者だったという。さらに16歳の時には但馬国(兵庫県)の秋山某という強力な兵法者と戦い、勝利している。

## 激しい武者修行が名勝負を生んだ

現在の武蔵像に大きな影響を与えた吉川英治の小説『宮本武蔵』は、関ヶ原の戦いで敗れたところから物語が始まっているが、武蔵が関ヶ原の戦いに従軍したという記録は存在しない。むしろ、黒田家に仕官していた新免無二斎とともに東軍として九州で戦っていた可能性が高い。

天下分け目の大戦は思いもかけず短時間でケリがついたが、緊張状態は続いた。再び大乱が起きるという噂は根強く、主家取り潰しにより大量の牢人で溢れたが、仕官の道はなくはなかった。ただし大名側は当然より力のある武芸者を召し抱えようと考える。武名を挙げて士官の道を得ようと、腕に覚えのある者たちが武者修行に身を投じた。武蔵が廻国修行に旅立ったのもちょうどこの頃である。

『五輪書』には、

「二十一歳にして都へ上り、天下の兵法者にあひ、数度の勝負をけつすといへども、勝利を得ざるといふ事なし」

とある。記録によれば、上京した武蔵は吉岡一門と戦っている。吉岡家は足利将軍家の兵法指南役であり「京八流」を継承する名門だが、武蔵はまず吉岡家当主清十郎と洛外蓮台野(れんだいの)で戦った。真剣の清十郎に対し、武蔵は木刀の一撃で倒すと、今度は洛外で弟の伝七郎と戦い、これも敵の持つ五尺の大木刀を奪って打ち据えた。面目を失った吉岡一門は清十郎の子・又七郎を名目人に対決を申し入れ、百人を超える門弟が弓矢まで携えて襲ったが、武蔵は又七郎を一刀両断し、百人の総攻撃をしのいだという。にわかには信じ難い話ではあるが『五輪書』には「多敵の位」として大人数を相手にする兵法




武蔵肖像画(島田美術館蔵)

# 武蔵と二天一流

**兵法の道を求めて放浪した伝説の剣客**

が記されており、それは吉岡一門との実戦から導き出されたのかもしれない。

二天一流が誕生する前、武蔵が創始したのが円明流である。脇差や短刀を投げる投剣術などを含む意表を突いたトリッキーな流派で、武蔵が寛永元（1624）年に尾張に立ち寄った際に教えたことに始まる。この戦術は、鎖鎌の名手・宍戸某（小説によっては梅軒と称される）との戦いを思い出させる。この戦いで武蔵は脇差を投げて勝利しているのだ。

「ある物は何でも利用する」

これが二天一流の極意だが、円明流にもその萌芽が見られる。

二刀流に関して武蔵は『五輪書』で次のように述べている。

「初心の者におゐて、太刀・刀、両手に持って、道を仕習う事、実の所也」



宮本武蔵と佐々木小次郎の巌流島での対決は講談や錦絵でたびたび描かれた。「佐々木岩柳 片岡市蔵」「月本武者之助 坂東簑助」（東京都立中央図書館特別文庫室蔵）

武士は常に二刀を腰に帯びている。一命を捨てて戦うのなら、すべての道具を試みるべきである――。右手に大太刀、左手に小太刀の二刀を用いる二天一流は、最大限に勝利を得ようと試みる合理的な戦闘スタイルであった。二刀は日月の「二曜」に通じ、日月が天にあるごとく、二刀は「二天」となる。

全国を漂泊し武芸の道を極めた武蔵の集大成となったのが、佐々木小次郎との巌流島の決闘である。この時はまだ二天一流に開眼していなかったようである。

武蔵の最も有名な戦いだが『五輪書』にはその記述がなく、対戦相手の佐々木小次郎という剣豪も素性はよくわからない。史料によって内容はまちまちで、決闘がいつ行なわれたのかですらはっきりしない。しかし、武蔵の死後、伊織が小倉・手向山に建立した顕彰碑によれば「岩流」という兵述の達人が武蔵に真剣勝負を挑み、長門と豊前の際にある「舟嶋」で相対し、武蔵が木刀で岩流を殺した、と記されている。「三尺の白刃」の岩流に武蔵は「電光なお遅し」という一撃で勝利した。これがこの戦いのすべてである。

## 『五輪書』に見る剣豪・武蔵の一生

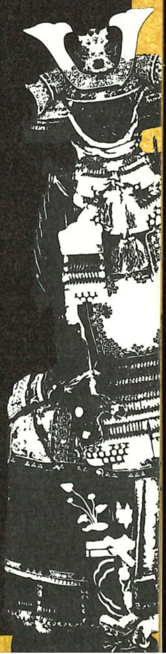
武蔵は30歳を超え、過去の戦いを振り返り「兵法至極してかつにはあらず」と自省し「なおも深き道理」を得ようと鍛錬を積んだ。そして50歳になり自然と兵法の何たるかを悟ったという。寛永17（1640）年、武蔵は肥後国熊本の細川藩に客分として招かれた。武蔵はすでに59歳となっていた。今に残る著述や書画などのほとんどはこの熊本で著されたものである。かつては将軍家か徳川御三家と、大望を抱いていた武蔵だが、ある種の覚悟をもって熊本を最後の地に選んだのだろう。

寛永20（1643）年10月10日、武蔵は熊本城下の邸を出て、郊外の金峰山にある岩戸山の霊巌洞で『五輪書』の執筆を始める。

「剣禅一如」。生と死を戦わせる剣の道は突き詰めれば禅の悟りと同じである。剣豪たちは最後に必ず、この境地へと辿り着く。

武蔵は書く。

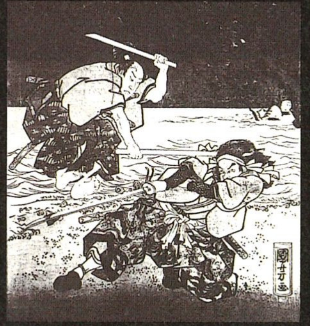
「今、世の中に兵法の道、たしかにわきまへたると云ふ武士なし」





乱世は遠い過去になり、兵法は形骸化する一方であり、戦いを知らない武士に、武士たるものの本分を示そうとした。これが『五輪書』であった。五輪とは万物を構成する「地・水・火・風・空」の五つの要素で、武蔵は「地の巻」に兵法のあらましを、「水の巻」に剣術の理を「火の巻」にはひとりの心構えが合戦に通じるという勝負の理を、そして「風の巻」で他の流派の間違いを正し「空の巻」で文字どおり果てなき「無」の存在があることを知れ、と武蔵は書く。

虚像によって祭り上げられた伝説の剣豪・宮本武蔵の生涯が、のちに世界的ベストセラーとなる『五輪書』に集約されている。脚色された物語は多いが、兵法の道を生きた武蔵の到達点は、前人未到の高みにあった。それだけは間違いない。



### 宮本武蔵名勝負

| | |
|---|---|
| **有馬喜兵衛** | 武蔵13歳の初試合。播州の剣術者で新当流の使い手だったという。機を見て組打ちに持ち込み六尺棒で滅多打ちに |
| **吉岡清十郎（吉岡一門）** | 室町将軍家の兵法指南役・吉岡一門の道場主。清十郎は真剣で、武蔵は木刀で挑み頭を打ち砕いた |
| **吉岡伝七郎（吉岡一門）** | 清十郎の弟で豪剣で知られた。兄の仇討ちを挑んだが武蔵は五尺の大木刀を奪い、一打で打ち倒したという |
| **奥蔵院** | 槍の名手として知られた宝蔵院胤栄の高弟。二度戦い、二度とも完勝している。短い木刀を使ったという |
| **柳生石舟斎** | 柳生の庄で対面した。詳細は不明。剣の極意を教わる |
| **宍戸某** | 鎖鎌使い。武芸者ではなく山賊だったとも。刀を封じられた武蔵は、短刀を投げつけて勝利。二刀流の端緒となる |
| **夢想権之助** | 神道夢想流杖術の流祖。六尺を超える大男で、名を売るために武蔵に戦いを挑んだが、武蔵は小弓を作るため削っていた木片で眉間を一閃して倒した |
| **大瀬戸隼人、辻風某** | いずれも柳生家家臣。江戸に滞在した武蔵に挑んだが太刀打ちできなかった |
| **佐々木小次郎** | 「岩流」ともいわれる剣豪。巌流島にて決闘。武蔵は櫂を削って作った四尺の木刀で打ち倒した |
| **三宅軍太夫** | 播磨国の東軍流達人。武蔵は大小二本の木刀を用い、圧勝している。立会いで二刀を使ったのは初めて |
| **高田又兵衛** | 小倉藩槍術指南役。藩主である小笠原忠真の命により試合が催された。武蔵は木刀一本で渡り合ったが、又兵衛は数度攻撃しただけで降参した |
| **松平直政** | 出雲松江藩主。大名相手の一戦で、直政は徳川家康の二男・結城秀康三男で自ら立ち合いを志願。武蔵は二刀で木刀をへし折った |
| **塩田浜之助** | 肥後熊本で行なわれた試合で、浜之助は細川家の棒捕手術師範。武蔵は短い木刀を用い、攻撃をすべて防いでみせた |
| **氏井弥四郎** | 柳生新陰流の達人。武蔵最後の戦いで、熊本藩主の細川忠利の命で行なわれた。試合は両者木刀で行なわれ、弥四郎は全く歯が立たなかったという |

## ❖乱世を生きた戦国人たちが編み出した「介者剣術」

# 関ヶ原以前の剣術

**戦いの中で生み出された剣さばきは確実に相手を倒し自らが生を繋ぐ技術であった。**

### 己を生かす「武芸」の道を極める

戦国時代の剣術は互いに防備を固めたうえでの斬り合いであった。純然たる剣術ではなく、組み討ちまたは防具の隙間を狙う実戦的かつ特殊な技であり、これらを称して「介者剣術」と呼ばれる。居合いや柔術、組み討ちなども含む、総合的な戦闘術のひとつであり、ここから日本古来の様々な武道が派生し発展していった。これに対して、武装を解いた平服の状態で、個人と個人との戦いを前提として一挙一動を理論づけた剣術を、鎧兜を着用しないという意味で「素肌剣術」と称する。ある意味ではルールを前提としたスポーツライクな剣術ではあるが、実戦的見地が根本にあるという点では、両者の隔たりは実はさほど大きくない。つまり、戦乱の時代が遠い過去となった泰平の世にあっても、戦いの中から生まれた剣術には当然ながら人の命を奪う必殺剣という出自があり、その当たり前の事実は、幕末動乱の中で再び浮かび上がってくることになる。

元来、刀剣は原始的な武器ではあるが、古代においては神聖な霊力を秘めた祭祀具として、神話の中でも非常に重要なアイテムとされてきた。もちろんそれは矛と同様、統治者の権力を象徴するものであったが、源平争覇期を迎えて戦闘が身近になると、わが国独自の製法により攻撃力の高い太刀が実戦で用いられるようになる。しかし実際の戦場で威力を発揮したのは弓であり、集団戦闘の中では刀剣よりも扱いやすい長刀や槍が中心的兵器となっていった。それでも武将級の騎馬武者による一騎打ちという儀礼的な戦闘形態を背景に、個人の武威を表す刀剣は次第に豪壮華麗な作風になっていく。古来より刀剣には武士の魂が宿ると考えられたためである。

南北朝時代になると豪壮長大な太刀が盛んに作られた。この時代は刀剣史上「剛刀時代」とも呼ばれ、刀身90センチ前後の長大な野太刀（大太刀）が流行した。当然武威を誇るためでもあるが、実際の戦闘では豪腕で鳴らした力自慢の力士たちが活躍した。

戦国時代になると戦闘は騎馬戦から徒歩集団戦へと移行し、鉄砲の登場により戦闘方法は大きく変わる。戦闘のスピード化の中では足かせとなる重い鎧兜は簡素化され、乱戦の中で長大な太刀はほとんど使われなくなり、その代わり素早く抜き差しができる打刀が主流となっていった。打刀は刃を上にして腰に差す片刃の湾刀で刀身は60センチ以上。現代で「日本刀」といえばこの打刀を指す。

剣術が発達するのはこの頃からである。

それまでの刀剣による戦闘は、重厚な鎧兜を身に付けた者同士が膂力に任せて野太刀を振り回すだけにすぎなかったが、戦国の激戦の中で生き延びるために――相手の命を確実に奪うために――、より合理的な戦闘術が磨かれていった。それが「介者剣術」だったのである。

それまでに古より伝えられた剣術には「京八流」と「鹿島七流」があった。

「京八流」とは平安時代末期に一条堀川に実在した陰陽師で兵法の大家でもあった鬼一法眼が鞍馬山の八人の僧侶に伝えたといわれ、現代まで伝わる全ての剣術の源流とされている。「鹿島七流」とはさらに古くから関東に伝わる剣術で、常陸・鹿島神宮の神官・国摩真人が編み出した「鹿島の太刀」を基に、その技を七家の神官が代々継承したといわれる。

どちらも具体的な物証などがなく、伝説の域を出ないが、剣術は武士が心得ておくべき「道」であった。「東の鹿島七流」と「西の京八流」を源流とする剣術流派は戦乱の世ゆえに着目されるようになる。

過去の戦闘が力任せによるものだったにせよ、鎌倉時代には、「大向、小額、左右の小手、幌突き、高股、胴、骨、大袈裟、小袈裟」などと用法や急所などを具体的に記した文献が残っており、野太刀を用いるにあたって、ある程度は戦闘術が体系化されていたことがうかがえる。ただし前提としてあるのは、大きく重い鎧兜を着用した上での戦闘であり、体躯や膂力であらかた勝敗が決まってしまう世界であった。それが戦闘のスピード化に伴い、柔よく剛を制すという闘い方が可能になった。そこで「技術」ないしは「武芸」という概念が確立されるようになる。たとえ非力でも技術があれば戦いを制すことが可能なのだ。剣の道に生きる武芸者が現れるのも、ちょうどこの頃である。



敵も味方も鎧兜の重装備。防具の隙間を狙う戦法「介者剣術」が有効だった

『太閤記山崎合戦 上』竹内栄久 編（国立国会図書館蔵）

奥州高舘合戦義経主従勇戦働之事（国立国会図書館蔵）



# 乱世を生きた武芸者たち

## 戦国の剣豪と呼ばれた天賦、ここにあり

戦いの中を生きた豪傑たちは、一体何ゆえに生き延びることができたのか？



### 一刀流

## 伊藤一刀斎（いとう いっとうさい）

**乱世を生きた「一刀」の重み 驚異的な強さで知られる謎多き剣豪**

生没年 1560?～1653年

江戸時代に隆盛し、現在において も名を知られる剣術流派・一刀流。一説に伊藤一刀斎の創始とされる。実際には一刀斎の死後に命名されたともいわれるが、はっきりしたことはわからない。

伊藤一刀斎は謎多き人物である。出生は天文19（1550）年または永禄3（1560）年、90歳または94歳で没したとされる。苗字は文献によっては伊東とも記されるため、伊豆国伊東（静岡県）の出身といわれるが、近江堅田（滋賀県）あるいは加賀（石川県）という説もあってはっきりしない。

有名な伝承としては、愛刀・瓶割（かめわり）にまつわる物語がある。それによれば一刀斎は伊豆大島の出身で、幼名夜叉丸を名乗った。14歳の時、板子一枚にすがり付いて伊豆三島に泳ぎ着き、村人から「鬼が来た！」と騒がれたという。何しろ色黒くて筋骨逞しく、鋭い目は電光の如くというから無理もない。一刀斎は三島の剣術家・富田一放に試合を申し入れ、一刀のもとに倒したため、三島神社の神主が神社の宝刀・備前一文字を与えた。その直後、神社に押し入った盗賊七人を斬り倒し、大瓶に隠れた最後のひとりを瓶ごと一刀両断にした。これが「瓶割刀」の逸話である。

元亀年間（1570～73年）には室町以前の日本剣術の三大流派のひとつ、中条流の達人・鐘捲自斎（かねまきじさい）から中条流の小太刀、鐘捲流の中太刀を習い、数年足らずという驚異的早さで奥義を極めたといわれる。この時、自斎は一刀斎と三度立ち合いを行ない、三度とも一刀斎が勝利した。自斎は一刀斎の進境ぶりに舌を巻き、秘伝である妙剣、絶妙剣、真剣、金翅鳥王剣、独妙剣の五点を授けたという。

その後一刀斎は諸国武者修行の旅に出る。三十三度に及ぶ試合に一度も敗れることはなかった。



『先哲像伝　第2冊』（国立国会図書館蔵）



### 伊藤派一刀流

## 神子上典膳（みこがみ てんぜん）

**剣の道をもぎ取った一刀斎高弟 「一刀」の重みを受け継ぐ徳川家指南役**

生没年 1565～1628年

伊藤一刀斎の二人の高弟のひとりで、兄弟子の善鬼との立ち合いを制して一刀流を継承した。瓶割刀を与えられたのも典膳である。先祖は大和の豪族・十市氏の後裔で、安房国・里見家に仕えた家系だったが、旅の途中の一刀斎に勝負を挑み敗北を喫したのを機に典膳は出奔し一刀斎に師事するようになる。文禄2（1593）年、一刀斎の推薦で徳川家康に仕官し二百石の禄高を与えられ、そのまま徳川秀忠付となり、柳生新陰流に先立って徳川将軍家剣術指南役に迎え入れられている。これをきっかけに典膳は名を小野次郎右衛門忠明と改名。小野姓は典膳の母方の旧姓といわれ「忠」は秀忠の偏諱（へんき）である。

典膳はたとえ相手が将軍だろうと木刀で稽古をつけ、柳生流と好対照をなしたという。結局、将軍家指南役としては柳生に先行されてしまうが、そのあたりも質実剛「剣」を旨とする一刀流らしい。

典膳、すなわち忠明はついに六百石を超えることなく没し、子の忠常が小野家を継いだ。弟（子とも）の忠也が一刀斎の姓伊藤を継ぎ、伊藤派一刀流（忠也派一刀流）を名乗ったため、忠常の派が小野派一刀流を名乗った。

一刀流は中条流の影響を色濃く受けており、刀も二尺の細身の刀と一尺五寸五分の小太刀を用いる。稽古は木刀を用いた激しいもので、それゆえ歴代の将軍は竹刀を用いる新陰流を好んだという。



『先哲像伝　第2冊』（国立国会図書館蔵）

### タイ捨流

## 丸目長恵（まるめ ながよし）

**剣聖が認めた「西の丸目」 殺人剣・裏太刀を伝授された随一の高弟**

生没年 1843～1900年

肥後南部の戦国大名・相良氏の家臣で兵法に通じ、上洛して剣聖・上泉伊勢守信綱に師事した。剣豪将軍と謳われた室町幕府第十三代将軍・足利義輝に伊勢守が兵法を上覧した際、門下から長恵が代表として選ばれ、伊勢守の打太刀を務めた。誰もが認めた門下随一の高弟で、この演技に義輝から感状が下賜され、伊勢守から新陰流の極意が与えられた。その後、長恵は帰国し家中の兵法指南役となる。

伊勢守が伝授したのは活人剣に通じる「表太刀」と殺人剣の「裏太刀」で、多くの門弟の中でも後者の極意を授けたのは、長恵と柳生宗厳・宗矩だけだった。伊勢守亡き後、宗矩が将軍家指南役として天下一を標榜すると「西の丸目」と称された長恵は、新陰流から新たに「タイ捨流」を創出する。

「タイ」を「体」とすれば体を捨てるにとどまり、「待」とすれば待つを捨てる心にとどまり、「太」とすれば自性に至るということにとどまり、「対」とすれば対峙を捨てるにとどまる。カタカナ表記とすることで、すべての意味を内包しているという。

# 塚原卜伝

つかはら ぼくでん

生没年◉1490-1571年

**秘剣・一の太刀で知られる新当流創始者は激しい廻国修行の中で数々の伝説を世に残した。**

## 「戦えば必ず勝つ」鹿島が生んだ伝説の神剣

### 「一の太刀」の正体は何か？

剣術の聖地・鹿島が生んだ伝説の剣聖・塚原卜伝。『鹿島志』などによれば、大永2（1522）年、武者修行から帰国した卜伝が鹿島神宮に千日参詣した際、最後の日に「心を新たにして敵に当たる」との悟りを得て新当流を創始したと伝わるが、卜伝自身はこれといった流名を称した記録はない。そもそも卜伝の時代、後の流派では必須となる哲学的な理論はまだ形成されておらず、あくまで実戦の中で体得していった剣術だと考えられ、新当流の呼称は門弟によるものだろう。

鹿島神宮での鍛錬で会得した秘剣が「一の太刀」である。この奥義について、卜伝は何も書き残していないため、具体的にどのような技だったのかわからない。敵が斬りかかってきた瞬間に倒す攻防自在の技であるとされており、構えや間合いを測り、一太刀で防御と攻撃を終える必殺の剣だったと考えられる。この秘剣が伝授されたのは少なくとも三人。伊勢国司北畠家の第八代当主・北畠具教（きたばたけとものり）、室町幕府第十三代将軍・足利義輝、のちに徳川家康に「一の太刀」を伝授した鹿島神宮の大祝・松岡則方（兵庫助）——。

卜伝は諸国を流浪して剣技を磨き、真剣試合を十九回、木刀で数百回の試合を経験したといわれる。合戦にも三十七度出陣したが、矢傷を六ヶ所に負った以外、相手の武器にかすったことすらなく、二百十二人を倒したという（『卜伝百首奥義』）。

当時、同じように廻国修行に身を投じる武芸者は多く、国によっては剣客修行の武芸者を手厚くもてなし、剣術指南を受けるという文化があった。とりわけ領主が熱心であれば仕官の道もあり「一の太刀」を伝授された北畠具教のように、領主自ら熱心に教えを請うことも少なくなかった。武芸者は行く先々で名を上げる必要があり、必然的に決闘試合に身をやつすことになる。そして、高名であればあるほど、戦いから逃れられない。

卜伝に関しては創作も多いが、実際に武名は群を抜いていたと考えられる。晩年、弘治2（1556）年の生涯最後となる武者修行では、三羽の大鷹と乗り換え用の馬三頭を引き連れ、八十人の門弟を伴って大名さながらの旅をしている。このことからも卜伝の著名人ぶりがうかがい知れる。



卜伝は代々鹿島神宮の神官・鹿島氏の四家老の一人である卜部家に生まれ、その後、常陸国（茨城県）領主の鹿島家に仕える塚原家の養子となっている。卜部家には代々「鹿島の太刀」が鹿島中古流として伝わっており、越前国（福井県）の富田流から太刀、小太刀を取り入れるなど、研鑽に励んだ家筋である。また、塚原家では義理の祖父である塚原土佐守が天真正伝香取神道流の流祖・飯篠家直の高弟であり、卜伝の素地は鹿島中古流と神道流によって形作られたといえる。剣の道を極めんと欲するのも当然の環境があったのである。

塚原家は鹿島氏の四宿老であり、乱世の中、卜伝も合戦に駆り出されていたが永正2（1505）年、養子の身でありながら家中の慌しさを離れ、単身武者修行の旅に出る。『卜伝百首奥義』によれば、17歳にして京の清水寺で真剣試合を行なったのが最初だったという。

清水寺での戦いの詳細は不明だが、よく知られている真剣勝負に川越城下での梶原長門との対決がある。

長門は手だれの小長刀使いで、空を飛ぶ燕や雉を切って落とすばかりか、試合では事前に切り落とす部位の順番を予告し、その通りに切って勝利するという剛の者だった。身を案ずる声に卜伝は「二尺に満たない小長刀など柄の短い槍同様、突き抜かれたところで敗れることはない」と余裕の構え。試合では卜伝は愛刀ではなく二尺九寸の太刀を用い、一刀で小長刀を切り落とし、二刀目で長門の面を割った。

この試合でもわかるように、卜伝は立ち合いの相手の情報を得て、自ら考えた必勝方程式に則って戦いに望んでいる。相手の構えは右か左か、癖はないか、得意とする攻撃は何か、それらの情報を細かく調べ上げたことが「無敗伝説」を形作ったのである。

著名なエピソードのひとつに「無手勝流」がある。琵琶湖の船中で顔を合わせた若い剣士に決闘を挑まれた卜伝は、返答をのらりくらりとかわしていたが、血気盛んな若い剣士は卜伝が臆病風に吹かれていると罵倒する。やむなく卜伝は決闘に応じ、途中の小島に降りることにするが、はやる若い剣士を置き去りにして、卜伝は下船もせずに島を離れる。

大声で罵倒する若い剣士に対して卜伝は「戦わずして勝つ、これぞ無手勝流」と言い放った。武芸者から狙われ続けた高名な剣豪は無益な戦いをしないものである。



宮本武蔵の攻撃に鍋蓋で応戦。二人は同時代には生きていなかったため、あくまで後世の創作だ。
新撰東錦絵 武蔵塚原試合図（国立国会図書館蔵）

COLUMN

### 実戦から編み出された新当流創始者

鹿島氏の四家老・卜部家に生まれ、塚原家の養子となり、幼少から鹿島中古流と神道流を修める。まだ十代の内から生涯三度の廻国修行に出て、真剣試合十九回、木刀で数百回の試合を経験し、そのすべてに勝利している。戦国大名や将軍家にも刀法を教えた。



忠孝名誉奇人伝
（国立国会図書館蔵）

# 剣聖 上泉信綱（かみいずみ のぶつな）

生没年◉1508-1577?年

**時の将軍が認めた天下無双の剣聖。その技術と指導法は多くの優れた弟子を生み出した。**



> **COLUMN**
>
> **兵法家の顔も持つ戦国最高位の剣豪伊勢守**
>
> 戦国最強の剣豪。上州出身で兵法家として念流、陰流、神道流などを学び、新陰流を興した。長野業正の家臣として武田信玄や北条氏康勢と戦い、その功績から「長野十六槍」に数えられる。長野氏滅亡後、諸国流浪の剣術修行に出たという。

## 「新陰流」はなぜ後世に発展したか？

戦国時代には主を持たず武に生きる腕に覚えのある武辺者がいた。中でも当代とって天下一と目され、「剣聖」とまで称されたのが上泉伊勢守信綱である。

信綱は上野国大胡に生まれた。藤原秀郷の流れを汲む上泉家は代々剣術に秀で、信綱は青年時代から各地で武者修行に励んでいる。剣の師は諸説あるが、鎌倉では念阿弥慈恩（ねんあみじおん）を流祖とする念流を学び、松本備前守に天真正伝香取神道流を、さらに常陸国鹿島では陰流の祖・愛洲移香斎（あいすいこうさい）に師事したといわれている。

これら諸流派から信綱は、陰流の発展形として新陰流を創始した。陰流に関する史料はほとんど残っていないが、一般的に「陰」とは陰陽で「陽＝表層」とした場合の「深層」、すなわち心の動きや気の流れなど、目に見えない部分を指すと考えられる。もちろん、新陰流は信綱の高い技術に裏打ちされて広まっていったのだが、もうひとつ、信綱に卓越した指導力が備わっていたことは無視できない。信綱は合戦に際しての兵法を理論づけた軍配兵法「上泉軍法」を受け継いでおり、兵学を修めた優秀な指導者としての顔があったのである。体系的に新陰流を興し、修練のために袋竹刀を考案するなど、その後一大潮流となっていったのはひとえに学問的な体を成していたためであろう。

「剣聖」と称えられる理由のひとつが将軍のお墨付きである。永禄7（1564）年、室町幕府第十三代将軍・足利義輝に招かれて兵学を講じ、上覧試合で刀技を演じてみせた。義輝は「上泉の兵法は古今に比類がない。天下一というべし」と絶賛したという。

信綱には塚原卜伝のような派手な武勇伝は少ない。というのも諸国を武者修行の旅に出たのは永禄9（1566）年、信綱はすでに59歳になっていた。

信綱が仕えた長野家は「上州の黄斑」こと長野業正が治めていたが、業正が病没すると近隣の武田氏や北条氏の絶好の草刈場と化し、ついには信玄に攻め滅ぼされてしまう。上野国を占領した信玄は「長野十六槍」筆頭に上げられた信綱の非凡さを惜しみ、自分に仕えるよう再三促したが信綱は固辞。他家に仕官しないことを条件に剣術行脚を開始した。ちなみに信綱はこの時まで秀綱を名乗っていたとされ「信」は信玄から送られたものだという（『甲陽軍鑑』）。

義輝に上覧する前年、信綱は南都の宝蔵院に胤栄を訪ね、柳生宗厳とも試合をしている。廻国修行の詳細は諸説あってはっきりしない。伊勢神宮への道すがら宗厳の噂を聞いて大和に向かったというものや、京洛の途中で北畠具教を訪ね、胤栄を紹介されたという説もあるが、この出会いは新陰流発展に重要な役目を果たしている。

試合は胤栄と宗厳のどちらも軽々と打ち込まれた。宗厳はまず信綱の高弟である疋田文五郎と立ち会ったが勝てず、信綱には三日三晩の試合を挑んだが手も足も出なかったという。「畿内一」と言われた宗厳もこれには驚き、信綱に入門を請い、一行を柳生の郷へ招待した。

翌年2月、義輝に呼ばれて上洛する直前、信綱は宗厳に奥義である「無刀取り」を課題として与えている。宗厳はその後免許皆伝となり、新陰流を伝えていった。

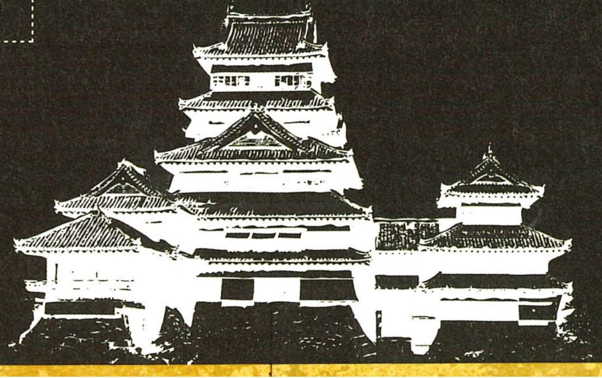
## 主家の滅亡から一武将の道に決別し、剣の道へ



# 兵法流派系図

日本の剣術を遡るとそのほとんどが
「念流」「神道流」「陰流」の3つにたどりつくことから、
この三流派は「兵法三大源流」と呼ばれる。
これに「中条流」を加えて「兵法四大源流」と呼ぶこともある。

- **念流**【念阿弥慈恩】
  - 念首座流【赤松三首座】
    - 馬庭念流【樋口定次】
- **神道流**（別名:天真正伝香取神道流）【飯篠家直】
  - 新当流（別名:鹿島新当流）【塚原卜伝】
    - 一羽流【諸岡一羽】
      - 微塵流【根岸兎角】
        - 神道一心流【櫛淵宣根】
    - 霞流【真壁氏幹】
      - 天然理心流【近藤内蔵之助】
    - 天流【斎藤伝鬼房】
      - 山口流【山口卜真斎】
        - 無外流【辻月丹】
  - 天真正自顕流【十瀬与三左衛門長宗】
    - 示現流【東郷重位】
- **陰流**（別名:愛洲陰流）【愛洲久忠】
  - 新陰流【上泉信綱】
    - タイ捨流【丸目長恵】
    - 奥山神影流【奥山公重】
      - 真新陰流【小笠原長治】
        - 直心流【神谷直光】
          - 直心正統流【高橋重治】
            - 直心影流【山田光徳】
        - 無住心剣流【針ヶ谷夕雲】
    - 柳生新陰流【柳生宗厳】
    - 疋田陰流【疋田景兼】
- **中条流**【中条長秀】
  - 冨田流【冨田長家】
    - 鐘捲流【鐘捲自斎】
      - 一刀流【伊藤一刀斎】
        - 唯心一刀流【古藤田勘解由左衛門唯心】
        - 小野派一刀流【小野忠常】
          - 梶派一刀流【梶新右衛門】
          - 中西派一刀流【中西子定】
            - 天真一刀流【寺田宗有】
            - 北辰一刀流【千葉周作】
        - 伊藤派一刀流【伊藤忠也】
          - 溝口派一刀流【溝口新五左衛門正勝】
            - 甲源一刀流【逸見太四郎義年】
        - 鏡心一刀流【横田豊房】
      - 厳流【佐々木小次郎】







# 同時代の剣豪たち

## 江戸時代

1900 1850 1800 1750

| | | |
|---|---|---|
| 1856 | 1793 | 千葉周作 |
| 1864 | 1798 | 男谷信友 |
| 1871 | 1798 | 斎藤弥九郎 |
| 1852 | 1814 | 島田虎之助 |
| 1899 | 1823 | 勝海舟 |
| 1885 | 1825 | 桃井春蔵（4代目） |
| 1865 | 1829 | 武市瑞山（半平太） |
| 1863 | 1830 | 清河八郎 |
| 1894 | 1830 | 榊原健吉 |
| 1863 | 1827? | 芹沢鴨 |
| 1863 | 1832 | 田中新兵衛 |
| 1877 | 1833 | 桂小五郎（木戸孝允） |
| 1865 | 1833 | 山南敬介 |
| 1872 | 1834 | 河上彦斎 |
| 1868 | 1834 | 近藤勇 |
| 1869 | 1835 | 土方歳三 |
| 1867 | 1836 | 坂本龍馬 |
| 1888 | 1836 | 山岡鉄舟 |
| 1877 | 1838 | 桐野利秋（中村半次郎） |
| 1865 | 1838 | 岡田以蔵 |
| 1867 | 1839 | 高杉晋作 |
| 1915 | 1839 | 永倉新八 |
| 1868 | 1842? | 沖田総司 |
| 1915 | 1844 | 斎藤一 |
| 1867 | 1844 | 藤堂平助 |
| 1869 | 1844 | 伊庭八郎 |

## 戦国時代

1650 1600 1550 1500

| | | |
|---|---|---|
| 1571 | 1489 | 塚原卜伝 |
| 1577? | 1508? | 上泉信綱 |
| 1606 | 1527 | 柳生宗厳（石舟斎） |
| 1629 | 1540 | 丸目長恵 |
| 1653 | 1560? | 伊藤一刀斎 |
| 1628 | 1565 | 神子上典膳 |
| 1645 | 1584? | 宮本武蔵 |
| 1612 | 1595? | 佐々木小次郎 |
| 1638 | 1599? | 荒木又右衛門 |
| 1650 | 1607 | 柳生三厳（十兵衛） |



撃剣会之図（国立国会図書館蔵）

伝説の剣豪 その凄業

# 物語の中の必殺剣

いつの世もファンをとらえて離さない
時代小説の名作に描かれた伝説の剣客たち
読者を魅了した「秘剣」の数々を振り返る



## 円月殺法

ダンディズム溢れる作風と映像的な描写
面妖なる必殺剣が月夜の静寂を破る

『眠狂四郎』シリーズ◉眠狂四郎



剣豪小説を国民的エンターテイメントへと押し上げた柴田錬三郎。虚無と無頼のダンディズムをまとった市井の剣客が暗躍する様を描く一連の『眠狂四郎』シリーズで剣客ブームを巻き起こした。

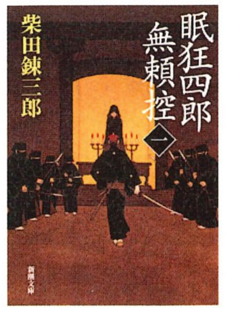
主人公・眠狂四郎は、ころび伴天連と武士の息女の間に生まれ落ちた封建社会の鬼子である。その出自故、世間の日陰を歩きながら、腐敗しきった武家社会と俗に塗れた町人世界の醜さを深く憎悪し、悪人達に正義の剣をふるっていく。

「冥途の土産に円月殺法、御覧にいれよう…」の名台詞を伴って繰り出される必殺剣「円月殺法」。抜いた刀を満月を描くように一回転させる剣の動きに焦らされ、思わず切り掛かってくる敵を一撃で迎え撃つ。一見隙だらけに見える狂四郎の構えに、相手は誘われるかのごとく先手を取るが、狂四郎のカウンターは一太刀にして相手の息の根を断ってしまうのだ。

フィクションにおける「秘剣」の代名詞ともいえるこの面妖にしてクールな技、それは刀法というより、一種の催眠術というべきものだろう。闇に怪しく煌めく刀身は、幻惑的な効果を発揮して相手の冷静な判断力を失わせる。或いはゆっくりと旋回するその刀は、瞬間的に相手を「眠り」に導く。

真剣勝負における心理的な駆け引きをデフォルメしたともいえる「円月殺法」だが、その誕生にはこんなエピソードが存在する。自らの出生の秘密を探るべく長崎を訪れた狂四郎。その帰途、船が嵐に巻かれて難破する。偶然泳ぎついた孤島に住む無名の老剣士に狂四郎は師事し、その無明の境地ともいえる剣の高みを伝授された。

週刊誌上での読み切り連載というスタイルと、濃厚で起伏に富む「シバレン」の筆致は国民を熱狂させた。エンタメ歴史小説の嚆矢となり、何度も映像化されている。




柴田錬三郎著
『眠狂四郎無頼控』(全6巻)
新潮文庫

## 必死剣 鳥刺し

息を潜め、トリモチで捕えるように…
無我の境地で電光石火に急所を突き刺す

『隠し剣孤影抄』◉兼見三左ェ門

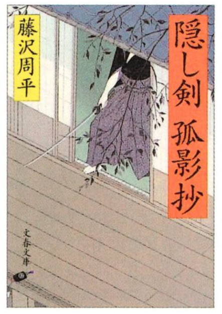


「必死剣 鳥刺し」は藤沢周平の歴史小説『隠し剣』シリーズに収録された短編のひとつ。

東北の小藩に仕える兼見三左ェ門は、悪政に疲弊する藩を憂い、その元凶である藩主の側室を刺殺する。打ち首を覚悟した三左ェ門だが、下された処分は意外にも軽かった。僅か一年で閉門は解かれ、中老・津田民部の推挙により近周頭取への沙汰を受ける。その裏には、三左ェ門の剣の腕で、藩内に蠢く不満分子から悪政を改めぬ藩主を守ろうという思惑があった。

天心独名流剣術の使い手であった三左ェ門。その秘技「必死剣 鳥刺し」は、自らをあえて絶体絶命の境地に置き、敵の油断を突いて一矢報いるという究極の技である。気配を殺して距離を詰め、死角からトリモチを突き出して鳥を捕えるように、近づいてきた敵を電光石火の速さで突き刺すのだ。

藩主と津田の陰謀に気づいた三左ェ門は、津田の息が掛かった多勢の藩士たちと最後の死闘を繰り広げる。四方から太刀を浴びせられ、遂に息絶えたかに見えた三左ェ門。既にその脈は止まっている。ほくそ笑む津田が接近したその刹那「死んだ」はずの三左ェ門の刀が津田の急所を貫く——。




藤沢周平著
『隠し剣孤影抄』
文春文庫

## 無明逆流れ

血で血を洗う死闘。盲目跛足の美剣士が
繰り出した奇にして烈なる魔剣

『駿河城御前試合』◉伊良子清玄



「残酷物」と呼ばれる作風を確立した南條範夫の衝撃作『駿河城御前試合』。虚実ないまぜの設定と凄絶な死闘の描写、その陰惨極まる物語の展開は読者を魅了した。のちに漫画『シグルイ』『無明逆流れ』の題材ともなった問題作だ。

寛永六年、駿河城内で開催された上覧試合では、血と死臭が漂う11番の真剣勝負が繰り広げられた。

第一試合。隻腕剣士・藤木源之助に相見えるのは、盲人にして右足に障害を持つ伊良子清玄。同門に学び「一虎双竜」とも謳われた二人の対決は、様々な因縁が交差する文字通りの死闘となる。

かつて、師・岩本虎眼に両目を斬られ盲人と化した伊良子。この美貌の剣師が繰り出す秘剣が物凄い。剣をまるで杖のように地面に突き立て、不自由な右足の指で刀身を挟むという異形の構え。そこから、剣の軌道上に相手が入った瞬間、垂直に刀を振り上げて敵を切り裂くという無類の奇手である。

刀が大地を蹴る反発力を利用した伊良子の光速の斬撃は、師が編み出した横一線に首をなぎ払う一刀必殺の技「流れ星」をも凌ぐスピードと殺傷力を秘める。「無明逆流れ」と名づけられたその魔剣に、場内の観衆はわななく——。




南條範夫著
『駿河城御前試合』
徳間文庫

**斬っても斬っても斬り足りぬ剣士の宿痾**
**人斬りの業を乗せた虚無の刃が残酷に舞う**

## 音無しの構え

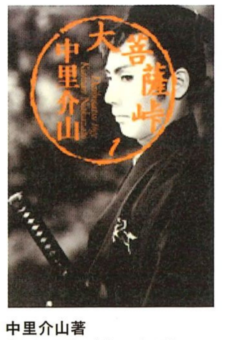
『大菩薩峠』◉机竜之助

孤高の文豪・中里介山による一大巨編。ただ斬りたいから人を斬る——己の快楽のためだけに無差別殺人の妄念に取り憑かれた男の遍歴を軸に、数多の登場人物が入り乱れ、その業のままにあてどなく彷徨する様を描く。

物語は幕末の世、甲州裏街道の大菩薩峠で虚無の剣客・机竜之助が起こした斬殺事件から始まる。剣術師範の父のもとに生まれた竜之助は、天才的な剣の資質を有する一方、その残忍で身勝手な性格から、長ずるに及んでは躊躇なく人を殺める辻斬りとなっている。

その剣風もまた、ニヒリスティックな様相を呈するもの。「音無しの構え」とは、竜之助が常に刃を合わすことなく、無音のうちに相手を斬殺してしまうことからそう呼ばれる。その顔色は白く沈みきり、全くの無表情で心の動静を一切相手に悟らせない。構えを青眼(中段)に取ったまま微動だにせず、業を煮やして相手が襲い掛かってくるところを制して、一撃で息の根を止めるのである。

人はただ斬られ、遺された者は永遠の怨毒に苦しむ。その未完の巨編の底流には、人間の業を見つめる作者の透徹した眼差しと、仏教的な無常観とが横たわっている。



中里介山著
『大菩薩峠』(全二十冊)
ちくま文庫

**鍔に隠れた相手の指を切り落とし**
**戦闘不能状態に陥れる究極の「勝ち技」**

## 親指切り

『秘剣』◉早川典膳／細尾長十郎

芥川賞作家・五味康祐の歴史短編。封建社会の掟を破り、本能のままに生きた武士の哀切を描く。

舞台は江戸初期。孤児として育った九州小笠原藩の藩士・早川典膳は、義兄弟として育った細尾長十郎とともに剣術師範代となる。世の太平ムードに飽き足らぬ血気盛んな典膳は、とある事件を起こし、藩の面目を潰したとして外出禁止を言い渡されてしまう。

上役の目を盗み、山中のあばら屋に潜んで孤独な修行に明け暮れ、神技ともいえる「秘太刀」をあみ出した典膳。それは、相手の右親指を切り落とし、剣の扱いを不可能にしてしまうという恐ろしい技だった。典膳は、その秘術を幼馴染の長十郎にも伝授する。

掟を破った重罪人として切腹を命じられいきり立った典膳は監禁先で大目付を襲い逃走、次々と重臣たちを襲い、親指を切り落とす。

苦悩の中、典膳の邪剣を正すべく決意した長十郎。遂に典膳と刀を手に相見えることになる。怒りと憎しみの徒となり果てた典膳は相打ちとなった長十郎を斬殺する。事切れる直前、長十郎は「俺の勝ちだ…」と囁く。そう、典膳の親指は長十郎の「秘太刀」により切り落とされていたのだった。



五味康祐著
『秘剣・柳生連也斎』
新潮文庫



**一撃にして敵を断つ座頭市の逆手斬りは**
**勝新によって「完成」させられた**

## 逆手居合

『座頭市』シリーズ◉座頭の市

不世出の大役者・勝新太郎のライフワークともいえる連続時代劇シリーズ『座頭市』。子母澤寛(しもざわかん)による掌編連作『ふところ手帖』所収の一篇、「座頭市物語」を原作としているが、主演の勝自身が大幅な脚色を加え、様々な肉付けを施しながら、原作とは全く異なる座頭市像を作り上げた。

座頭市の代名詞といえば、細身の刃を忍ばせた仕込み杖による一撃必殺の居合術だ。刀を逆手に掴んだまま敵にぶつかるようにして抜刀するという、いかにも劇的に思える技だが、逆手で「抜く」というのは、実際にいくつかの古流剣術流派の形にも残っている。一発で決まらなかった場合、柄を持ち変えるロスがあるため、いわば捨て身の大技ともいえるだろう。

仕込み杖は勝新の発案によるもので、原作では座頭市の武器は長ドスとされていた。

海外での評価も高く、勝が演じる座頭市は、日本の時代劇を代表するキャラクターとして世界中で愛された。ハンデを抱えながらも、命がけで悪をなぎ倒していく孤高の人物像に自らの置かれた境遇を重ね合わせたキューバ国民には、特に熱狂的に支持されたという逸話が残っている。



子母澤寛原作／勝新太郎主演
『座頭市 DVD-BOX』
角川エンタテインメント

**竜巻が生み出す真空の刃が悪党を襲う！**
**当時の少年たちがこぞって真似た必殺無刀技**

## 真空斬り

『赤胴鈴之助』◉赤胴鈴之助

父の形見の赤い胴がトレードマークの少年剣士・金野鈴之助。日本一の剣豪を目指す鈴之助の活躍と成長を描いた、少年漫画史に残る名作である。

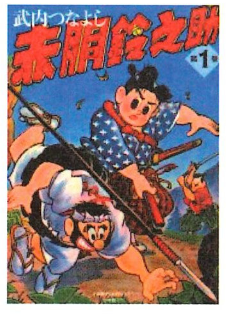
幼くして剣技に優れた鈴之助は江戸へと向かい、亡き父の友人であった北辰一刀流の開祖・千葉周作に弟子入りする。

周作とその娘・さゆりが見守る中、兄弟子達とともに厳しい修行を続ける鈴之助。その頃、江戸では悪の集団・鬼面党が幕府転覆を狙い跳梁跋扈していた。鬼面党から天下を守るため、やがて鈴之助は周作、兄弟子の竜巻雷之進とともに剣を携え立ち上がる。

鬼面党との激しい闘いに明け暮れる鈴之助。更なる剣技を求め、周作の紹介で飛鳥流に学んだ鈴之助は苦心の末に無刀の必殺技「真空斬り」をあみ出した。

素早い手の動きで空気の渦を起こして真空状態を作り、剣を用いずに相手を一気になぎ倒すというなんとも豪快な手刀の技だ。物語の後半では、両手を交差させながら同時に空気を斬ることによって「真空斬り」の倍の竜巻を起こす「十文字斬り」へと進化する。

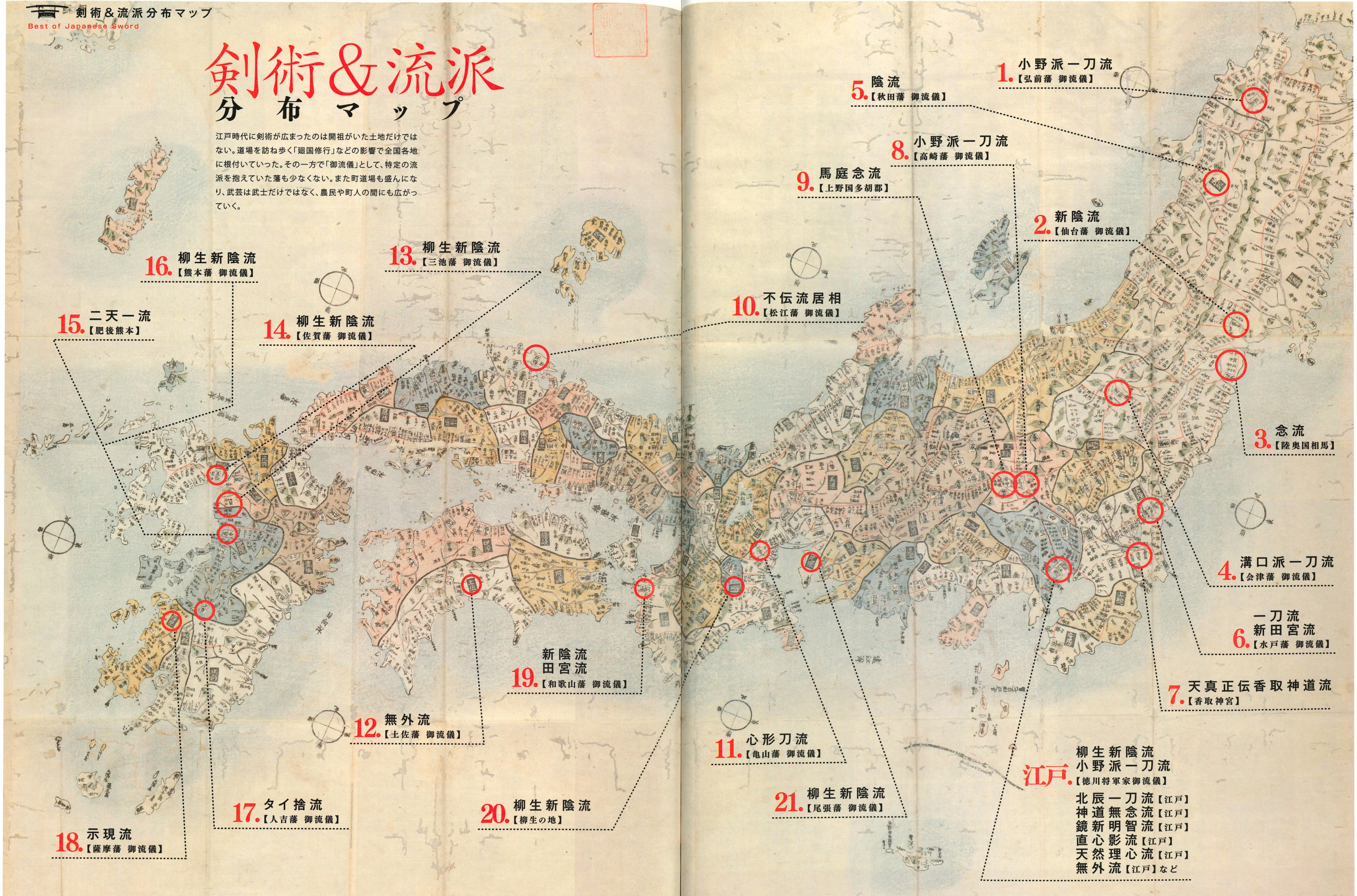
ちなみに、鈴之助のモデルは千葉周作本人であるとの説もある。



武内つなよし著
『赤胴鈴之助』(復刻版／全5巻)
小学館クリエイティブ

# 剣術＆流派 分布マップ

江戸時代に剣術が広まったのは開祖がいた土地だけではない。道場を訪ね歩く「廻国修行」などの影響で全国各地に根付いていった。その一方で「御流儀」として、特定の流派を抱えていた藩も少なくない。また町道場も盛んになり、武芸は武士だけではなく、農民や町人の間にも広がっていく。




大日本國全圖（国立国会図書館蔵）

にちぶんMOOK

# 剣豪

## 流派と日本刀

幕末江戸三大道場と志士たち

**参考文献**

『決定版 日本の剣術』(学研)
『図説・日本刀大全』(学研)
『図説・日本刀大全2　名刀・拵・刀装具総覧』(学研)
『江戸・幕末を切絵図で歩く』伊東成郎(PHPエディターズ・グループ)
『講武所』(東京市役所)
『剣の達人111人 データファイル』(新人物往来社)
『幕末!最後の剣豪たち』(宝島社)
『江戸の剣豪列伝』(主婦の友社)
『柳生一族　将軍家指南役の野望』相川司／伊藤昭(新紀元社)
『剣豪 その流派と名刀』牧秀彦(光文社)
『宮本武蔵ー「兵法の道」を生きる』魚住孝至(岩波書店)
『宮本武蔵と「五輪書」』(徳間書店)

**協力**

北辰一刀流玄武館／神道無念流有信館／東條會館
寳山寺／奈良女子大学附属図書館／福岡市博物館
埼玉県立歴史と民俗の博物館／霊山歴史館
土方歳三資料館／高知県立坂本龍馬記念館
財団法人島田美術館／東京都立中央図書館特別文庫室
東京国立博物館／国立国会図書館

平成27年4月20日発行

**発行人**　中村誠

**編集人**　西島和彦

**企画制作**
カワイオフィス

**編集**
山崎亮

**執筆**
伊藤英理子、坂茂樹、佐々木康陽、末永文男

**装丁・デザイン**
森瑞

**撮影**
岡宮龍

**表紙写真**
「国宝 童子切安綱」「国宝 梨地糸巻太刀」
(東京国立博物館蔵、Image:TNM Image Archives)

**発行所**
株式会社日本文芸社
〒101-8407
東京都千代田区神田神保町1-7
(編集)03-3294-7164
(営業)03-3294-8944
(広告)03-3294-8937

**印刷所**
図書印刷株式会社



KENGO

A faction and a Japanese sword